中央公論

第拾六年
第壹號

要目

THE CENTRAL REVIEW

謹賀新年

祈讀者諸君之幸福
尚希將來之愛顧

明治三十四年一月元旦

東京市神田區裏神保町
合資會社富山房
同雜誌部
（電話本局一〇三六）

雜誌目錄

史學雜誌　月一回發行
史學界　同上
社會　同上
言語學雜誌　同上

新刊書

▲日本陽明學派之哲學
文學博士井上哲次郎先生著
全一冊　定價金一圓四拾錢郵稅十二錢

▲日本偉人傳
合資會社富山房編輯所編纂
全一冊　定價金一圓貳拾錢郵稅金拾貳錢

同
▲ふざんぼう日本地誌
理學士山上萬次郎先生編

▲新撰大地文學
右三冊發行　四卷 五卷 六卷
定價金五拾錢郵稅各六錢

同
▲新撰大地誌　第三卷 南北米之部
定價一圓卅錢郵稅金拾二錢

▲日本文典
藤井籛先生著
定價金九拾錢郵稅金拾錢

▲國史要
文學士伊東尾四郎先生著
定價金五拾錢郵稅金六錢

▲東京風俗志（中卷發行）
平出鏗次郎先生著
定價金八拾錢郵稅金六錢

寳捌　神田小川町一　寳永館　其他全國各地書籍店

● 本月中に限り直接御注文は郵稅不要

東京帝國大學
文科大學教授
文學博士中島力造先生新著

現今の哲學問題

洋裝全一册　定價六拾五錢　郵税不要

本書ハ中島教授ガ斯學者ノ爲メニ現今ノ哲學ハ如何ナル問題ヲ攻究シ科學道德宗教ト如何ナル關係アルモノナルカヲ明示セン爲メ著サレタルモノナリ筆ヲ『哲學とは何ぞや』ニ起シ『宗教と哲學との關係如何』ニ局ヲ結ビ全篇十章凡テ講演躰ニ極メテ平易簡明ニ論述セラレタル書ナレバ初學者ト雖モ一讀蔗境ニ入リ其妙味ヲ悟ルヲ得ベシ大方ノ諸士一本ヲ講ヒ机右ニ置カハ裨益少シトセサルベシ謹テ茲ニ本書ノ新刊ヲ告ク

東京日本橋區吳服町一番地
發行所　普及舍

中央公論

本號目次

西太后自筆の梅花



(七年前西太后還暦賀の時自畫)

學術と宗教

我國學者の任務

文學博士　高楠順次郎

世界人類の幸福多くは宗敎の勢力に依る、宗敎は實に閑處の光明なり、精神的悟樂の奧府なり、されど是れ唯その信仰せる者に於て然るのみ、その敎義の天啓を信せず、其經說の神理を認めざる者に於ては、宗敎の光明たり、悟樂たる所以の實を見ざるなり、されど予は尙云はんとす、我が學術社會は實にこの宗敎に依りて、かの一文不知の信仰者よりも、かの大悟徹底の高僧よりも、一層宏大なる幸福を享受せるものなることを。

凡、學術が宗敎に感謝すべきもの誠に夥し、世界の文學は、宗敎の力に依りて起り、宗敎の力に依りて發達せし者多く、その美術の進步、保存、亦宗敎の力に依る、歷史領土の闇黑は多くは宗敎に依りて、若くは宗敎の保存せし文書に依りてその光明を得、世の哲學、科學、亦宗敎の外被を蒙り、人心を開導し、世道を補足せしもの亦少しとせず、一言以て之を說かば、世界人文の開展は、直接に若くは間接に宗敎に負ふ所多し、凡、我々が見て以て人道の美處、文化の標幟と爲す所のもの、多く宗敎の領土に非るなし、宗敎の將來に於て必然るや否やを知る能はずと雖、宗敎の過去に於ては實に如此の現象を呈せり、この偉大なる過去を有し、護持の恩義ある宗敎に對し、敬意を表するは實に學術界至當の本務なりと謂ふべし。

理具吠陀（リグベーダ）十萬頌、印度五千年前の思想を包含す、歷史は之に依りて上古生民の有樣を說き、言語は之に依りて豐富の材料を得、哲學、宗敎の起原、發動之に依りて始めて明かなり、之れあるは波羅門敎か五千年間口々相傳の力に依れり、巴利（パーリ）語一切藏敎は佛敎に依りて保存せらる、佛敎なくば我々は巴利語の過去に存在せしを認むるの道なきなり、ジャイナ敎書、アベスタ文學皆この類なり、近くは本朝文學の淵源、奈良美術の眞相如何を觀察せば、その佛敎に依る所多きを知らん

その他我國文化の佛教に依りしこと多きは、今事新らしく述ぶの要なし、之を知らざるものは實に歷史を知らざるものなり。

學術は宗教に依り偉大の幸福を受けたり、學術界は宜しく宗教に敬意を表し、感謝の意を致すべきなり、されど學者は宗教を信奉すべしと云ふにあらず、僧侶に膝を屈せよと云ふに非ず、襟抱平恕、器量虛融、唯學術に忠なるの精神を以て、その宗教文學を講究し、その原料を精査し、その眞價を評定し、一般學術に資すると同時に宗教者をして自教に關する先輩の誤謬を排擠せしむるを務むべきなり、馬翁の云へる如く、宗敎は他の社會組織と同じく隨時改善を要するものにして、釋迦若し今日に再現せば必佛教改革の率先者たるべきなり、而して眞正の改善は、學術的地礎を有せるを以て該旨す、學術は自己究明の功果に依り宗教を導ひてその改善の實を擧げしむべきなり、學術界眞個の任務此に於て完しと謂ふべし。

學術は國民の品位を高むるを以てその至上の目的とす、過去に於て現時に於て、人心を支配すること此の如き宗教をして、その過去を學習し、その眞價を知り、その任務を自覺せしむ、その功能果して幾何ぞや、之を知らすして之を冷評し、之を究めずして之を罵倒せんとするは、學術界にあるもの、宜しく誡むべき所たり、而して宗教家に於ては學術講究に對し、反抗の態度を示すの無謀たるを自覺し、徒に現下の情實に染まず、一意自教の歷史を究め、教理の純淨を期圖するに注意し、宗教上諸般の問題解釋の上に於て、學術界貢獻の結果を利用せんことを務むべし、是れ實に宗教者が學術に對し拂ふべき任務の一分たるものなり。

第十九世紀東洋學の全部悉く是れ宗教文學の講究にして、印度優婆尼沙土哲學書、波羅門教の吠陀文學、波斯火教のゼンド、アベスタ文學、巴利語佛教文學、梵語佛教文學、支那道儒の諸學、加ふるに各國譯經文學を以せす、殆ど耶蘇教以外宗教の全部を盡せりと謂ふべし、學術の宗教に盡せるもの、宗教の學術に資せるもの亦多く、英國東印度會社は馬翁に勸めて理具吠陀全集を上梓せしめ、暹羅國王は馬翁の手に依り、佛教聖書集を出し、牛津大學も亦高額の資を投し馬翁をして東方聖書集を譯出せしむ、露國聖波得堡大學は大乘佛教の原本一切を印刻せんとし、龍動巴利語佛書會社は南方佛教の三藏を出版す、宗教文學の講究殊に佛教文學の講究は如此夫れ盛なり、この時に方りて、我國

の如きこの方面に於て、豊富なる材料を有し、浩瀚なる文學を藏せるものは、一分藏經の內容を精查し、譯經文學の眞價を查定し、その調查事項を分類編纂し、世界の學術界に貢獻すべきは勿論にして、學者個人の本務として、また國家全躰の責職なりと謂ふべし、至高の學術講究府たる帝國大學も又之に盡すべきは本然の任務なりと謂ふべし。

現今世界に存せる佛敎文學は實に左の如し。

- 散斯克(サンスクリット)聖典（紀元前第一世紀結集）
  - 西藏語聖典（紀元六百三十二年譯出）—蒙古語聖典（紀元一千三百十年譯出）
  - 支那語聖典（自紀元六十七年至千六百年譯成）—滿洲語聖典（紀元一千七百七十二年譯出）
- 巴利(パーリ)語聖典（紀元前第三世紀現在）

以上六種の聖典中、サンスクリット及パーリ兩文學は、歐洲學者已にその講究を始め、其進步著しく、我々をしてその盛大を羨ましむるものあるも、悲むべし、自餘四聖典は、講究尙その緖に就かず、到底學者の力を借らざるべからざるは明白なる事實なり、今若し漢譯三藏の內容を調查し、西藏語聖典を支那に得て之を照合し、加ふる蒙古、滿洲をも得たらんには、他國に於て曾て企及すべからざるの大業を完成し得べきなり、其の漢譯は藏經のみにても、我國は實に宋、元、明、淸、高麗の五種完本を有し、加ふるに本邦撰述縮刷大藏經の存するあり、黃檗山の藏版あり、前後十一回の一切藏經印刻中、七種の我國に現存せるは我國學術學界の光榮にして、至上の國寶なりと謂ふべし、而して內容を調查するは、我國學者に取りては左まで至難の業に非るも、若し歐人に一任せば百年を費すもその完成決して望むべきに非ず、我國學者にして一たびサンスクリット及パーリを學び、轉じて、西藏語を學ばゝ、文法の關門稍通過し難きに似たるも、その內容は一々漢と擇ぶなし、蒙古、滿州古語は、實に西藏語若くは支那語の直寫にして、その勞甚少し、されど一々の學者皆この六語に亘るの要なしその一二を究むるも尙可なり。

要するに我國學者は、如此好地位に在りて、如此好材料を有す、而して、この學術的講究の任務を企ふする能はず、また歐洲學者の糟粕に安んぜは、我國學術の光輝何れの日か歐洲の中心に達せん、是れ實に我國學者の意氣地なきを世に表白するものにして、我帝國大學の威望を損じ、宗敎者はその無能力を示し、國家はその自覺心なきを示すものなり、帝國東洋學會の創設

豈偶然ならんや。

長屋改良論

安部磯雄

一、長屋制度の發達

長屋とは一建築物の中に數個若くは數十個の家族を宿泊せしめ、各家族は全く區劃せられたる數個の室を占有して敢て混居せざるの制度をいふ、我國に於て長屋といへば直に貧民を聯想することとなるが抑も長屋制度なるもの文明の進歩に伴ひ來る社會的現象にして、歐米諸國に於ては中等以上の人士にして倘ほ長屋生活を爲せるもの少からず、吾人は先づ長屋制度の發達し來りたる由來を說かん、都會の膨脹するに從ひ地價の暴騰するは人々の普く知る所なるが、一坪幾百圓乃至幾千圓と稱する地に於て矮屋を建て、周圍に充分の空地を遺すが如き容易になし得べきことにあらざれば、なるべく廣大なる家屋を建築し、其層を高くして以て占領せる土地の割合に多くの居室を得んとするは自然に都人士の爲す所なるべし、之に加ふるに都會修飾の點より言ふも、表通りと稱すべき街路の兩側に不揃の矮屋立ち並ぶが如きは頗る外觀を傷くることとなるを以て、國家は法律の力に依りて家屋の建築に充分なる制限を加へ、政府が規定したる模型に從ふにあらずんば新に家屋を建築することを許さゞるに至るなり、彼の獨都ベルリンに於ける家屋が同模型によりて造られ、街路の兩側に行義正しく整列せるが如きは其好實例として見るべし、されば經濟上及び修飾上の二大理由によりて都會の家屋が漸次小規模を棄てゝ大規模を採るに至るは文明諸國何れも其軌を一にして、吾人はこれを以て文明進歩の度を量る一種の標準と稱するを憚らざるべし、茲に於てか一家族にして一家屋を專有するは甚だ稀にして、多くは資本家によりて建てられたる大家屋の一部を借りて住居することゝなるより、小都會に於ては一家を構へて一家族の用に供せるもの甚だ多しと雖も、大都會に於ては數十萬弗の資財を有する人にして倘ほ長屋生活を爲し居るもの少からず、例せば北米の大都會ニューヨーク市の如き、長屋の全數三萬七千、之に住する人民の數實に百二十萬にして即ち全人口の三分の二は長屋生活をなせるものといふべし、獨都ベルリン市の如きは全市殆んど皆長屋にして、堂々たる日本公使館も僅に或廣大なる建築物の一層を借れ

るのみにて、公使も其中に長屋生活をなしつゝあるなり、されば長屋なるものは必ずしも貧民の住居にはあらず、數年乃至數十年の後には我東京市に於ても長屋制度の發達を見、中等以上の生活を爲す人々も續々長屋生活をなすの日あるに至らん、吾人は高等なる長屋の增加につきては聊かも憂ふる所なしと雖も、これと共に發達し來る下等長屋に對しては豫め警戒を加へ、現今已に存在せるものに對しては相當の改良を加へんことを望む、以下歐米諸國に於ける下等長屋の情況を陳べ、併せて其改良の方法を說くは、聊か經世家の參考に資する所あらんと欲するが故なり。

二、下等長屋の情況

都會に於ける地價の騰貴は實に驚くべきものありと雖も、これを家賃の騰貴に比すれば未だ以て甚しとは言ふべからず、地價の騰貴は家主が家賃を增加ずるの好辭柄にして、地價が一割の騰貴をなせば家主は家賃を增加すること二割に及ぶなり、生存競爭の法は最も貧民に酷にして、彼等の爲に長屋を建築せる資本家は多く高利貸的人物なるが故に、貧民は比較的富人よりも多額の家賃を拂ひつゝあり、高等長屋の所有主は通例年一割位の利を以て滿足すれとも、高利貸的の長屋所有主は二割以下の利子を以て滿足せず、中には三割以上の利子を收めつゝあるものありといふ、聞くロンドン市に於ける貧民の百分の八十八は家賃の爲に所得の五分の一以上を拂ひつゝありと、而して此等の貧民は斯る不廉の家賃を拂ふて如何なる居室に生を送りつゝあるかといふに、衞生上、道德上實に言ふに忍びざるものあり、殘酷なる家主は唯利を收むるに汲々たるが故に、空氣の流通、光線の照射等に意を用ゆることを爲さず、段階の破損したるも顧みず、上階にて使用する水の滴り落つるがごとき事あるも容易に修繕せず、全く窓を有せざる暗黑の寢室などあるは決して珍らしき事にあらずして、甚だしきは一家族七八人のもの僅に一室を借り、茲に飮食し起臥するものゝ少からずといふ、此の如き長屋生活も氣候涼しき時に於ては割合に苦痛少かるべきも、一たび炎天金を鑠かすの候に際すれば其慘狀筆のよく盡す所にあらず、死神の手は常に彼等の上に在りて、殊に遠慮なく幼兒を奪ひ去るなり、更に翻つて道德上の感化如何を見るに、下等なる長屋生活の厭忌すべき理由一にして足らず、抑も道德の修養には多少閑靜なる境遇を要するものなれば、一大家屋に數個乃至數十個の家族が同居するに至りては

其の喧嘩紛亂は決して免るべからざるなり、貧民の妻が井戸端會議を開き、人を批評し罵詈し、さては喧嘩をなすといふが如きは長屋制度の特産物にして、人類は其社交的性情を有するに拘はらず、あまり接近して生活を營むは却つて德性を養ふ上に害あり、若し各家族何れも一家を有して生活をなさんか、彼等にして相容れざる性質あらば交際せざるまでの事なり、然れども貧民長屋に於ては此の如き別居主義を實行する能はず、厭ふべき人とも毎日幾たびか面會せざるべからざるが故に、終には喧嘩騷亂をも生ずるに至るべし、貧民長屋は或意味に於て犯罪者の製造所なり、ニユーヨーク市に於ける或長屋には四百八十三人の貧民住居しけるが、四年間に法律を犯したるもの百二人を出したり、更に同市に於ける凡ての下等長屋より出す所の犯罪者は毎年四萬人の多きに及ぶといふ。

三、長屋改良の氣運

下等なる長屋の社會に存するは恰も汚水の街上に溢れ居るが如きものにして、啻に其外觀の醜なるのみならず、衛生上、道德上恐るべき黴菌を伏藏せるものなるが故に、これが改良の必要あるは素より言ふを待たざるなり、歐米諸國に於ても長屋改良の必要を叫ぶに至りしは比較的近世の事にして、近日に至りては改良の氣運益々熟したる者の如し、我國に於ては既に板垣退助氏長屋改良の事を唱へしが、吾人は必ず遠からざる將來に於て我國經世家の思慮を促すべき一大問題とならんことを信ず、左に掲ぐる記事の如きは素より仰山らしく述べ立つる程の價はあらざるも、社會の改良は往々些少の事より始まるものなるを見れば、あながち看過すべきにもあらず。

○○○○○○貧民協同ホテル　本所區花町十九番地木賃宿中井平八は同區横川町十七番地に間口三間半奥行十間の長屋を造り其中央を道路とし左右に間口六尺奥行九尺の座敷を十九個造り一ヶ月家賃造作附とも七十錢より一圓までにて貧民に貸與へる由にて其名は貧民協同ホテルと云ふいかめしき者なり我等は斯る計畫の富者強者の手より出でん事を待ち設け居たりしもの冷淡なる彼等は黄河の水の澄む時あるも貧民の爲に一掬の涙をも揮ふべきにあらず貧者は貧者同士にて自衛の策をなし富者強者と對抗せざるべからず

（明治三十三年十二月九日萬朝報）

是れ木賃宿にして長屋にはあらざるが故に、これを以て長屋改良の實例として見るべからずと雖も、兎に角從來の木賃宿と全く異りたる構造を創めたるが如きは、吾人これを改良の一端として認むるに躊躇せざるなり、將來我國に於て長屋改良を唱ふるものは先づ豪

西諸國に於ける改良事業の現况を知るを要す。

四、個人的改良事業

ロンドン市に「ピーボデー、ツラスト」會と稱する長屋改良を目的とせる團躰あり、同會は慈善家ピーボデー氏が長屋改良の爲に寄付したる金を基本とせるものにて、其事業の廣大なること恐くは他に其比類なかるべし、ジョージ、ピーボデー氏は千七百九十五年北米合衆國マサチユセツト州の一小邑に生る、家極めて貧なりしが爲め幼時ボストン市の某商家に入りて小僧となりしも、勤勉正直の結果漸次に地位を得終に立派なる實業家となりぬ、彼は巨万の富を得たる後ロンドンに轉住し銀行事業に從事せしが、益幸運に祝せられて終に大富豪とはなりたり、然れども彼は普通の資産家にてあらざりき、彼は生涯無妻主義を守り更に子孫の爲に慮るの必要なかりしを以て、善く集めたるの財産を善く散ずる方針を採りたり、彼が公共事業の爲に寄付したる總額は七百餘万弗を下らざるべしといふ、而して彼が最も盡力したるは長屋改良にして、彼は先づロンドン市の貧民窟と稱すべき土地家屋若干を買收し、不潔なる家屋を一掃して模範的長屋を建てたり、今「ピーボデー、ツラスト」會に屬する改良長屋に就き其構造の大略を示さんに、家屋は通例四五層にして四角形に建築せられ中央には廣濶なる空地ありて小兒の遊戯場に宛つ、概して建築の有様はこれを獨都ベルリンの家屋に比するを得べし、一家族毎に二室或は三室を借るを得べく、二家族につき一個の便所と、七八家族につき一個の共同洗濯場の備あり、洗濯場は毎日交替にて用ゆることを得べく、雨天の日には容易に洗濯物を乾かし得るの裝置をもなせり、空氣の流通、光線の照射等には充分に注意を加へ、暗黒なる部屋などは勿論斯る改良長屋に於て見出すこと能はざるなり、此の如く諸事行屆きたる長屋にして其家賃は幾何なるやと問へば普通の相場よりも三四割低廉なりといふ、然れどもピーボデー氏は斯る長屋を何人にも其人物を撰ばずして供することを好まず、其恩澤の獨り善良なる貧民にのみ及ばんことを願ひて、借家人に左の三ヶ條の規則を嚴守せしむることゝなしたり、即ち借家人は第一飲酒せざること、第二喧嘩せざること、第三國法を犯さゞること是なり、ピーボデー氏は實に此の如き精神を以て改良事業の端を發きしが、彼の死後其事業は益擴張せられて、今や「ピーボデー、ツラスト」會は一千万弗以上の固定資本を有し、年々家賃として徴收する所のもの

六十万弗以上に達せり、ロンドン市に於て長屋改良事業に從事せるもの「ピーボデー、ツラスト」會の外に尙ほ三個の大なる團躰あれども、其事業の現況及び方法は何れも大同小異なれば茲にこれを記するの必要を見ず、唯吾人はオクタビヤ、ヒル孃の名を紹介するとに止むべし、彼は博愛界に於ける一の明星にして、貧民の友とし言へば誰にても先づ彼の名を思ひ浮ぶべし、彼はロンドン市に於て數個の摸範的長屋を有し自ら之が監督の任に當れり、借家人の爲には美麗なる庭園を設け、書籍室、音樂室等を備へ、斯くて便利なる家屋を給すると共に、精神的の利益及び快樂をも分ち與へんと勉めつゝあり、是れ百尺竿頭更に一步を進めたるものにあらずや。

五、國家的事業

國家事業として長屋の改良を實行しつゝあるは蘇國のグラスゴー市なりとす、同市は獨り長屋改良に就て他の諸市に勝れるのみならず、其市政の整頓せること實に地球上有數の都會なりと稱するを得べし、交通機關といひ、下水事業といひ、衞生事業といひ、社會改良家の模範とすべきもの實に尠からず、同市は長屋の改良と共に木賃宿の改良をも實行せり、アルバート、ショー氏が「市政論」に於て佛都パリを以て歐洲大陸に於ける都市の模範となし、グラスゴー市を以て英國に於ける都市の模範とせしは誠に故ありと謂ふべし、グラスゴー市は長屋改築の爲め殆んど一萬有餘の不潔なる矮屋を買收し、これを一掃して模範的長屋を新築したり、原來市の計畫は單に貧民窟に於ける家屋及び土地を買收し、其矮屋を掃蕩したる後、再び其土地を廉價に拂ひ下げ私人をして長屋を新築せしむるに至りしかども、私人のこれに應ずるものなかりしが故に市は自らの手を以て之を實行するに至りしなり、而して市がこれの爲め投じたる費用は實に五百五十萬弗の多きに達せりといふ、グラスゴー市は木賃宿改良の爲にも八十七萬弗以上の大金を抛ちしが、市の經營は鞏固なる基礎の上に立ち居るが故に、市は長屋よりも木賃宿よりも每年諸入費を引き去りたる後ち尙ほ資本に對して若干の利子を收めつゝあるなり、吾人は市政の整頓せる都會がグラスゴー市の事業を摸倣せば必ず其効績の顯著なるべきを信ず、たとひ市自ら長屋改築の事に當らずとするも、法律を以て長屋の建築法を一定し、以て貧民を經濟上、衞生上、道德上の弊害より救ひ出すは市が當に爲すべきの事と言はざるべからず、數ヶ月

以前にニューヨーク州知事は（今回副大統領に撰擧せられしルースベルト氏）ニューヨーク市の長屋改良に付き立案せしむるため十五名の委員を撰擧したりき、委員には各方面に於ける有名なる人物を擧ぐることを勉めしを以て其中には、法律家、建築家、社會改良家、慈善事業家、長屋所有者、代表的勞働者等あり、彼等が調査の目的は如何なる建築法を用いなば衛生上最も完全なる長屋を得べきかに在れば、知事が彼等の報告を容れ、法律の力を以て摸範的長屋の構造を一定するの曉には、其効果の及ぶ所決して少小にあらざるべし。

六、長屋改良の將來

我國に於ける長屋改良は個人的事業に依るべきか、抑も亦國家的事業に依るべきか、吾人は玆に多くの辯論を費すの暇を有せざれども、我國の事情に鑒み、外國の經驗に照し見れば、長屋改良は國家の力を借りて始めて容易に且つ滿足に成就せらるべきを斷言せんと欲するなり、今日は最早政府が表通りに於ける長屋の建築に付き取締法を出すべきの時にして、長屋の改築といふよりも寧ろ家屋全躰の改築に付き永久の大方針を定むべきの時なりとす、矮屋は何時にてもこれを毀つを得べきも、大厦高樓に至りては之を建つるに多くの費用を要するを以て毀つにも亦容易ならざる所あり、されば我東京市に於ても漸次廣大なる家屋の建築を見るの今日に當り、速に法律を以て摸範的建築法を示すは必要の事なりと信ず、是れ經濟上より言ふも、將た亦修飾上より言ふも當然の事にして、殊に銀座通の如き處に於ては法律を以て矮屋を建つるを禁ずるとゝなし、新に建築を出願するものには三層或は四層の煉瓦造若くは石造に限り許可するとゝなさば、我首都に於ける建築も漸次に一新するを得べし、數週前時事新報の社説に於て東京市が人口の少なき割合に廣大なる土地を有するは家屋建築法の當を得ざるに因るを論じ、若し二層若くは三層の家を造らば今日の面積にても尚ほ二三倍の人口を有つを得べしと説破したるが如きは、頗る吾人の意を得たるものにして、吾人は今日の東京市を以て大都會と言ふよりも寧ろ小都會の集合なりと稱するを適當と信ずるなり、然り家屋建築の改良は將來我東京市に於て必ず起り來るべきの問題にして、若し家屋の發達を自然の經過に放任し置かんか、一方には都市の外觀を傷くると共に、一方には高利貸的家主が粗雜にして不健康なる長屋を造築するに至らん、

吾人は十年若くは二三十年の將來を見渡して我首都に長屋制度の跋扈することを疑はず、歐米の諸國は已に苦き經驗を有せり、吾邦人が其覆轍を履むも、或は彼等の經驗に鑒みて、其禍を未萠に防ぐも、其責任一に經世家の双肩に在り、吾人が彼等の爲に聊か材料を供するは深く吾東京市民の幸運を祈る處あればなり。

書窓の慘劇

（試驗の弊害を論ず）

權藤震二

嗚呼、此の如きは是れ社會の罪と謂はん歟、抑も亦た敎學の弊と謂はん歟。

都下幾百千人の青年子弟をして一大火爐の裡に沒頭し焦頭爛額、相枕して往々死滅せしむ、夫れ子を生みて聰敏、之を育して長成、更に之を敎ふるに文字を以てし家産を傾けて辭せず、而も桃李の顏を送りて灰白の骨を迎ふ、老ひて子に養はれず却て之を葬り、徒に其聰敏を語り其勉强を憶ひ、煢々倚るなきものあらざる乎、既に學ひ、既に婚して或は子あり、而も十年未た書窓を脱する能はず、前書に病を報し後電に訃を傳へ、春閨夢裏の人をして直に斷粧剃髮せしむるものあらざる乎、人生の慘劇、書窓の慘劇より慘なるはなし、況や無形は人を傷け無形は人を殺し、打鐘焚香せしむるもの其數を知らず、小にして一人一家、大にして一國一社會の慘毒を蒙ると更に甚しきを見るをや。

支那の積弱を論するもの即言ふ、科學殺人と、科學の人を殺すや固より獨り支那の事のみあらず、我邦の科學即ち文官高等試驗の如き、外交官試驗の如き、判檢事辯護士試驗の如き、曾氏の所謂、所レ學非レ所レ行。所レ行非レ所レ學の弊は越しと雖も、邦家の積弱を致すに足るものは確に有之、我邦の科學、やがて支那の科學、支那の科學やがて我邦の科學といふも、固より極言にあらざるなり、科學殺レ人、これ豈に一大火爐にあらさる歟、これ豈に一大慘劇にあらさる歟。

近時書生の淵叢たる法律學校等の實狀を看よ、此等諸校の學生は學校の課程を修了したるのみにては、高等文官、判檢事、辯護士となるを得す、必すや別に政府の登用試驗に應するの要あり、隨て此等書生は（進取の氣象なく自暴自棄して斷念するものを除くの外）學校の試驗を終へ、更に政府の試驗に應せさるべからず

、爲に短きは一二年、長きは六七年の書窓的生活を卒業後に送るを常とするなり、書窓的生活固より擯斥すべきにあらず、然ども此間の書窓的生活は修學の爲にあらず、而して應試の爲なりとすれば一考せざるべからず、試驗科目の示す所に從て年々同一の註疏を繰廻し、精を竭し力を盡して登第を僥倖するのみ、其の修學の修學にあらざるは勿論、唯た一種の書窓的生活と謂ふの外なし。

毎年高等文官、判檢事、辯護士等の試驗に應するもの數千人の多きに及ふも、登第の榮を荷ふものは幾何もあらず、或は二三回にして倘登第せざるものあり、五六回にして倘登第せざるものあり、試驗を以て其の生涯を終るもの比々皆然り、年々歳々屈せず撓まず、場に上りて的を射んとするは、其志堅からざるにあらず、其事嘉すべからざるにあらず、然とも彼等が法律を學ひ政事を學ひたるは、官吏、辯護士となるの外に目的なしと謂はゝ、予は大に其愚を笑はざるを得ざるなり、但し社會の僻習と教學の不備とは、書生をして火爐の中に入らしむることを忘るべからず、子弟の笈を負ひて鄕を出づるや、其父老は單は學得て人となるを願はずして、官吏となり辯護士となりて歸らんとを望むにあらずや、學校に入り師に就くも、法律を學びたる人、政事を學びたる人となるを主とせずして、官吏となり辯護士となるを主として教育せらるゝにあらずや、社會は倘官吏若くは官吏類似の職業を高尚とし、勞働を鄙しみつゝあり、書生が學得て之を體し之を用ふるを以て修學の目的とせず、政府の試驗に應し之に及第するを以て、修學の目的とするに至るも、亦恕すべきものなしとせず。

高等文官も、米搗男も、職業には高下の別ある筈なし判檢事が犯罪を檢察裁判するも、屑屋がボロを買ひ或は拾ひて之を選分くるも同一なり、辯護士が代言處理すると、三助が肩背の垢を流すと幾何の差あらんや、人上より之を言へば、同しく其生を營む所以の方法なり、社會上より之を言へば共に必要なる成分なり、我社會が官吏若くは類似のものを高尚とし、勞働を鄙むの誤謬なるとは、固より予が論を待ず、早晩風潮を一變し來るの望あり、而して官吏及其類似職業の外に、漸く書生の販路を開きつゝあるは、最近に於る我社會の新現象にして、誤謬なからも幾分か進歩し來れるを見る、而も書窓の中に久しく受驗科目を繰廻し、社會の趨勢を度外にせるもの多きを恨むのみ、

軍備擴張の結果、五万の壯丁は常備軍に徵集せられて、經濟界は勞働者の缺乏を訴へたり、受驗の爲に書窓に滯るもの、東京のみを算するも其數五六千に下らず、而も志氣あり才能あり學殖ある青年ならずや、社會が爲に失ふ所の損害固より尠少にあらず、加之、此の受驗的刻忍勉强は、毫も心身に益する所なく、精力を消耗すること尋常にあらず、或は爲に肺を病み、腦を病み、社會の廢人となるもの極て多し、之を其人の利害より論斷するも、十分の一、若くは二十分の一の成功を僥倖して、學費を糜し、精力を耗し、空しく有爲の日月を過るは、策の得たるものにあらず、幸にして登第するも、其所得、其職業未た必すしも滿足を表するに足らず、間々應試に志さずして、直に事業に就きたるものに却て成効あるを見る、勿論現狀に於て之を言へば、應試者は書生の俊秀にして、直に事業に就くものゝ如きは大抵劣弱の徒なり、若し俊秀なるものにして直に事業を求むるに至らば、其成効の更に著しきもののあるを豫想すべし。

今や銀行會社を首め、大小の商工業は、法律的思想あるものに支配を要求しつゝあり、一町一村も尚學得たる所の實用に苦まず、予は受驗者の爲にせる修學者に望む、速に書窓を破りて社會の活働方面に飛躍せんことを、これ子弟としては父兄に忠實なる所以なり、國民としては國家に忠實なる所以なり、人類としては社會に忠實なる所以なり、書生としては學問に忠實なる所以なりとす、予は敢て受驗を斥くるものにあらず、唯た受驗の登龍門外にも、別路の行くべき者あるを教るのみ、受驗も亦固より書生の一進路たると認むるなり、然れとも受驗を以て畢生の目的とし、科舉殺人の慘劇を演することなからんを希ふなり。

附言　予が知れる二三の例を舉んに、七八年前に予と交りたる一書生は、今尚辯護士受驗の爲に毎月廿餘圓の學資を擲ち、其妻は卷煙草の手工を以て之を助けつゝあり、年齡三十七八なるべく、前後受驗料として費せし印紙代は百五十圓に超えたり、又予が同縣の友人は、兄弟兩人共に法律學校を卒業し、同しく受驗の爲に三四年を費せしが、其家は古道具屋にて、父は六十七歲、母なし、活計甚た難し、依て兄の方は保險會社に雇はれ且つ其妻を離別し、弟をして專心受驗せしむること更に二三年に及へるも、未た及第せず、又予が同郷の某は、二十歲にして他家に養子となり、結婚後一週間にして上京し、法律

學校に入り、卒業前二子（暑中休暇に歸省したる結果）を擧げ、卒業後更に一子を擧げ、三回受驗して落第し、腦と肺とを病み、歸鄕して療養すること半ケ月にして死せり、養父母、實母、妻、三子饑餓を忍へり、其他此の如きもの、一々擧げ來らば限なかるべし。

相續論

河上翠陵

華族世襲の弊害＝世襲財產の不當＝富の門閥＝人の死亡と財產の還元＝遺贈を制限すべし＝ミル氏の遺贈制限論＝相續税と遺贈制限＝歐洲列國の相續税收入＝相續税と遺產制限とは併行するを要す＝我邦の登錄税＝我邦財政の困難と相續税

英才超群の士、家を興し顯榮の地に升る者、其の顯地榮門を長く子孫に傳へんとするは、人情の常なり。馬上三尺の劍能く王國を建てし者は子孫無窮に王位を傳へんとを熱望するは、古今の同じき所。されど天則は常にこれらの希望を認許せざりき。天は過去の死者をして現在の世界を支配せしむるを許さず。假令此の天則は一時行はれざることあるも、而かも天は早晩庸暗柔弱の者より權力を奪つて之を爲政の材能を有する者に附與す。庸愚無力の者が祖先の勳業を名として上層の地位に居るは決して天則の許さゞる所なり。古來泰西の歷史を閱するに、世襲の貴族が平民的分子を嫉て、全然他の社會と離隔せしめたるは、偶々以て自家の腐敗滅亡を速くに過ぎざりき。見よ、ボルボン王統の世襲政略は如何に其の朝廷をして暗愚腐敗、破倫、浮華の府たらしめたるかを。貴族世襲の制度は、貴族をして益々懦弱ならしめ、優柔ならしめ、暗愚ならしめ、而して終に救ふべからざるの腐敗墮落に陷らしむるは疑ふべからざるの事實なり。看よ、英國の上院には最早上流政治家の列席する者無きを。國家の指導者、國民の摸範は華冑の公子に非ずして硬直質朴なる平民なり。彼等貴族は常に平民を同族中に加へんと欲して巨網を張れり。太平民（グレートコンモナー）たるピットは此の網に陷つて人望を失へり。當年伯林會議に雷名を轟かしたるヂスレリーも亦此の網に羅せられてビーコンスフィールド公となれり。獨りヰルリアム、グラドストーンに至ては、斷然として爵位を斥け、平民の地位を完うしたり。惟ふに、グラドストーンが後世に尊敬せられ追慕せらるゝとピット、ヂスレーより大なるものあるは、實に其の

地位に安んじたるが爲めなり、古來將門多く將を出さず政治家の系統が二代三代に亘るもの極めて稀なり。英國に於てはピット父子相踵ひで政治家たり、米國に於てはアダムス父子相踵ひて政治家たるが如きは既に異數を以て稱せらる。二代の相傳すら既に異數なり。系統の賴むに足らざるや以て見るべし。由來天は門地閥族に與みせず。榮門權家の子弟は多く媮安遊惰にして權榮を荷ふに堪へず。而かも國法が此の輩を保護して强いて顯榮の地に居らしむるは豈に咄々奇怪に非ずや。夫れ人の發起點は同一ならざるべからず。人は各々同等の發起點より出發し、祖先の功勞を賴まず、門地の顯榮を恃まず、自己の功勞に依りて、門地を作し、權職を得ざるべからず、彼の世襲財產の制度を設けて、特に貴族の財產を保護するが如きは、是れ貴族をして、淫逸怠惰に陷らしむるものなり。彼等を淫逸怠惰に陷らしめて尙且祖先の財產を享有せしむるは、是れ豈に惰者、遊民を鞭撻するの途ならんや。是れ豈に社會をして愈々腐敗せしむる者に非ずや、是れ豈に國家をして衰亡に赴かしむるものに非ずや。惰者を千仞の谷底に擠すは是れ彼れを鼓舞鞭撻する最良の方法たるなり。吾人は今日に於て一躍直に貴族を全廢するの困難なるを認む。されど貴族世襲の制度を廢すとは必ずしも困難ならざるを信ず。吾人は敢へて漫りに貴族を輕蔑するものに非ず、されど他人の勳功に依りて貴族の地位に居る者に至ては大に之を輕蔑せざる能はず。若し勳章、爵位にして材能品性の標榜たらば吾人必ずしも之に對して相當の敬意を表せざるに非ずと雖も、彼の無能、無識、野卑、陋劣の輩が祖先の功勞に依りて享有する勳章爵位に至ては斷じて之を排斥せざる能はず。

階級制度は君主政治の下に於ける常態なり。共和政治の下に於ては階級制度なく、世襲的貴族なしと雖も、猶且つ國法が保護するの一門閥あり。何ぞや、曰く富の門閥是なり。夫れ先人の遺產を相續して巨萬の富を有し一事爲す無くして遊逸怠惰を事とするは、社會の一隅に大なる敗德腐敗の一階級を作るなり、人が自ら得たるの富は、多く其の人の材能勤勉を標榜するの記號として見るを得べし、されど其子孫たる者は先人の氣力材能勤勉なくして、特り其財產のみを相續するときは必ずや媮安に流れ姑息に陷り、惡習汚行の渦中に溺せんのみ。彼のセーフレが言へるが如く、財產は人躰の一部にして個人が己れの勤勞に依りて得るの有機

躰たらば、正當の手段に依るの畜財は必ずしも制限するを要せざれども、苟も其人にして死亡するときは、其財產の所有權も亦與に消滅せさるべからず。人の死亡は其財產の還元を意味す。靈魂の肉躰を去ると與に、肉躰は地中に葬らるゝが如く、財產も亦其所有者の死亡と與に、工業界に歸らざるべからず。人躰は地によりて成育し、復た地に歸る。財產は工業界より出てたるものにして、復た工業界に歸らざるべからず。或は曰はく、家族は人格の擴張したるものに外ならざれば、戶主死亡するの後、家族は隨意に遺產を處理するも決して不當に非ずと。されど從來に於ても國法は既に遺贈の權利を制限するの必要を認め、人類永遠共同の利害と衝突するの遺贈を許さゞりしに非ずや。一例を以て之を見んに、風俗を壞亂せるの書籍を出版せんが爲め若しくは隣邦又は外國の人民と戰爭を開くの用に供せんが爲めに、巨額の資金を遺贈する是れ全然無効の遺贈なり。故に遺贈の權利を如何なる程度まで制限すべきかの問題を討究するは決して失當に非ず。只之が正當なる制度を定め、又之を定むるの標準を立つるは稍困難の事に屬するのみ。遺言者の富度に應じて遺產稅を課するの方法は多くの學者の主唱する所なり。ミル氏の意見に依れば、遺贈者の遺贈すべき金額を制限せずして、受贈者の得べき金額に制限を付すべしと言ふに在り。換言すれば、遺贈者は己れの全財產を遺贈するを得れども、一人に遺贈すべき額は一定の度を超ふべからず。斯くの如くすれば、遺贈者の財產は如何に多きも死亡の後には幾多の受遺者に分割せられて、決して少數者の手に中集するの憂無し。吾人も亦ミル氏と同じく、受遺財產の制限せられんことを希望する者なり。夫れ富者の兒孫をして窮困の憂無からしめ、之をして安身立命の地を得しむるには、爾かく巨額の遺產を要するものに非ず。徒らに財を積んで子孫に遺こすは、却て子孫を遊蕩怠慢に陷らしむるなり。故に遺產を制限するは啻に社會國家の利益たるのみならず、抑も亦遺贈者自身の利益なり。

吾人の所謂遺產制限說は歐洲諸國に行はるゝ相續稅の賦課と異なり。相續稅は遺產の多寡に應じて之に賦課するの租稅なり。之に反して遺產制限は富の中集を防ぐが爲めに一人の受くべき遺產額を制限するなり、故に遺產制限と相續稅とは必ずしも幷び行ふべからざるものに非ず。一方に於て遺產を制限すると同時に、他方に於て此の遺產を相續する者に相當の租稅を課する

とは決して不當に非ず。否社會社策上最も緊要の事なりと信ず。されど現今歐洲諸國に於て相續稅を徴收するの國は甚だ少なからずと雖も、相續稅と遺產制限とを併するの國は全く之れ無し。試みにシャンツの財政雜誌及びグリューガーの相續稅論に依り、各國に於ける相續稅の收入を調査するに左の如し。

國名	年度	收入高
英國	自千八百八十一年至同八十八年一年平均	一五二、一五〇、〇〇〇マーク
白耳義	千八百八十四年	一六、四四七、二〇〇マーク
荷蘭	自千八百八十年至千八百八十四年一年平均	七、四二九、九〇〇フロリン
佛蘭西	千八百八十四年	一二三、五二八、〇〇〇相續稅 一七、九八七、五〇〇贈與稅 フラン
以太利	千八百八十七年	三三、〇〇〇、〇〇〇フラン
丁抹	千八百八十五年	一、三九〇、〇二四クローン
瑞典	自千八百八十二年至千八百八十三年一年平均	二二四、七〇〇クローン
普國	自千八百八十二年至千八百八十三年一年平均	五、三八七、一一九マーク
バイエルン	同上	一、七七五、八三三マーク
サクセン	同上	七九六、二三七マーク
バーデン	同上	六五九、八九六マーク

（此の統計は年度に於て既に陳腐に屬す、爾來各國の相續稅より生ずる收入は年々增加したるに相違なしと雖も、余は未だ新なる統計を得ざるを以て、止むを得ず舊統計を茲に揭ぐ、要するに歐列諸國が相續稅に依りて如何に多くの收入を得つゝあるのを讀者に紹介すれば足れり。）

歐洲列國の過半か相續遺產に課稅するは斯くの如し。されど吾人の見を以てすれば、相續のみに依りて貧富の懸隔を調和し、富の中集を防がんとするは謬れり、相續稅と與に遺產制限を實行せざるは、龍を描ひて眼睛を點せざるの憾なき能はず、例へば百万圓の財產を有するもの之を其一子に遺贈すと假定せよ、此の場合に於て單に相續稅（一割と假想す）のみを課するときは、其の相續者たる一子は九拾万圓の遺產を受くるを得るなり。斯くの如き巨額の遺產を一人に相續せしむるは決して貧富の懸隔を調和し、富の中集を防ぐの途に非ず、若し相續稅と與に遺產制限を實行せば、遺贈者は制限以內の財產のみを其子に遺して、其以外の財產をば、或は社會公共の事業に投じ、或は貧民救助の資に充つるに至らん。よし斯くの如き高尚なる目的に遺產を用ふる者甚だ稀なりとするも、或は之を親戚に分配し、或は之を朋友に贈與するに至らん。斯くの如くにして過大の富を一人の手に中集するの弊害初めて除去するを得べし。我邦に於ては未だ相續稅すら徴收せられず。唯登錄稅法なるものありて、左の如き輕少の

登記料を徴收するに過ぎず。

家督相續人　時代相當價格千分の五

遺産相續人　時價相當價格千分の十

贈與又は遺贈を受くる者時價相當價格千分の二十

是れ決して歐洲に行はるゝ相續税と其の性質を同うするものに非ず。殊に登錄價額の多寡を問はずして、盡く同率の登錄税を徴するが如きは不當の甚しきものなり、百圓の登錄を受くる者にも、百万圓の登錄を受くる者にも、同比例の租税を課するは、決して公正の徴税法に非ざるなり。吾人は斯くの如き不公平なる登錄税を廢して、歐米に行はるゝが如き相續税の賦課を望まざる能はず、相續税の賦課より更に一歩を進めて、遺産の制限を實行するに至らば、吾人の希望は始めて達するを得べし。

今や我邦の財政は方に困難を極む。內閣の更迭する多くは財政の困難の故を以てす。之を救ふの策は一方に於て過大の軍備を縮少するの必要なるは素より論を須たずと雖も、他方に於て好個の財源を求むるの要あるや、亦素より論無きなり。今や當局者は或は砂糖に課税せんとし、或は酒に課税せんとして、百方苦心しつゝあり、切に怪む當局者は何ぞ相續税を重課して、以て財政の困難を濟はざるか、相續税は實に社會政策上、公正に至當なる租税なり。

佛教倫理概談

前田瑟雲

佛教は、如何なることを說くものなるやと云ふに、中道と云ふことより外はないので、中道と云ふことは、淺義に之を云へは、所謂不偏爲義で、一邊に片寄らないことである、そこで佛教者は、物事を一邊に考へてはならないノヂヤ、世人は、佛教には、生死無常を敎へるものと思て居るが、決してソーではない、世間相常住とて、世界は少しも變らないものヂヤとも說てある、無常を知ると同時に常住を忘れす、常住と心得ると同時に無常とも心得て、常無常ドチラへも一邊に片寄て考へないのが、佛教の本理ヂヤ、若し無常と一邊に心得るときは、吾人は老少不定、何時死ぬとも分らぬから、無理に骨折にも及はぬと云ふ樣に、進取の氣象がなくなりて、所謂厭世的になる、又常住の一邊に片寄れは、不意の事に出遇て、狼狽せねはならぬのみならす、自然に我慾が募ることになる、所謂利己的に

なる、ヂヤによりて、常無常トチラへも片寄らすに、我身は老少不定、與に無常である、今此處に於て命終るも知れないと心得て、それと共に仕事に對しては、常住の思、即ち如何なる事も、その効力は、無にはならない、爲れは屹度それ丈の功能はあるもので、たとひ半分爲て死んでも、半分丈の効力は、社會に遺りて滅せぬものと心得てゆかねはならぬのである、ソーなると、我身に對して無常の觀念があるから、我慾が強くはならない、又仕事に對しては常住の觀念があるから、爲ても爲ずとも、ドーでも好いと云ふ樣なる厭世的放棄心は起らない、消極的に云へは、コーであるが、若し積極的に云ふと、我身の無常を忘れないから、生死の覺悟をする、生死の覺悟が付けは、不意の事に出遇て、狼狽はせない、又仕事の常住なることを知れは、遠大の志が起る遠大の志が起れは、小利小慾には目を懸ない、コーなると、實に立派なもので、所謂中道實相の行とは此事である。

差別平等と云ふも、亦前の常無常と同しことで、一邊に片寄ることになると、親も路人も、天子も平民も、日本人も西洋人も、區別のないことになりて、其極、路人を以て親を遇し、平民を以て天子を視ると云ふ樣になり、又外國も自國も同樣に心得る樣なることゝなる、之に反して、差別一邊に片寄ると、他人も皆畜生同樣に心得て、自分さへ好けれはよし、人はさもあらはあれと云ふ樣に、我利一方になるは、自然の勢である、そこで、佛教では、人類と云へる種性上からは、如何なるものも同一視して、少しも差別は見ない、一切衆生皆我子なりとまてゆくのであるが、今日世界へ生れ出たる因緣の上からは、又人人に皆區別を立てるので、天子平民、父母兄弟、夫婦朋友が、皆それ〳〵の因緣ありて、互に相關係をもつのであるから、天子は天子の樣に之を敬ひ、父母は父母の樣に之に親み、兄弟は兄弟、夫婦は夫婦、乃至外國人は外國人、自國人は自國人の樣に、區別を立てゝ相敬し相愛し相親てゆくのである、之を諸法住法位世間相常住と說て、差別の當躰に平等を忘れす、平等の當處に差別を心得て、常平等常差別であるのである。

中道と云ふことは、マー箇樣ナ譯であるが、併しなから、イツテも常無常片寄てはならない、差別平等一邊になりてはならないと執するのは、亦與實中道を得たものとは云へない、中道と云ふは、サヨーナ死物ではないので、圓活自在、物のほどあいを得てゆくことで

なくてはならない、依て時ありては、中は不中を義とすとも解釋することが、佛敎の中にはある、實に不中が中道であることがあるのである、世界の人心が、常住一邊に傾てあるときには、無常の理を說て之を矯ねはならぬ、是がやはりその時に在ては、ほどあいを得たのである、又世界の人心が、差別一邊に傾てあるときには、平等の說を唱へて之を救はねばならない、是もやはりその時に在ては、中道であるのである、從來佛敎にて、重に生死無常を說イた、是が右の譯合で、凡夫の執を拂ふのである、然るに、今日の人は、一概に佛敎とし云へは、無常ジヤと思て居るは、大なる誤解である、大乘の中には、却て重に常住の理のみが說てある、併し是もやはり、右の譯合で、畢竟論迷的の說で、その實、無常と限るでもなく、常と限るでもない、常無常二鳥雙遊とて、一邊に片寄らないのである。

近頃は、倫理宗敎に付て、世間の議論が中々賑であるが、先づ倫理に於ては、獨立自尊主義とか、社會本位說とかゝあるソーだ、孰れも一往道理のある說ではあれど、ソー一邊に偏しても、好いものでアローか、佛敎では、前申す如く、中道であるから、或る側で自尊主義であると同時に、他の側では他尊主義である、又或る側では社會本位であると同時に、他の側では箇人本位であるのである、併しながら中道と云ふが、その時のほどあいに契ふてゆくのであるから、實際上では、自尊主義が强ち惡いのではない、社會本位が佛敎の理に合ぬと云ふではないが、全躰の理論から云ふと、ソー一邊には云ふことは、出來ないのである、抑佛敎の倫理は、要するに報恩主義で、自身小我の念を離れて、報謝的に行をするより外はないが、その報謝の對境たるものは何物であるぞと云ふに、今日吾人の身邊を圍繞する所の物は、總へて皆吾人生活上に恩惠を垂れて居るもので、それ等が有機的に組織せられてある邊より云ふと、即ち國家社會である、國家社會が吾人の恩境なれは、之に對し、その發進を圖るが、報謝の行であるのであるが、然るに、個人と國家社會とは如何なる關係あるものかと云へは、その關係は極て密接なるもので、國家社會は個人の集合躰で、個人は國家社會の一分子であるのであれは、啻に吾人が國家社會より恩惠を蒙りつゝあるのみならす、吾人も亦他に向ては、恩惠を垂れつゝある一分子にして、他よりその發達を計られ、報謝せらるゝものたれは、個人としての行爲

を愼み、その品位を持たねはならぬ譯である、是がやはり亦國家社會へ對しての報謝となるのである、要するに、吾人は内に向ては、身を眞理に合せしむる樣に勉めて、臥しては衾に愧ず、行ては影に愧す底に、起居動作を愼み、人類たる品類を持し、外に向ては、國家社會の爲めに、その發達を企圖してゆくの外はない、併しながら、是も心地が大事で、心に利己的の念がありて、所謂爲めにする所ありては、佛敎の道德とは謂へぬ、恩惠を報謝するの心地になりて、名譽とか、利益とか云ふことを外にして、是ぞ我が本分の行なれと心得てするのでなくてはならない。

前述の如くなれは、孰れの主義も、皆此中へ含まれるのである、即ち吾人の身邊を周遭して在る物は、總へて恩境である邊より云へは、他尊主義てあり、吾人も亦他の爲めに恩境で、他より報謝せらるゝものと云ふ邊より云へは、自尊主義となるのである、又報恩として、國家社會の發達を目的として、萬事行ひを爲しゆく邊より云へは、社會本位であり、その國家社會の發達を目的として爲てゆくには、第一着に身を眞理に欲込て個人の品位を失はぬ樣に、言語動作を愼む邊より云へは、個人本位であるのである。

雜録

歳末年始の社會

山形　東根

◉歳末や年始と云ふのは、例年共定めなき世の定めであつて、遁がれ樣のないヿであるが、今度に限りて特別の趣味があるやうに感せらるゝヿがある。之れは畢竟十九世紀の終りで二十世紀の始まりと云ふヿがあるので、例年なれば其年、一歳限りの回顧が聯想するに過きないが、今度は一世紀百年間の回顧が聯想するので、非常に隔りがあるやうに思ふのである。併し十九世紀が終ると云ふ其の思想の中には、日本の歴史が聯想されるでなく、重もに西洋の歴史が聯想さるゝのである、德川時代と云へば三百年來で家康の時からなれば十七世紀より回顧が必要となる。第十九世紀を本邦歴史に見れば、十一代家齊將軍からであるが、歴史上格段なる特殊の基點かない、夫れで本邦歴史で早く

回顧の湧出するのは、家康以來とか、元祿時代後とか、若しくは明治維新後といふ時である、然るに十九世紀といふと直ぐに、ナポレオンといふ大立物より維也納會議、英國の改進、佛國の政變、さてはビスマーク、伊太利の三傑といふ風に續々と百年間の順序能く聯想し來るのである。之は何んでもない事の樣だが、十九世紀の終りとか二十世紀の始りとか云ふ中には、ドーも德川十一代將軍からの事が浮んで來ないで、ナポレオン以來の事が浮んで來るといふのは、西洋の世紀を常に用ゐるからで、從て西洋思想の勢力があるのを示して居る樣に思ふのである。

●偖て、今度の歲末年始には右の如き特別の感想があるが、夫は一言で盡せぬ故暫らく略して、社會的に少し歲末年始を見たらば餘程興味のあると思ふのである、簡短に一ツ二ツ正反對の社會觀を左に述べて見たい。

●歲末と云へば直ぐに厭味のある感じが出るのは、詰り貧乏で大人の人で、小兒は喜ぶばかりだ、大體は「金」といふ事に歸して居る、金が中心で惱みもし悔みもし恨みもし恐れもし走りもするので、當さに地獄の境界である、經濟界で最も變化の激しい時であつて一年間の總勘定時、苦しいのは當然である、明治二十年來昨三十二年に至る十三年間の重要品相場を見るに、例年共九月より騰貴して十一月が頂上、十二月は前月より少し安いが、一月が十二月より高い年は四ヶ年で、安い年が九ヶ年だ、十二月が一月より高い年は九ヶ年で、安い年は四ヶ年である、丁度正反對だ、明治二十四、五、及卅一年の三ヶ年は、上半季が高い例外があるが、十ヶ年間は九月以後が高いのである。

●それで物價は歲末の十二月は十一月より多少安い、之は少し位損さしても澤山集めたいからで、思ひ切つて賣買するからである、併し年始の一月に較ぶれば、年末十二月が物價高いのは通例だ。秋から物が高いのに總勘定と來る故、細民が困難する許りでなく色々の社會の人が弱るのである、そして歲末は金の集散が激しいが年始は消費が激しい、折角貯へたものを先づ年始の派手に費すのである。

●經濟界が左樣の風であれば、歲末は竊盜、放火、賭博、詐僞取財など云ふ財產に對する罪、少なくも財產を目的とした犯罪が多い、皆金錢が欲しさに種々心配するからである、年始は屠蘇に醉ひ、一杯機嫌で眞赤な顏で年始廻禮をする、陽氣で景氣をつけて居るから、

中々元氣が恢復した樣で毆打創傷などを始める、方々で飲食して錢が無くて費消拐帶をする樣になる、遊んで居るから面白半分又々賭博を始める。歲末と年始はそんな風に犯罪の傾向が變つて居るのは面白い。

◉寄席や演劇は東京では、中々盛んであるが歲末と年始で丸で變つて居ることが直く判る、芝居は餅搗芝居位で、歲末より既に春興行の噂ばかりて、寄席も暮の二十五日頃よりは休業する、此忙しいのに悠々緩々として遊樂に耽る譯に行かぬからである、然るに年始になると何れの寄席でも芝居でも客止めで、宿歸りの小僧から女子供まで澤山入込むので騷々しい次第である、本當の劇通は一月の方は好まぬ樣だ、まー女子供が上花客で、觀ると同時に飲み且つ食はんとする連中が餘りに多いのである、其他、觀物場でも何んでも娯樂に關する業躰は、歲末が不景氣で年始が大景氣である。

◉序でに寄席や劇場の東京の有樣を申したいと思ふ、明治三十二年度の調査では、東京市內の寄席營業者が百五十三、晝興行日數が一万六千六百九十七日、夜興行日數は四万三千二百〇八日、之に晝の入場人員は百十五万一千〇四十二人、夜の入場者は三百八十三万八千三百七十二人である、最も少なき所も一日一席に四十四人餘を入れ多き所は百五十餘人宛を入れる、若し東京府下のみを晝夜合計すれば五百二十三万七千六百二十七人が一年に寄席に這入た譯である、それで百六十九万五千餘の東京府下の總人民が一年に三回餘出入した割合となる。そして年始に入るのが非常に多い。

◉芝居も其通りで、三十二年度の調査では、大七、小十二で興行日數は三千八百三十日、看客總計は四百三十万九千九百七十九人である、大劇場では一日平均千四百五十餘人を入れ小劇場は一千餘人を每日入れる割合だ、合せて一日二千四百五十人に當る、そして矢張年始が多くして歲末は少ない。

◉寄席に入るに木戶錢と座蒲團、煙草盆代茶菓子など合せて一人十錢宛費すと假定すれば、東京市內のみで四百五十八万九千四百十三人あるから、百五十三の寄席の帳場には、四十五万八千九百四十一圓三十錢が拂はるゝ譯けだ、芝居の方は大小總じて一人を假りに五十錢費すと假定する、上等の方は二三圓を費すもあるが木戶許りで追込みや三階に行くもあり又一幕限りもあるから一人五十錢と假定するのだが、四百三十万九千九百七十九人であれば、實に二百十五万四千九百八

十九圓五十錢で、娯樂の爲めに拂はるゝ金も積れば中々多いものである。

◉東京の市立小學校全體で、三十一年度に收入した金額、則ち授業料や寄附金や何かで收入したのは、三十二万〇六百四十九圓で、支出したのは三十五万〇四百〇五圓である、下谷淺草本所深川などでは不就學者、貧窮者といふのが殆んど半分位といふヿであるが、寄席や芝居の爲めには右の如く拂ふて居る、敎育には寄席だけにも及ばぬ。

◉話が途ひ横に入り過ぎたが、結婚離婚に就て東京に於ける三十二年度の調査を見るに、結婚の多いのは三、四、五、六及九月で少ないのは一月と二月である、離婚は三月より五、六、七月に多く十二月と一月とは最も少ない、此現象は東京のみでなく全國に通ずると云つても宜いと思ふ。春秋の料理する品物が多い時を撰ぶ。盆夏の候は腐敗し易いといふやうな樣子で、集合も難儀だから婚姻も秋や春にする、歳末の多忙の時まで少し慣らして家內の樣子も分り、大に手傳ひをもやつて欲しいので、且つは秋高く馬肥ゆるといふ氣候で秋は中々多い、歳末で經濟上に激變のある時、悠々として結婚するも餘り氣樂過きる、離婚も其通りで、忙がしい節季には中惡くも先づ〳〵と堪忍して共働するので離れが少ない、年始は一年中に於て第一等に結離共少ないが之は當然であらう、正月は禮式の月で目出度い初春を愛づるのであるから、喜び事が既に充足して居る、之に加へて結婚までしては費用も過きる譯だ、又喜びの充足する際なれば、氣に合はぬとも新年のヿ故先づ何事も穩便にと云ふので、春まで離婚も控へるから、三月からドン〳〵多くなる。

◉死ぬるのは、歳末と年始の月は如何といふと、傳染病などは夏季であるから、勿論冬季に少ないので歳末年始の頃には、餘りないのである、呼吸器病は冬に多い、東京で明治二十四年より三十一年までの死亡調査を見ると、五月より八月まで漸次增加し、九月より十一月までは減じ行き、十二月より一月で更らに上進し二月三月は減て居る、之は全國とは云へないが、秋に下りて歳末と年始に上るのは、氣候の影響が與りて居る、仔細に見たならば歳末の煩悶悔恨恐惱の心的變化や年始の不養生なども與る所あるであらうと思ふ。一體歳末は心を苦め、年始は身を損ふのが通例のヿである。

◉精神作用で見ると歳末は、其人の職業や社會でも違

つて居て、一樣に云ふ事が出來ぬが、細民は最も苦痛の時で「金」問題では先づ多數の人士が苦勞する時といふてよからう、歲末に喜んで居るものは恐らく極少數で、宗敎家道德家なとは頻りに改心懺悔の方だが銀行家會社員番頭は皆走る、車も馬も飛び廻るには何れも「金」の問題である、それで少しの貸金でも取り立て、借りたものは返さねばならぬと云ふので、餘程平常よりは智慧を出して決斷を强めるのであるから、歲末は智の働が多い意も强いと云ふて差支ないのである、然るに年始は夕の鬼が禮に來る正月で、催促も暫らく見合はすから、隨分僞善も行はるゝが、目出度い〳〵にて濟み、先づ氣樂にする面白くするので情の社會であると云ひたい、二月になるとソロ〳〵智慧が廻り始める、歲末は鬼で年始は佛、前は地獄で後は極樂、前は智で後は情、少しの間に餘程精神上に變化があるのは面白いとである。

◉それであるから歲末には宗敎的のとが少ないが年始よりは俗的迷信の方が多いかと思ふ、苦しい時の神賴み、病あるものゝ唯醫を需むで、煩悶苦痛の中にも過去を悔恨し、將來に希望を抱いて居る、除夜の近くに從ひ漸次思ひ切りが付く故、落付く樣になつて來る、年始は神道風で淸潔、新鮮といふので改まる、其狀態は何の月にも見たいと思ふ位で、誰も好む所である、歲末のは厭世、悲哀、懺悔の分子が多く、年始は樂天、愉快、氣樂の分子が多い、併し前者があるから後者があるので、後者ばかりでは世の中は通れないのである。

◉歲末年始を風俗で見ると、誰も知つて居る樣に、衣服飮食とも全く相違して居る、歲末は勞働激烈の時なれば粗衣粗食は辭する所でない、汚れた衣服で生存競爭に奔走して居る、年始は春の裝ひで禮儀を重んじ女子供の着飾る時であれば、歲末とは全く反對だ、食物も歲末は粗麁で間に合せであるが、年始には酒や餅の類が澤山食さるゝので、消化の工合も違つて居る、歲末には燒芋や天麩羅、蕎麥などが賣れるが、年始には芋や汁粉は最も不景氣で、芋は例年高くなる時節である。

◉酒と云へば夏はブランデー、燒酎の樣な苛烈の方を愛するが冬は暖りを欲するので、燗酒が流行する、近來ビール燗酒の流行は恐ろしい程である、此酒の勢ひと年始を遊樂の好時節とする習慣とで、汚らはしい話だが、年始には一日二日三日の如き遊廓に遊ぶものが

非常に多い、是までは一月は二十三万人乃至二十四万人が嫖客となつて居るので、二十万金以上を消費した、之は東京の一部の事であるが全國に積れば非常な額である、然るに十九世紀の末年に於て、日本は娼妓の自由廢業を認許したので、九月以降十二月十五日まで、東京だけで一千二十六人の廢業者があつた、して見ると、三十二年十二月末の現在數六千八百七十一人を、三十三年末には五千八百四十餘人に減じさせたわけてある、其外のも計算すれば倘ほ多く減じて居るのである、左樣の事に連れて社會が大に之を卑む氣風を皷吹したから、三十四年一月の狀態は大に見るべきものがある、二十三万乃至二十四万の嫖客は、必ずないと思ふ、之のみにても例年と異なつた新年を迎へたと云つて宜い。歳末の嫖客は例年比較的に少ない、年始は第一等に多いのである。

◉娼妓と云へば、自由廢業以來、情死が減じたが、情死も十二月よりは一月は少ない樣に思ふ、精察の統計は出來ないが、是迄の所では左樣である、歳末には苦しいので情死しそうであるが、情死は歳末といふ經濟的狀態から苦しんで、やるのでなく、遊び續けて苦しい時にやるのが多いから、勞働者などか景氣の少し惡い時に多い樣である、年始は未だ目出度いといふ圍繞内にあるから、容易にない。日本の統計年鑑では情死といふとが能く分らぬ、追て入れるそうである。

◉自殺は、歳末よりも年始が少し多く、冬よりも夏が多いので、第一番に少ない月は、我邦では二月である、西洋では十二月より一月は少し多い、歳末は苦しいから死ぬ筈であるが、春になつたならば、ドーかしてといふ希望もあり、十二月は我邦などは仕事もあるから、ドーにか工夫おする、世間への躰面も暮に自殺といふては何たが如何にも弱い樣であるのであらう、併し此自殺には氣候から精神に影響するとのあるので、こんな事で一概に云ふとは勿論科學的ではないが、年始よりも歳末は氣が張つて居るのは當然で、希望もあるから少し躊躇して居る氣味もあるのであらうと思ふ。

◉政治の方より見ると、歳末は近來我國では各地方の縣會が開かれてあつて、壯士なども地方に出かけて、地方は忙はしいが、中央の議會は歳末は開院ばかりて、一月から賑かである、政治的腦充血は、年始から始まるのである、此制度になつて自由黨といふのが墮落してから、新年早々より變節、收賄、腐敗などの攻擊が高く、一年の風紀を彼等が、正月からして腐らして行

く、洵に惡るい年始になつて來たのである、十九世紀末の日本は十八世紀の英國と同じ樣に、國務大臣の破廉耻罪告發や、議員、市參事會員の收賄事件で、中央の大都府から澤山拘引せられたのは、十九世紀來の日本社會史を汚した頁で、實に汚らはしい歲末であつた。新年も亦政治舞臺より腐敗の空氣を皷吹せらるゝので今より何年目の歲末年始か能く政治的に快き時代に出逢うであらうか、特に歲末より地方議員が上京滯在するので、妾などを皆抱へる爲めに、年始より三月頃までは風紀を害し、女子を玩弄し、其身を汚すものを多くする。されば政治部面と議員の身の上の點から歲末年始の東京社會を見ると、一年中最も汚れた季節と云はねばならぬのである。

◉歲末の苦痛は今日の經濟のまゝでは、年々增加する外はない、苦痛の根原は「金」である故、今のまゝなれば貧富が的々懸隔して一方に苦まぬものも出るが夫は少なくして、他方に苦むものが多くなる、此所で社會問題や社會主義が叫ばるゝのである、餘り歲末の苦痛を多くすると、大鹽平八郎が時々現はるゝ樣になる、社會黨が勃興するに至るのは自然の勢で免れない。歲末で考へて貰いたいのは、富豪や大地主の諸君と、又社會黨諸君である。今日のまゝでは自ら地位を危くするのは當然である、宗敎家が飛出して來て、色々慰めた所で、歲末の苦痛は精神で爲くて物質であるから、實際に飲み食いの出來る社會的政策を施してやるのが必要である、衣食や借財で苦んで居る時に、極樂の說敎した所で無益である。

◉年始に際しても同事、上流者に少し考へて貰いたい、此頃某といふ富豪が藝妓を懷妊せしめたといふので先づ一時に五千圓を與へ月々二百五十圓宛手當として與ふると云ふとを聞いたが、彼等は一體社會的思想が乏しく、慈悲心がないので、宴會や賤妓の爲めには万金を抛つものが澤山あるが公共事業には費さん、年始などには宴會や何や彼や莫大の金を抛つが例であるが、少しは社會下層の人民に同情を寄せて派手な宴會など廢止して貰いたいのである。

◉歲末に快きもの少しある、それは田舍農家で新年の準備の爲めに、若い者が樂しそうに働いて無邪氣でやつて居る樣である、未だ熟練せぬ花嫁のウロ〳〵臺所の働きをして居る樣である、年寄りが神棚や佛壇を掃除して燈明を明るくして置く事である。厭氣を起すのは澤山だ、夜分晩くまで家主が長屋の細民共を催促し

て居る聲を始め、提燈をさげ草鞋や靴をはいて、書き出しを持つて廻る若者の頻繁に往來する光景である。ドーカ細民社會に歲末の苦病に少し年始の遊樂を加味してやる方策は、二十世紀の新舞臺で是非實行したいのである。之が社會政策といふのである。

教界の人物 一

哄堂隱士

教界人物なしと稱す、而れども今の世何の社界か果して人物なるものを有するか、世の所謂人物の如きものを求めば教界亦自ら其數に乏しとせず吾人は玆に「教界の人物」と題して聊か小評を試みんと欲す、其論の當否吾人の管する所に非ず、吾人は唯吾人の見る所に就て云ふ所あるのみ。

(一) 井上圓了氏 （哲學館主、眞宗僧侶）

眞理金針の始て世に出るや文學士井上圓了の名は哲學の名稱と共に宗教界殊に地方僧侶界を風動し電擊したり、爾來十五六年氏が漆の如き頭髮は稍く霜意を點したるの今日、氏は夫れ如何なる道途を行步し居るか、始め地方僧侶か期待せしが如く氏は佛門の勇將として人目を驚かす程の事業の見るべきなしと雖も着々として步一步社會に於ける地位と聲望とを占取せり、學者として時に或は投機學者と稱せらるゝも其講義は稍〻陳腐にして哲學館の學生にすら歡迎せられずと云はるゝも兎に角其言論文章は一種の意見を發し倘社會の耳目を打つに足る、其文學博士となりたる、實に論文を提出して得たるものゝ嚆矢、學者として極めて光榮あるものと云はざる可らず。

然れども氏は學者と云はんよりは寧ろ事業家と云ふべし、その渺たる一書生を以て哲學館を始めたる哲學書院を始めたる、大學出身の學士千有餘名殊に文學士の中、その事業的手腕に於て誰か又氏の右に出るものある、哲學書院は今や氏の關係を離れ、從て大に振はざるか如きも哲學館は基礎稍〻固く、都下私立學校の間に於て已に嶄乎たる一角を露はせり、而して是れ率ね氏が南船北馬地方人士を搖かし寄附金を把握したるの結果なりといふ、誰かその手腕の敏慧に佩服せざるものぞ。



吾人は氏を事業家なりと稱せり、然れども未だ必ず敎育家なりと許す能はず、氏は學校を製造するに堪能なれども人物を陶冶し人才を作成するに於て果して良工なるや如何、哲學館創立已降已に十有餘年を歷たり、人物を蜚出せる素より濟々として數ふべし、然れどもその人物なるものは果して氏が鉗鎚を蒙りて出でたるものなりや否や、蓋し氏は人物を涵養するに於て餘りに冷かなり、敎育者としては火に乏し、涙に乏し、冷靜水の如く事に當て能く利害の終始を察するは事業家の事にして敎育家としては尙別に要するものなからざる可らず、天は人をして二物を私せしめずと稱すと云へども此人にして是の如し、抑も亦惜しむ可きの至りならずや。

（二）岩本善治氏　（明治女學校長、基督敎信者）

基督敎界の人物に於て吾人は知る所尠し、唯岩本善治氏に於て半面の識あるのみならず、嘗て女學雜誌、日本宗敎等の諸書を閱し略、其人物の如何を知了せり。氏が一世の本領たる素より女子敎育に在り、其女學雜誌は言論機關にして明治女學校はその言論を應用する實習機關なり、女學雜誌は稍當年の元氣を失したるのみならず、其議論に於ても往々にして質實の態度を逸したるが如きあれどもその女學校は幾多の困苦を歷て氏が温厚篤實の氣風の下に發育し、巢鴨村盡きんと欲し樹密竹深の處、宛として一大家園を開き、入るものをして藹然春風に逢ふの心地あらしむ、而して氏は獨り其女學校の學生を敎育するに止らず、實に社會の女子を風化開導せんとするや切なり、その嘗て一身を捧けて廢娼論に致したるは何人も忘れざる所なるべく、今日娼妓自由廢業の頻々たるを見る、實に氏等の警醒歲を閱したるの結果なりと云はざる能はず。



蓋し氏は基督敎僧侶に非ず、唯深く基督敎を信ずるの人として人類の幸福を增進せんと期するもの丶如く、從て多數の基督敎者の如き偏僻陋固所謂宗派心なるものに於ては極めて冷靜なると共に、各種の宗敎は太だ尊重す可きものなるを信ぜるもの丶如し、故に氏は基督

敎者なるにも拘はらず虛心坦懷多くの佛者と交り、能く雲照律師の如き頑固老僧をしてその人物の温厚にして寛宏なるを稱せしめたり、嘗て催されたる佛耶二敎徒の會合の如き全く氏及び氏一派の人士の力に成れり、想ふに氏は故海舟翁に私淑するもの也、翁は能く公武間の橋梁となりて今日の明世を現出したりしもの、知らず氏亦佛耶二敎の間に處して能く社會調接の媒介を爲し得可きや如何。

氏、年齒未だ不惑に達せず、白面美髯温然玉の如し、今より已降その識見德學年と共に益熟し、宗敎界の偉人として大に發達せられんこと吾人の尤も氏に囑望する所。

(三) 内村鑑三氏 （「聖書の研究」主筆基督敎信者）

農學士中川太郎氏嘗て吾人に語て曰く札幌の同窓に内村鑑三なるものあり、常に試驗に先つの數日、書卷を抛て飄然去て北海の山川に放浪し、歸り來るも未だ嘗て試驗準備なるものを爲さず而して其成績は常にクラスの第一位を占めて誤らざりしと、後久ふして第一高等學校に不敬事件なるものあり事件のヒーローとして當時同校敎授たりし内村氏は至尊の聖像を拜せざりしの故を以て其職を免せられたるの事あり、爾來吾人は内村氏の天才の人となるとを知了したりしと共に頗る極端の人、不健全の人たることを想像するに至れり、想ふに氏か今日に至るまでの歷史は衝突の歷史也、氏や到處衝突せざるなし、衝突も亦時に當て可ならざるに非ずと雖も其是の如く衝突し衝突するもの、所謂社會の腐敗、個人の邪惡、氏をして衝突せざる能はざらしむものある可しと云へとも、其能く腐敗邪惡の間に處して平然進て已む能はざるもの、氏の人格に於て亦大に欠くる所あらざるなきか。

内村鑑三

氏は慥かに宗敎に對しても社會に對して一個の主義を抱くの人たり、而も其主義は人と一致し能はざる主義なるか如し、人と一致せしむる能はざるの主義は人をして一致せしむる能はず、氏は獨立を主唱するも弊然孤立の人をして已まんとすべし。

世には泣上戸あり、笑上戸あり氏の如きは即ち泣上戸の類也、その聞見するもの悉く不平不滿の料ならざる

なく、終日ブン／＼として怒り散らして止む、是の如き人に向て望む可きは唯攻撃論のみ、破壊論のみ、要するに消極論のみ、一度積極的事業に向はんか彼は到底其人に非ず、見よ内村氏は彼か如き學問を以て彼か如き見識を以て尚獨立女學校に主宰たる能はず、否獨立雜誌社すら解散して已みたるに非ずや。

是を以て曰ふ、吾人は氏の天才の尊重す可きを知ると共にその人物は極めて不圓滿不健全の人なるべしと想像すと、然れども悪を見ること蛇蝎の如く不正不義に逢ふては手を戟にして罵辱し去らずんば已まず、その言論文章は以て懦夫を起つべし、以て貪夫を廉にすべし、今日の如き不潔の社會に在て氏の如きは亦一防腐剤たるを失はず、唯藥は飯に非ず、之を常用するは愼むべし。

（四）釋宗演氏 （臨濟宗圓覺寺管長）

今の時に當て禪を云ふもの、先づ指を鎌倉に屈せざるものあらず、而して釋宗演氏は實に鎌倉禪の主人公たるもの也。

鎌倉の禪學は故今北洪川師に依て大に素人間に知らる氏は其後繼として今日の地位を得るに便なりしは勿論なから、年齒尚壯なる氏をして諸宿老を壓して獨り能く禪界の巨星たらしめたる自ら手腕の尋常ならざりしものあるを見る。



禪僧率ね無學也、偶二三佛學に通するものあれども世間の所謂新學問を脩めたるものに至ては寥々殆んどあるなし、故に門外の士にして偶、道を問はんとするも白眼徒らに棒を撫するのみにして所謂拖泥帶水易々機に應して提撕するの術に乏し、獨り氏は夙に英學を脩め、アメリカに遊び、印度に留學し、世界の大勢を略知すると共に才華煥發、縱横機を用ゆるの略あり、軍人の來るを見る、即ち軍人禪を說き、學生の來るを見る。即ち學生禪を說く乃至婦人小兒の來るを見る、即ち婦人小兒禪を說く、即ち氏か禪界の流行兒として今や大に素人間に重せらる所以なるか如し。

然れども客の多からんを欲するものは勢、價格に於て廉ならざる能はず、人は曰ふ圓覺寺は安賣をなすと、ヤス賣か、タカ賣か唯吾人は一周の參禪能く元良博士

をして參禪日記を公にするを得せしめたる氏の方術に驚くのみ。

氏、眼光爛々精悍の氣眉宇に溢る、談論極めて覇氣あり、吾人曾て市ヶ谷月桂寺に相見る、床上數壜のビールあり、紫氏と掩映として自ら異觀をなせり、只吾人薄緣未だ氏が顏赤く耳熱し醉音咄々その第一義諦を放叫するを聽かざるを憾となす。

曝背雜話

枇杷山人

◎土井贅牙文章經學一代の巨擘たりと雖も、深く自ら藏して濫りに賞音を求めず、曠達洒落人の知る所なり、余曾て其文を讀むに、奇奥古雅近世稀に見る所なり、因て以爲らく其詩も亦此の如くならんと、頃日贅牙齋詩稿五冊を獲て之を讀むに豈圖らんや、游戯三昧の筆を以て全稿を埋め、正始の雅音一篇も得べからざらんとは、讀過一遍口を開きて呆然たり、

◎贅牙の詩に就て殊に笑ふべきもの數篇を此に錄せん

散步

散步近村村又村。村々秋社鼓聲喧。兒童慣畏雙刀客。驚散村頭又一屯。

按摩

時險無人聽管絃。可憐雙掌寄殘年。欲知意氣揚々處。長笛一聲人竦肩。

繼山寓樓戲占

箇裡交歡多少恩。隔籬小阮典型存。叉竿高曬青天下。三十年來舊破褌。

別石川明卿

半世橫行賚蟹書。擔簦千里困何如。近來蘭製多奇器。那不屣乘蒸氣車。

塔世

屠氏居西獄氏東。二村風氣畧相同。西村少女能舂米。飼犬東村噬主翁。

代人

交態浮雲同一輕。讒門無復舊詩盟。纔煩二物問吾寢。內外深宵狗鼠聲。

讀傷寒論

元氣渾々老不銷陰。陽變理死年遙。苦教人世無醫藥。地獄天堂奈寂寥。

送酒井雄三郎赴學東京

前路才望殆未窮。瀛船乘個海東風。但教多讀無閒斷。

姓字何妨稱酒雄。

諸作殆んど這樣の風調を帶びざるは無し、されども滑稽詼謔の中慨乎たる其言、人の肺腑を刺すものあり、

秋山探館

紫馥黃芬潤々苔。爬羅萬衆不留孩。山中究竟人間似。毒菌猶張高傘來。

論學雜詠と題せる中に朱子を詠じて曰く、排擊終生何所擊、異端々的是同端、王陽明を罵りて曰く、幸而聲學傳猶未、劣盜曹溪不立文、物茂卿に係るものに曰く、不分餖生蛇足、更災梨棗幾非非、と其果聰斷明、千古の學者を歷詆して畏れず、而も能く其肯綮に中るの一斑を窺ふべし、經解亦必ず創見あらん、

◎聱牙の古詩長篇に至りては、佶屈聱牙鉤章棘句殆んど讀むべからず、されども體製稍調ひ、絕句の如く甚しからず、時には險韻を強押して人の勝を奪はんと欲するが如く、又は毎句の末に一の字を用ゐて數十句の多きに至るなど、才を衒ひ博に誇るに似たれども、其心決して名を求め譽を貪るにあらず、興付の到る所此狡猾を致すなり、

◎文人の詩は達意を主として聲調に拘々たらざれば必ず詩人の指摘を免れず、詩人の詩は聲調字句の末に心力を費して、性情を遣るゝがため、其意を索むるに及んで支離滅裂何の謂たるを辨ずべからざるものあり、故に文人の唾棄する所となる、是れ兩者共に免れ難き通弊なり、

◎然れども詩人の詩は人の稱する所とならずして、文人の詩能く人口に膾炙せらる、梁星巖は詩に於て近世の大家なれども、其詩の傳播賴山陽の天草洋兵兒謠諸篇の如きもの一篇を有せず、陽春白雪の詞終に俚耳に入らざるがため乎、否區々たる字句の微瑕を論ぜざれば、山陽の詩遠く星巖の上に出るは、少しく文字を解する者の必ず會得する所ならん、

◎試に星巖集を把て之を論せよ、全集を誦し了して何の感ずる所かある、山陽詩抄を以て之に代へば、翻閲未だ數葉に至らずして古今を憑弔し興亡の感に堪えざるものあらん、詩人の詩到底文人の詩に勝るを得ざるなり、

◎支那の詩を以て名を成す者、文章を作らずと稱すと雖も、我邦詩人の如く甚しからず、故に其詩も亦聲調を主とするも、猶脉理暢達人をして感發する所あらしむ、邦人の專ら詩を以て家に名くる者に至りては、全く文章の法を解せざるものあり、其支離滅裂一種の嘅

語となる固より其所なり、

◎巖溪裳川は當今詩壇の雄と稱せらる、而して他人の詩に附する數字の評語、往々意味の通せざるあり、頃日非敢誇示於人と書すべきを、不敢誇示於人に作る、一字の失全く其意味を異にす、此類擧げて數ふべからず、

◎裳川翁作る所の詩を讀むに、たゞ文字の整然列を爲すを見るのみ、平仄の其所を得たるを見るのみ、他に何物の存するを認めず、無意味の囈語を吐かんよりは、字句の生硬聲律の瑕疵は兎も角、聱牙の如く人の頤を解く方適に優れり、

◎許渾千首水、杜甫一生愁、とは古人の語僻を嘲けりたるもの、人々必ず性の僻する所、語の偏する所あり、聱牙の詩竹を詠ずるもの甚だ多し、今の詩人國分青崖は文章、社稷蒼々莽々等の字面を喜び、宮崎晴瀾は好んで天狗髑髏を用ゐ、北條鷗所は鷗字を濫用す、

◎李空同文を作るや、凡て地名官銜倶に時制に因り、古名を用ゐずと、是れ前人の歎賞する所なり、而して今日其詩文を慕ふもの、地名官名の稍不雅なるに遇へば、改めて他の字面を填す、浮見識笑ふべし、

◎黃河西來決崑崙、咆哮萬里觸龍門、是れ李太白無渡河の篇の冒頭、稍々詩を知る者の必ず記憶する所ならん、上野の釋清潭の詩を以て自負しながら之を知らず、頃日境野黃洋を調するに此句を引く怪むべし、清潭往者清國に遊び浙江道中黃河を渡るの作あり、一時同人傳へて笑柄と爲す、黃河と清潭何の宿怨ありて斯く相虐することと屢なるや、

◎宋の許洞諸僧を會して詩を賦す時、山水風烟竹石花草雪霜星月等の文字を用うることを禁ぜしに、滿座筆を擱して終に一詩を得ずと云ふ、此等の字面を禁ぜば今日と雖も賦し得る者亦無からん、

◎明の曹欽亂を爲せし時、人あり詩を作りて曰く、曹奴此日發顚狂、寇逮諸公死亦當、學士叩頭如犬吠、尚書鎖項似牽羊、萬安頓首稱三叔、恭順當兇戰一場、寄語滿朝當道者、將何面目見吾皇、と學士は李賢尚書は王翙、恭順は恭順侯吳瑾賊と健鬪して死を致すものなり、游戲に似て游戲にあらず、記實の詩能く史筆を補ふ、今日新聞に登載せる時事の諷詠往々此に類するものあり、

◎歌よみは下手こそよけれ天地に動き出されてたまるものかは』とは歌人を嘲けり得て妙なれども、今の詩人の心血を嘔出するもの天井の鼠も動かし得ず、槐南青崖等が圈點雨下、千古の絕調と稱するものも、豆腐一

ッに代え得難し、かゝる無川の事に心力を注ぐは愚の極なれども、三公不換此江山と安心立命の地を箇中に向て求むる者あり、蓼喰ふ蟲も好き〳〵なれば漫りに嘲笑すべきにあらず、

◎ざれ歌とて侮るべきにあらず『いつはりのある世なりけりかみな月貧乏神は身をも離れず』見そめつゝ今日よりものゝくわれぬは人をやこれをや戀と夕めし』脇差のくされわひたる中なれば思ひきるにも切られざりけり』佛にも彼岸さくらの花よりは團子とおもふ手向なるべし』これらは讀むに格別骨も折れず、其面白さは裟川や鴎所などの詩と同日にして語るべきにあらず、今の詩人の作れる如きもの讀まんよりは寧ろ古人の狂歌を讀むこそよけれ、

◎讃岐の日柳燕石は詩を以て一時名を得たれども、博奕場中小覇王と稱して、乾児の二百人もある侠客なりしが、或人詩人にして博奕に耽るとは不風流も甚しと嘲けりしに、否博徒にして詩を賦するとは風流千古に絶すと云ひし曠達無類の男にて、維新の際王事に斃れたり、其詩亦其人となりの如く、滑稽詼謔の中自ら尋常に異なる意氣を見るべし、其子三舟亦詩を好み、擬の箕尾觀楓の句に曰く、京人勿説西山勝、三尾何如一面妍と乃父の遺響ありと云ふべし、

俗禪放言

土屋元作

近來禪學の流行盛にして所々の山寺の和尚等中々忙しき様子なり曾て友人某和尚に用事ありて四谷の月桂寺を音づれしに折柄禪海一瀾提唱中とのことゆえ講釋の席を窺き見しに老若男女洋服和服凡そ三四百人頭を揃へて聽聞の眞最中にて禪宗のことなれば隨喜の涙をこぼすものは見えざりしも和尚の勿體らしき作り聲に耳を發てゝ淸聽する有様唯事ならずと思はたり夫れ禪は元是れ達磨の宗旨廓然無聖平々淡々隣の車曳きもよく領解し向の婆さんも呑込むに難からざる筈なるに何事ぞ世間の人々禪學々々と大騷ぎして馬祖百丈黃檗雲寶など何時死だやら譯の分らぬ人間の効能を喋々し古則公案一千七百皆んな透すに何年掛るとか徳山の棒の先に眼が有つて臨濟の一喝に耳が聾するとか云ふやうな話をして世人を烟に卷く積りか將又自分が烟に卷かれたのか何に致せ容易ならざる風潮と見て取りしゆえ嘗友中禪學熱心の人にも會ふていろ〳〵様子を承るに與

實今日の勢は禪水滔々として山も平地も浸さざるなく猫も杓子も坐蒲團を尻に當てヽ線香の前に空眠をせざるなく鵠林の雙手趙州の無字の如き需用に追はれて奔走に遑なく庭前の柏樹子などが助けに出ると云ふ有樣にて山寺も繁昌すれば和尚も繁昌佛書の本屋も富貴萬福にして碧巖の賣れること昔の西洋事情も跣足で遁げる有樣大中學校の書生裁判官陸軍士官等は最上の得意にて今の世に花も引かず謠も歌はず料理屋待合に入らざるものは大抵禪學の仲間なれば禪の一字は大星の討入に用ひたる山と川との合詞の如く高尙にして眞面目なる人間の符號なりと是ある哉〳〵近頃新聞に見えたる心機一轉渙然氷釋を始めとし活機玄機など云ふ瞬昧模稜の字面昔は或一種の物數寄等に玩はれしまでなりしに近來は俗界の俗氣中に跋扈して頗る勢力を逞ふする樣子なるは是も禪學流行の御蔭なる可し尤も實の處を白狀すれば斯く申す小生も去ぬる明治十九年の夏脚氣病にて鎌倉へ逃げ行きし時不圖或る大入道と心安くなり俗に云ふ坐禪を試みしことあり誰やらの隻手は撚ち上るに手數も掛らざりしかども或る跛坊主の爲めにボタ餅を咽喉につめられ吐く事もならず呑むこともならず眼を白黑にして苦むこと數年遂に米國ワシントンに於て其爲めに一命を隕さんと致して僅に助かりたる拍子に首尾よくボタ餅を呑み込み唐人の寐言を眞似て閑日催眠且覺餓喫了餬餅學希更醒來自笑胃囊健消化雲門鐵面皮と平仄も合さぬ文句を例べホッと息を吐いた位の次第であるから赤の他人の樣に禪學を馬鹿にする譯ではなけれど元々師匠の大入道に還俗を勸めたり大入道の後見で貿易屋を開業したりした上句トウ〳〵新聞屋の種取りに化けて世間のわらを拾ひ其日の御茶を濁す程の俗物ゆへ眞面目な人々とは反りが合はず自づから山と川との合詞も唱へざる次第にして禪も本統の禪に非ず坐禪の式を川ふるは恐れ多ければニユーヨルク滯在中一夜工風を凝らして立禪と云ふことを始め又臥禪と云ふて臥て居てやることもあり而して其宗旨とする處は人々本具の常識(コムモンセンス)にして柳は綠花は紅と云つた樣なことなり例を以て言へば一に一を合すれば二となる部分は全躰より小なり分らぬ事は分らぬ分かる事は分かると云ふ如き調子にて簡易明白淡泊無邪氣を以て妙とす或は小生の禪を罵つて俗禪と云ふ、甘じて受くる所の名稱にして小生は更に又自から名づけて凡夫禪と云ひ普通流行の禪を指して大人禪豪傑禪入道禪又雅禪とも云ふなりそこで我が僞禪の眼

を以て雅禪者の樣子を見るに或は少しく達磨の本意を失し釋迦の心持ちに協はぬかとも思はれる所なきに非す僞を以て雅を嘲るは小乘を以て大乘を誹謗する如きものだがどうだかそれは公評に任せるこうして此所に誰やらが眉毛を吝まざりし勇氣を倣ひ濟まし切つた雅禪の水底を攪きまぜて大に泥土を浮はせ吳んと柄にもなき大望を起し其手續に及ぶこと左の如し

一、有難やの多きこと

近來禪を學ぶ人を見るに恰も禪を以て一種の魔法の如く心得如意を撚くり拂主を振廻はし達磨の畫像を恭しく床の間にかけ御經讀誦の鈴の音は聞えね供碧巖集槐安國語無門關などの素讀を以て咒文に代へ線香の烟に姿を隱くし大悟十八度小悟數を知らず甚深微妙神變不思議なりなど稱して雲にも乘りかねぬ顏付自から何院何居士何庵何禪等死人か蕃袈屋か寺の位牌の樣な戒名を名乘り其僻見雷也よろしくと云ふ身搆えにて風雲を叱咤するとか雷霆を手取りにするとか活人劍で天下を平にするとか何とか獨りで不思議がるものある其一方には三々五々頭を集めてドゥも此御宗旨は面白い不立文字で見性成佛權兵衛でも太郎兵衛でも修業の出來ぬと云ふ者なく少しく疑へば少しく悟り大に疑へば大に悟る「暗の夜に鳴かぬ烏の聲聞けば生れぬさきの父ぞ戀しき」歌も禪味ありて始めて妙なり古池や蛙飛込む水の音」も極意は矢張り禪、四疊半の茶座敷に定家卿の一軸唯有明の月ぞ殘れるなども禪でなければ埒は明かず劍も禪なれは砲術も禪話し家の圓朝は禪を學でこそ名人にはなりたれ團十郎は學ばざれども自から禪を得て居るに相違なし兎角御悟りが肝心なりとて其所等此所等を穿鑿して古惚けた坊主を見付出し何々錄提唱何日より攝心近う寄りて御參拜非れましようと大文字に書た看板を掛くれば蜒の兒雷也なども贊成と號してその押かけ殊勝らしい顏付して本堂の側面に坐り雲を攫むやうな講釋を聞いてナムカラタンノ虎ヤア〱木魚のポク〱を聞いて退散するものもあれば倘ほ止まつて何か和尙に質問するもありと云ふ我俗禪の俗眼より評すれば是ぞ一種の有難やにして形こそ變はれ念佛や題目を唱へて空ゝ寂々に時を過ごし御文さまの講釋を聞いて隨喜の泪を流すものと少しも異なることなし禪宗の始祖たる達磨大師は坐禪豆を發明して專賣でも取らうと云ふ程の人間にして梁の武帝が寺を建て僧を度するの功德を問ふた時に頭から無功德と答へたと云

ふ末孫たる先生達が寺を建つる金もなく僧を度する力もなく妄想の海に古人の話頭を浮べ彼方へ漕だり此方へ漕だり氣樂な遊びに日々を空しく暮すのを見せたら何と評するか聞き事なり二祖の安心は不可得の三字臨濟の大悟は大愚の一言俗眼で見れば明々白々二一天作の五となるより明かなるに鵠林新案の椅子悟り一段一段又一段十年立てども頂上に届かず更に參せよ三十年とは好い面の皮の御咄なり此處まで御出で甘酒進上の僞なることは小供ならざる男女の皆知る所小生も聊か試みて其馬鹿々々しきを覺れり況んや更にこれを有難がりてうか／＼坊主の甘口に釣られ本堂の金箱となつて禪錄法語を擔ぎ回るをや山に行かば鑛石乃至山芋を堀る可し坊主を堀出す勿れ書を讀まば日用の事柄を知る可し古人の陳跡に頭を痛むるは愚なり

此論未だ盡きざるも年末に際し俗物殆ど寸暇なし故に是だけ書認めて櫻井氏に御約束の責かふさぎ餘は次號の發行までに差出すことゝせり

噓と詐欺との福音

一風俗壞亂者一

青柳有美

噓と詐欺とは、果して罪の大なるものにして、世の人人がいふ如く、しかく憎むべく厭ふべきものなる乎。否な／＼。噓と詐欺とは、時に愛すべく慕ふべく好みすべく、又敬すべきものなり。人は、歸天齋正一の奇術を觀、三遊亭圓遊の落語を聽かんとして、貴重なる幾時間を費し、あまつさへ之が木戸錢のために若干金の價を拂ふをも惜まざるに非ずや。正一の奇術を觀るといふは、詐欺を觀んとするなり。圓遊の落語を聽くといふは、噓を聽かんとするなり。しかも、その噓と其詐欺との、少しにも巧みならんことを願ふて止まず、若し、歸天齋正一の詐欺にして、甚だ臻らざるもの多く、立ち處に馬脚を顯はすが如からんか、人は甚しくいらだち怒りて、木戸錢の拂戻しを請求すること、過る日歌舞伎座にスフヰンクス一座が、拙劣なる人馬隱現術を演ぜし時の如くなるべし、若し三遊亭圓遊にして、その語るところに噓少なく、聽者の耳を欺き騙ることを足らざらば、人はこれを馬鹿／＼しとして却て憤るべし。以て人間の、如何に噓と詐欺とを愛し慕ふて、これがために高き價を拂ふまでなるかを知るに足らん。

醫師は、その調劑するところの藥をして、服藥者の厭ひ却くるところならざらしめんとし、苦味あるには、

糖分を加へ、悪臭あるものには之れに芳香剤を添加す。此くの如くにして、糖分と芳香剤との混和を待ちて、藥剤の苦味と悪臭とを滅消せんとするは、これ即ち服藥者を欺き詐るなり。然れども、人は却て其の欺き詐られたるを悦び、醫師の親切なるを好みし頌ふるに非ずや。しかのみならず、巧みなる醫師とは、能く患者の氣色を察して臨機の言を操り、其心情を平靜ならしむるもの、即ち是れなり。もし、二三時間を出でずして患者の斃るべきを知り、汝は幾何時ならずして死すべきものなりと直言せば、人は其醫師を以て無鉄砲なるものとなし、却て責め罵るに非ずや。蓋し、嘘を吐き詐欺の計をなさゞるに、これ因るなり。

又能辯術なる者あり、雄辯術なる者あり、其辭甚だ美なるが如しと雖ども、これ又嘘を吐き詐欺を行ふ術なりとの意に外ならず。虫の如き低聲にても、事理の相通ぜざることなきに、殊更ら、其聲を雷の如くに高め、所謂滔々の辯を揮ひ手足を躍らし眥を決するなど、凡て針小を棒大にせざるはなし。而して、その嘘と詐欺との最も巧みなる辯舌を提へて、人に「うまい〳〵」と嘆稱するなり、又、詩とは嘘と詐欺とを美はしく並ぶるとなり、猶ほ能辯術に於けるが如し。又、顯微鏡と望遠鏡とも、これ詐欺なり。微細視るべからず、朦朧明らむべからざるものを擴大して、明視すべきものとなす、豈に詐欺に非ずといふことを得んや。

此の如くに觀じ來れば、詐欺と嘘とは、必ずしも全く卻くべく悪むべきものに非ず、時としては欠くべらざるものにて、是れ又一種の福音なり。然るに、世には窮窟なる道徳屋といふものあり、切りにあせりて、嘘と詐欺との跡を世に絶たんと試むるが如し。これ蓋し、遠くはストイックの理學者、近くはピユウリタンなど稱ふる輩の穢物主義道徳の影響によれる大俗論にして、痴や及ぶべからず。知らずや、天地の主宰者なる神は、是れ一大詐欺師にして、又一大嘘吐きなることを。神は、人間をして絶えず勞作辛苦せしめんと欲すれども、人間の安逸を希ふの心強くして、容易に其勞を背んぜざるべきを思ひ、まづ「死」の痛苦を以て其横着心を嚇かし、勞作せずんば食を得ること能はずして死せざるべからざるを思はしめ、以て日に日に營々辛苦せしむるに至るなり。此の如くにして人間はその心に於て、たゞ食を得んがために働けども、神はかくして人を欺き、以て天地天道の完成に貢献寄與するところあらしめんとはするなり。されど、人間の愚にして直なる、

神の斯る一大詐欺師たるを知らざるのみ。しかるに、神を絕對無限の馬鹿正直の如く思ひ居るクリスチヤン樣どもの好人物さよ、初心なるエッツを咀ふて老猾なるヤコブを祝福せるものこれ汝等の神に非ずや。

又人は是れ一人の躰軀さへ、持ち餘し居るものなれば、誰か殊更らに妻を娶りて子を生み、或は男に嫁して子を擧げ、一家眷族を養ひ育つるの勞をまで、自ら進んで背負込むものならんや。されど子を生ましめて、人間の種類を永續せしめんとするは、神の御心なり。是に於てか、神は先づ人を欺き詐るに戀を以てす。男は、此戀に欺かれて、妻子を養育保護せざるべからさるの勞苦を引受くるに至るを忘れて、しきりに女を求めて之を妻とするなり。女も又夫に仕へ子を育てざるべからざる勞苦の來るを忘れて、男を慕ひこれに嫁くなり。既に夫となり妻となり結婚のこと終りて、戀の快夢漸く醒めなんとするところに至れば、神は肉交の快樂を以て人間を欺くなり。夫婦は即ちこの快樂の故に、三界の首つ軛なるまで子孫養育の難義なるものあるを顧るに遑あらず、遂に子を生むに至り、殊に婦たるものゝ如きは、胸みの苦しみをさへ忘れ忍ぶなり。既に、子を得れば、又その慈愛に欺かれ、汗みづを流して、これが養育の勞を辭せざるに至る。此くの如くにして、戀愛のために相婚し、肉交の快樂の故に子を生み、情愛のために子を育つれどもこは全く神がたくみませる詐欺の囚絹にかゝれるものにして、神はかくツヽ〳〵と人間を欺き誑らかして、人種の永續を計るなり。此る大詐欺師とも觀るべき神の造りまし給へる天地宇宙なれば、天地と宇宙とのこと、百事僞り多し。故に或る意味に於て之れをいへば、天地と宇宙とは是れ嘘と詐欺との結塊なり。既に此る詐欺と嘘との塊なる天地の間に捿息し、一大嘘つき一大詐欺師たる神に支配せらるゝ人間なれば、この人間ども寄り集りて造れる人間社會の、嘘の多くして詐欺の夥しき如き、何ぞ敢て怪むに足らんや。美術の眞精神の如き、また實に詐欺と嘘とにあるなり。されど今は玆に之を詳説せじ。

藝術雜感

自然庵

◎詩人小説家が其の作中に寫し出す人物を見るに、作家が最も深くシンパシーズし、筆持つ腕にも力瘤を入れて寫したのであらうと思はるゝのは、殆んどいひ合

はしたかのやうに、必ず作家其の人と全じ性格の人物にて、動ともすれば、そつくり其の儘に作家の肖貌、もしくは其の理想の影なることがある。

◎古今の大作者、靈腕妙手の詩人なども歌はれて、縱橫無碍に人の性質を寫しわくる客觀作家―自家を離れて他人を寫すとの評判ある――シェークスピアー其の人すらも、よく／＼あなぐり穿鑿すれば、やはり此の例には漏れぬやうである。まして其の以下の詩人小說家は尙更、おのが理想、おのが好尙を寫すことを主とする主觀作家はいふまでもないことであろう。

◎とりわけ、西洋は十八世紀以後、我が邦は維新以後の作にかゝる例は著るしい。これは畢竟所謂個人主義、自然主義、降りては利己主義などの影で、時勢の然らしむ爲めでもあらう。併し利も玆に在れば、弊もこにゝありで、强ちに咎め立てするにも及ぶまい。

◎シェークスピアーの詩によりてシェークスピアーを知り難からざる如く、逍遙子の作によりて逍遙子を知ること難からず。バイロンの諸作によりてバイロンを知ることのいと容易きが如く、露伴子の諸作によりて露伴子を知ることはいと容易く、リットンの諸作によりてリットンを、ヂッケンスの作によりてヂッケンスを、サッカレーの作によりてサッカレーを知ることの出來得る如く、紅葉山人の諸作によりて紅葉山人を知ることが出來る。

◎このことは、啻に詩人小說家の上ばかりではなく、畫家、彫刻家、就中人物畫家、人物彫刻家の上にも見ることがある。西洋の例は暫く措て、我が邦の畫家、彫刻家、とりわけ近頃のは、おしなべて作家自身の面影を寫し出したのかと思はれる。予が知れる限りの浮世繪師、狩野家、土佐派の畫家、及び木、石象牙、油土、石膏、金屬等の人物彫刻家が寫せる、好男子、美人、紳士、豪傑などの繪畫や、彫刻品は、その繪畫、彫刻品を見て、而して後、その作家の面相を見れば、往々作品の相と、作家の相とよくも／＼相似たるを感ずることがある。殊に主觀的の作家に至りては、紛れもなく生寫しのことがあり、又はその理想の影の無遠慮にもきらめくことがある。

◎きらめくもよし、生寫しも惡くはなからう。只不運にもその理想の趣と高大でもないのに、無暗にきらめかされては五月蠅さくてたまらず。その面いきのさらに妍くも無いのに、いつもそを鑄型にして、小町、業平、お染、久松、八重垣姬、皆全じつらつきに、畫き

もされ、彫られもしたら、さぞおかしいことであろう。

◎いつぞや、篁村老が著はされた曲亭馬琴の幼時譚を讀んだとき、その表紙には馬琴の肖像が畫いてあつた。曲亭には露似ては居らぬが。清く瘦せて、凛としたる面ざし、あゝ誰やらに似たりけり、と思ふうち、ふと思ひつく、それは此の本の挿畫かきたる下村觀山子、が師なる人の面影に、どことなく。

◎又、横山大觀子がいつぞや畫きたる、屈原、及び去年の秋の展覽會の木蘭、男と女とこそかはれ、その面影いづれも大觀子の肖貌とはおぼさずや。全じ人の顏といふ畫は、その細君の生寫しかと思はれて。

◎現今、我が邦に行はるゝ寫眞の撮法ほど面白くないものはなからう。美術といふ際の繪畫彫塑ならば、醇化もしくは理想化して寫すといふこともあるが、寫眞は其の名に負へる如く生寫しなる所にこそ價値のあるべき筈であれば、生中躰裁を整へ、邊幅を修め、その固有の風姿自然の態度を嬌飾して、さて之が影を撮らうとするのは、寫眞の本意とは違つて居やう。げに、虹粉を塗り飾りてまでも、おのが面つきを美しく見せたく、借着借馬車をしてまでも、威儀を作り、見得を張りたがるのが、世間普通の人情ではあろうが、さりとて、これは人情の弱點といふもの、さるをさもあらぬ人々までが、この弱點が定めたる規律に嚴肅に從はねばならぬとは、さて〳〵無法の話ならずや。

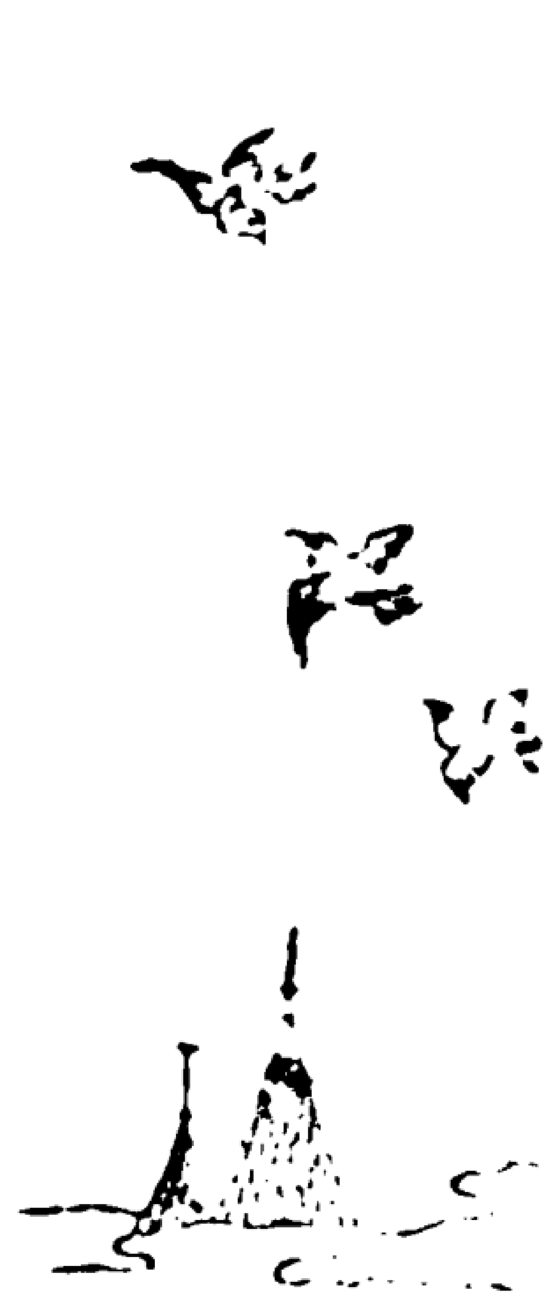
◎寫眞はあくまでも寫眞せよ、醜き疣までもそのまゝにと言ひ付けたるクロムウェルの註文は、げにこそと思ふに、今の我が邦の寫眞師等は、只客の好尚に媚ぶることのみ是れ勉めて、寫眞の眞の用を知らず、もしくは寫眞術の品位を高めて之を美術と爲さんが爲めにか、一種奇異なる議論をさへ主張し、醇化理想化の必要を唱へなどして、いつしか幾種かの撮影式を作り、毎に此の式に依りて、あらゆる撮影を行はうとして居る。所謂千篇一律の弊は、これより、生ずるのである。誠に西洋の寫眞帖と、我が邦のとを比べ見よ。彼れのはいみじくも國々の人の殊なる癖をさへも寫しいだしたらしく思はれて、洵に興あるに、我が邦のは、どれも〳〵大概似たりよつたりの姿勢態度にて、手の据へどころ、首のむけかた熊公も、太郎左も、紳士も、美人も皆全じさまにて、左樣然らばの餘所行的なる、ほんに、おかしからぬ態にてはおじやらぬか。

◎一人立はまだしもながら、二三人立以上となれば、位置や、姿勢や、配合や、餘りに井然と秩序だち過ぎ

て、自然の趣致些もなく、天眞爛熳の風味も無し。それは寫眞師が習俗的好尙に拘泥し、若くは自家の好尙に拘泥して、少しも自然といふことに注意せず、餘りに多く個人の特質を削り去るの故であろう。されば、磊落疎放の不作法ものも、寫眞の上に現はるれば、謹厚至極の老實紳士となり。無邪氣におかしき、おさなごも、口あく癖を直されては、いとひねこひたる童となる。人は知らず、予は洵に面白からず思ふ。

◎仔細ありげに首かたげたる、空目して打あほむきたる、べたりと坐りたるだらしなく腰打掛けたる、老弱男女入りまじりて、高低參差として不規律なる、予は思ふ。かゝる天然の姿勢の間に、隱然審美的取捨を施してこそはじめて、寫さるゝ人々の性癖も見へ、無限の趣致も生じ、風味も生じ、寫眞の本意にも叶ひもしやう。いはゞ、遠州流の生花を厭ひて、投入をめづる心なので。

◎とりわけ、情誼のまことより取かはす寫眞など醜くからうとまゝ、さながらなる不用意の姿かたちをぞ寫したきもの、予は常に此の意を述べて、自然的撮影を求むるのである。されど寫眞師はいつも諾がはず、さするときは、いと醜くければなど角目だちて言ひあらがふ。あらがうてまで、しかせん必要もなければ、いつも〳〵口をつぐみて、例の如く行儀つくりて、不自然に打かたづけて、餘所行がたの相を寫さす。すると我が親たち、我が妻、わが家人など、おことが如是端正つ貌付することもあるかなど打戯れて、貌と寫眞とを覺えず見くらぶることもある。要するに、しかつめらしくはうつれども、それがため、情趣滅じ、おかしみ消え、いとわしく見ゆる也。



海外大勢

●露國の窮境
新外相政策の失敗

去ぬる八月二十五日のことなりき、故ムラヴヰフ伯の後を襲ふて新たに露國の外相となれるラムスドルフ伯は突如として連合諸國に向ひ北京撤兵の議を發案したり、而して其理由とする所は平和の協商をして容易且つ迅速ならしめんと云ふにありしなり、蓋し此提案たるや伯が外交上に於ける所謂處女策にして列國の殊に趣味を感ずる所なり、思ふに之れ歐洲の外交社會に於ける空前の逆說（パラドックス）にして戰敗せる淸國に向て却て戰勝者の地位を得せしめんと欲するものなり、若夫斯る提案にして淸人の口に出でたりとせんか識者の一笑をだに値せざる可し、蓋し國都の占領は古來平和克復の最良手段として公認せらるゝ所なり、伯は皇室北京還御を以て協商に必要なりと說けどもかくせずとも淸庭より適當なる全權委員の撰任あるあらば以て平和の協商を遂ぐるに足るなり、現に千八百六十年に於て其好適例あり、若し伯に向て兵を天津に引揚げたるの後協商成らずんば以て如何せんと欲するかを問ふものあらば伯の答ふる果して如何、更に太沽に引揚げんと欲するか、若し尚淸國にして列國提出の平和條件を承認するを拒まば如何、列國は兵を揚げて淸國の領土を退去す可きか、將復更に北京進擊を始む可きかいづれにしても不都合を免れざるなり。

此に於てかその裏面に一大秘密の伏在するものあらんとは世人の等しく疑ふ所となれり、或は云ふ露國は獨乙皇帝の意を損ぜざらんため、陽にヴアルデルゼーの撰任を歡迎し、陰に北京撤兵によりて其野心を挫かんことを期したるなりと、之れ元より提案の一原因をなせることを疑はずと云へども其眞の原因に至りては露國政略の根底より涌出したるものなりと云はざる可からず。

●露國對淸政策の眞意　露國は他の列强と異なり直接淸國と境を接し、其境界線は殆ど四千哩の長きに亘れり、此堺を越へて次第に淸國を侵蝕し直隷を略し渤海に及ばんとするは蓋し之れ露國の眞意なり、近來露國が淸國政府幷に其人民をして露國は自然の保護者にして又最親の良友なることを信ぜしむるに汲々たる所以の者は之れ即ち此目的を遂行せんが爲めにして又兼て防備の尙整頓せざる國境に事なからしめんことを期するものなり、目下西比利亞は鐵道未だ完成するに至らず又已成線路の經驗は以て軍隊輸送を迅速ならしむるに於て其効果の甚だ大ならざる可きを證明するのみならず、又一方に於ては殖民事業尙頗る幼稚にして成積不良なれば若し今日に於て國境種族幷にモンゴリヤ及びカシカユリヤの蠻兵の侵入するあらば其患憂蓋し測る可からざるものあらん然れども露國の親淸政略の更に主要なる根據は淸國をして現狀を持續せしめ依て以て隔海列强の北淸に利益を設定するを防壓するに在り、此に於て露國は淸國をして可及的非改進の地に置かんと欲し淸國政府に於ける反動保守の分子は凡て之を保助し依て以て一方には北京に勢力を扶殖すると同時に、他の一方に於ては他日の膨脹に障碍たる可き淸國の富强を抑制せんと欲するなり年來親淸に汲々たる所以は全く此に存す。

新外相八月二十五日の提案の全く此政略に出でたるや殆ど疑を容れざる所なり、事變の當初より露國は清國と交戰中にあらざることを布告し西比利亞國境の侵入に遇ひても尚清國を呼ぶに「我親善なる隣邦」を以てし列國意見交換の劈頭に於て清國保全并に從來の政府組織維持のみならず又同時に御代（ダイナスチー）のことに付きては一切干涉すべからざるを主張したり、故に連合軍の一度び北京に入るや忽ち之れが引揚を切望すると宛も清人の如く直ちに兵を撤して協商に移らんことを提案したり、若し此計畧にして成功したらんには清國の感謝信頼を得るに於て偉大の功驗ありしや蓋し疑を容れざるなり。

●露國提案の失敗　ラムスドルフ伯は謂へらく英國は南亞に熱中して亦他を顧ふの遑なく、米國大統領は再選運動に餘念なく佛國は元より反對することなかる可く、又日本に在りては必ずや英國の指導に從ふ可し、若夫獨乙にして獨り之に反對せんとするも孤立なすなきのみ、伊墺の反對何かあらんと、吾人は獨り怪む伯は清國に於ける露國の利害の隔海列強と大に其性質を異にする所以のものあることを常に口にしながら當時に限り何故之を失念したりしかを、蓋し之れ伯が今回の失態ある所以なり、露國は直接清國と境を接し遼東に大兵の駐屯するあり、境上以外別に商業上の利益を有せざるを以て清國の歡心を得んがため或は容易に撤兵することを得可しと云へども、隔海列國に至りては皆商業上重大なる利益を有するものなれば清國政府の責任を明かにし將來の安全に對し、確乎たる保障を得るにあらざれば決して輕然撤兵することを許さゞるなり、誰か全清に散在せる商人宣教師の生命財產を賭し將來に於ける商工業の開發を犧牲にし以て斯る突飛の讓步を爲すことを得ん。果せる哉露國の提案は列強の拒絕する所となり、就任して未だ三週日を經ざる露國新外務大臣伯爵ラスドルフ閣下は早くも已に見事なる失態を演ぜられぬ。

●露國の窮策　西刺利亞鐵道の便なく、旅順大連の根據を有せざる二十年の昔に於てクルジヤを奪はんが爲め今日より遙かに強國視されたる清國に向て干戈を交ゆるの勇氣ありし露國は今日より切りに清國の歡心を求め之に親善せんと欲する所以果して如何、之れ諸種の事情の錯綜せる處あるが爲めのみ。

西刺利亞鐵道は其距離三千哩の長きに亘り、之れが爲め資金を投ずること已に二十億圓、而して之によりて得たる効果の重なるものは只其敵國目錄に日本を加へ、政治雜表に朝鮮を加へたるのみ、斯る逆境は果して避くべからざりしが、否々、露國が日本の深恨を買ひし所以のものは遼東還附其者にあらずして旅順大連の詐取にあり、蓋し之れ日本を欺罔すると同時に朝鮮に於ける利益の衝突をなして調和すべからざるに至らしめたり、遼東地方に於ける自國利益の攪亂せらるゝ恐れありしと云ふの口實は以て無罪を證明するに足らず、露國の爲に計るに少しく時機を慮り日本の三國干涉に對する怨恨漸く冷却するを待つと同時に、又別の方便によりて滿足なる利益の保障を提供す可かりし也。而も能此に出でず、今日の窮境ある所以のものは蓋し其無分別に對する刑罰と云ふ可き也。抑も其刑罰たるや露國が私かに北京に於て畫策しつゝある東亞經畧朝鮮占領の根底に一大打擊を加ふるものなり、日本は早くも露國の野心を覺り之れを挫かんと欲せば清國を征服せんよりは寧ろ之れと同盟を結び政治上并に社會上の改革を遂行せしめ以て一日も早く之を日本化するに若かざるを看破せり、此に於てか露國は大に狼狽し清國の反動的腐敗分子を助成し又オークトムスキ公の案出せる似非蒙古主義を北京に於て說法しつゝあり（露人清人共に等しく蒙古人種なり故に同胞相助けざる可けんやと云ふ考案なり）露國が此の如き絕望的窮策を採らざるべからざるに

至れる所以のもの之れ全く當局政治家の罪なり。

● 西比利亞經營の失敗 露國の大患は單に對日本の干係に止らず更に重大なる致命的打擊は西比利亞拓殖の不成積なり、其企圖せる所は之を拓殖して白人の國となし本國人を此に移殖して新露國を建設するにありしや明なり、然るに其近狀を見れば西刺利亞全部は次第〱に蒙古化せられつゝあるなり。

最近の調査によれば本國人の年々西刺利亞に入るもの非常に增加したりと云へども永住の目的を以て移住し施政に便するものなし、領事館報告によれば千八百九十九年に於て本國人の西比利亞に入れるもの二十二万三千九百八十一人に達したると云へども生計を營むこと能はずして無一文にて歸國したるもの同年上半期間に於て五万九千人の多きに及べり、然るに淸人は之に反して至る所に充滿しつゝあり、蓋し白人は全く勞働するを欲せざるか或は不當の勞銀を貪るを以て自然廉價なる支那人の勞動を必要とするに至り公の事業は凡て之を使用することゝなり、勞動者に續きて行商人の入込む者頗る多く又貿易商きでも進入し來ることゝなれり、一時は斯くして進入し來れる支那人は必ず漸次露國化せらるゝならんとの希望ありしが今や事實は全く之に反し露人却て支那人のために壓倒せられて漸々支那化せられんとするの傾向あり、西刺利亞を旅行せる露國人の一名士は昨年余に告げて曰く國境近傍に於ける露人は既に露語を忘却し去れり、露人は政治上に於て支那を征服せんとを企圖しつゝありし間に何んぞ知らん、支那人は既に經濟上に於て西刺利亞を征服し始めたりと、然とも若し露國にして支那人の移住を防止せんと欲せば西刺利亞の經濟的發達を犧牲にすると同時に又北京に於けて經濟政界を放棄せざる可からず。

露國東亞經畧に付つきては枝葉の問題頗る多しと云へども其對日本關係、幷に西刺利亞に於ける對支那人政策皆以て露國の窮狀を知る可く、從て其多少體面を毀損するも甘じて平和の克復を切望する所以を明かにするに足らん。 (デイプロマチクス)

● 十九世紀に於ける英國の膨脹

千八百年より千九百年に至る一世紀間に於ける大英帝國の膨脹に就きスクーリング氏はポールモール、雜誌紙上に於て頗る興味ある面積幷に人口の統計を揭げたり今其大要を摘譯すれば左の如し。

千八百年より千九百年に至るの間英國の領土は一秒時間每に平均二エーカ殆ど一町步の割合を以て膨脹したり、即ち千八百年に於ける殖民地の面積は連合王國の十六倍に過ぎざりしも千九百年に至りては無慮九十六倍に達したり、換言すれば二百万平方哩より一躍して千二百万平方哩となれるなり。

若夫之に加ふるにオレンジ河殖民地幷にトランスヴアールを以てせば殖民地の總面積は實に本國面積九十七倍の上は出づ可し。

今之を以て獨佛兩國に對照せんか佛國殖民地は本國の十八倍にして獨乙殖民地の面積は僅かに本國の五倍に過ぎず、若し夫れ日本に至りては臺灣澎湖島を合して僅かに一万三千五百九十方哩、本國の十分一に達せざるなり。

今人口に就きて之を見んか諸領土を合して大英國は千八百年に於て一億一千五百万人なりしもの千九百年に於ては三億九千万人に至り、本國のみに付て之を云へば千五百万人より四千一百万人に增加せり、同期間に於て佛國は二千七百万人より三千九百万人に進み獨乙帝國の地は二千一百万人より五千五百万人に增殖したり。

英國殖民地の人口は千八百年に於ては凡そ一億人にして其內白人は僅かに二百人に過ぎざりしが今や增殖して三億四千九百万人となり、其中千二百万の白人あり即ち先きに白人の割合人口五十人に對する一なりしもの、今は二十八人每に一人の白人を見るに至れり。

大英國の統治下にある現今の人口は其領土の廣さに比し面積一平方哩每に一人の割合なり、氏の曰く英國總人口三億四千九百万人を一所に整列せしめんとせば四平方哩の地を要す可しと而して更に結論して曰く、斯る大數の人口を統御して其大多數をして寧ろ英國の統治を感謝しつゝあらしむる英國の統御法も巧妙なる哉と、

海外雜纂

●トルストイとニーチェ

ニーチェの持論にして研究の價値あるもの甚だ少しとせず、圓滿なる生活には必要條件として身體の强健ならざる可からざるを主張するが如きは頗る道理あるの論なり、彼は近世社會に病弱者の甚だ增加せるを慨し其心身共に以て人生の責務を盡し、痛苦と抗爭するに足らざるを說き、世の所謂慈善家なるものが徒に病弱者のために同情を表しつゝ却て其原因を絕つの策を講ずるものなきを痛駡せるが如きは頗る時弊に的中せるものと云ふ可し、然れども又彼が極端なる主我獨尊を唱へ、現今の社會を調和せる情愛、友情を痛罵するが如きに至りては頗る有害危險にして社會の破滅を招き、文化の消滅を來すの恐れあり、今ニーチェを以てトルストイに比較し倫理に關する所見の異同を對照せんに、

●相違の點　兩者の見解は頗る相反對せる所あり、抑もトルストイの制慾は其小壯時代に於ける快樂多き寄寓生活に對する反動として同情幷に深き宗教的性情の涌起せるものにして、ニーチェの體力、健康、幷に意思の强固等を崇拜するに至れる所以は身體の病弱に基因せる困窮不如意等によりて主我自重の精神の激發せられたるに因る、トルストイは凡ての天性を折壓し動物的需要は凡て之を防止せざる可からざるを說き天性に安んずるは即ち墮落する所以なりと云ふ、ニーチェは之に反して善と善なるものは凡て之れ天性なることを說けり、トルストイは耶蘇教を以て人生幸福を求むる唯一の道となし、自己の經驗せる所を摘述すれ共、ニーチェは全然之に反對し最後の著書アンチ、クライストに於て耶蘇教は健康を害し美を損じ、智勇を奪ひ精神の尊ぶ可きを知らざらしめ遂に生命を危ふする最大陰謀なりと云へり。

●一致の點　兩者の見解を異にすることは實に前述せるが如く大なりと云へども其一致せる點も亦甚だ大ならずとせず、即ち世に合理的秩序なるもの存するを否認し、人類の行動に共通せる客觀的眞理又は主義の生存を拒否するに於て互に相一致せり、トルストイの說く所によれば理性及び神意なる者ありて人生を支配すと云へども、理性は只吾人をして心裡の混沌たるを覺らしめ、自家瞳着の甚だしきを指示するに止り決して此瞳着を解くの方便を與へず、而して神意は即ち思議す可からざるの運命として表現するものなり、ニーチェも亦同く社會特性は窮極する所永久混沌たるにありと、此の如くにして二人者共に人生は凡て感情によりて支配せらるゝものにして道理に訴ふるを認めざるなり、只其異なる所はトルストイは慈愛及び同情によりて支配せらるゝとなし、ニーチェは自尊他卑の感情によりて支配せらるゝ者なりと云ふに有、即ち一は制我（セルフ[illegible]ーシヨン）の倫理にして一は無制限なる張我（セルフアツサーシヨン）の倫理なり、而して人生は感情の放逸にあらずして合理の活動なりと云ふを認めざるや即ち一なり

二人者は又國家に對する觀念に於て大に見解を異にせりトルストイは純然たる無政府論者たるを明かなり、ニーチエに至りては其主義とする所甚だ明瞭ならすと云へとも、時々貴族政治を贊美することありき、(セーリスアダムス氏)

●鰐魚の話



○鰐魚の本場は印度に亞弗利加に南洋の諸島なり、其中人間が鰐魚の害にかゝるは印度人最も多く、ベンガル州などの此動物多きところは殆んど毎日之が爲に生命を失ひし話を聞かざるはなし、こは印度教の儀式として毎日河水に沐浴するの結果にして、沼も池も清く澄める水も赤く濁れる水も皆士人の浴場に供せらるゝが爲なり迷信の弊害も又極まれりと云ふべし

○鰐魚の大なるものは長さ二十呎に至る、水邊を逍遙せる家畜、人間を見るときは不意に水面に飛び揚りて引込むことあり、時には小舟を覆へして食をあさる、

○一度び喰ひ付かれては到底避くること能はず、此圖は印度人が鰐魚の難に遇ひ足一本を失ひしのみにて辛ふじて生命を免れし圖なり、亞弗利加人も南洋人も多く鋭利なる刃物を腰にして萬一の防禦をなせり、その小なるものは武器にて防ぐことを得ることあり、一印度人が水中にて不意に嚙れし時兩手の指にて力任せに鰐魚の兩眼を押し付けて彼を驚かし一命を拾ひたるは、機智ある働きとして彼地に喧傳され居るなり、

○鰐魚捕獲の法色々あるもやはり銃撃に限るなり、熱帶地方の冬日に曝されんとて陸に來ること多し、かゝる時は銃殺するは左までの面倒にあらず、ボルネオ島には猿を以て捕ふる一法あり、猿を殺して之を一本の棒と共に括りて強き籐の紐などにて鰐魚の之を嚙み其棒の爲め苦しむを待ちて引寄するなり

○印度人特に印度婦人は腕輪指輪頸飾及鼻飾り等皆金屬を以て作られたるものを用ゆ、少し身分高きものは金銀を以て製す、鰐魚の之等人間を食ふ時金屬のみは消化せずして永く胃中に殘れり、鰐魚を捕へて第一に解剖するには胃にて印度邊の鰐魚其大なるものは金屬の胃中に無きものは殆んどなし中には餘程古代に流行せしものを發見することありと云ふ

○錫蘭島にて浸禮教會の宣教師チー、アール、エドワード氏の實見せる鰐魚と熊との闘爭談あり、一日路を迷ふて內地澤地の叢中にて偶然子



熊を口にせる大鰐魚を發見したりしに、何處とも無く大なる牝熊の來て非常の怒をなし直ちに大爭闘を初めたり、鰐魚は終に熊の爲にその咽喉部を喰ひ破られて倒れたるも、鰐魚が末期に與へたる其尾を掉ふての一打擊は、終に熊をも倒し、共に死せりと云ふ、鰐魚の尾は非常の大力を有せり、

●强制投票

左に摘要する所は白耳義に於ける强制投票の法にしてウインドシュレル氏がハーパース週報に記載せる所による、瑞西に於て類似の法規ありと聞けども兎に角多く類例を見ざる所なり

選擧は行政官并に警官の監督に屬し、監督官吏は選擧名簿調製の責に任ず、監督官は投票の適當なりや否やを監視するのみならず、又之れを怠るものなきや否やを注意せざる可からず、而して若し之を怠るものあらば直ちに法庭に招喚せられて譴責又は過料に處せらる、但し選擧日以前に相當の手續を以て其筋の許可を得たるものは此限りにあらず、再び犯するものは刑の加重あり且つ其氏名を書して罪狀を附記し之を官廳の門前に掲示す、十年間に於て四回に及ぶものは公民の資格なきものと認め、其氏名を選擧名簿より刪除し、以後十年間何等の公職に就くことを得ざらしむ、若夫選擧の結果に影響を及さんが爲め故意に投票を怠りたるものは一ヶ月の禁錮に處し、更に五百フラン以下の罰金を附加す、其之れを教唆したるもの亦同じ

强制投票の結果として其選擧區以外の地に住居するものに對しては旅費辨償の制あり。

●黑人の文化

巴里万國博覽會場の一隅に頗る觀客の視線を引く可きものありたり、之れ即ち地圖、寫眞、標本、工藝品又は繪畫等の方便によりて米國に於ける黑色人種の過去及び現在に於ける境遇發達を社會學的に表現せしめたるものなり、吾人は僅かに半世紀以前までは人間と齒せられず、牛馬の如く賣買せられ、又牛馬の如く驅使せられたる黑人の、今日如何に文化せるかを見て大に驚かざるを得ざるなり、

千七百五十年に於ては其の人口僅に二十二万を出でざりしも本年に至りては其の數無慮七百五十万人に增加し之を西班牙本土の人口に比す

れば其半數に近く千八百六十年には其都市に住居するもの僅かに四分五厘に過ぎざりしもの今は一割二分に達し雜種の數三十年間にして五割の増加を來したり、人口の二割は家宅の所有者にして六割は其子弟を學校に入れ文盲者は匈牙利に等しく露國よりも少數なり、

今百分比を以て其職業の種類を示せば

農業に從事するもの	六二、
雇人たるもの、	二八、
製造幷に機械工業に從事するもの、	五、
商業幷に運輸業に從事するもの、	四、五
紳職（プロフエッション）にあるもの、	五、

而して凡五十万町歩の土地を所有し、二千四百万圓の地價に對して租稅を納めつゝあり

學問の如何を見れば黑人の著書一千四百部あり、而して發明によりて專賣の特許を得たるもの千八百三十年以來三百五十種に及べりと云ふ。

●日曜發刊の効果

ニューヨルクのデビス氏は全市大新聞の編輯及び發賣に就きて説明すること最も詳なり、氏の説によれば大新聞社の會計は主として其日曜に出す特別の新聞によりて支へられ、純利の四分の三は全く其賜ものにして日報は或は電報料或は高價なる俸給或は又通信等のため莫大なる失費を要し收支相償ふこと頗る難しと云ふ、氏は更に所謂新案日曜附錄の發達を述べて曰く

其發案者たるモーリル、ゴッダードは當年三十三歳になれり、二十歳にしてダルトマウス大學を出で同時にニューヨーク、ウォールド新聞社に入る、五年にして日曜發刊の、主任を命ぜられ、全然自由の處置を許さる、蓋し一度び其技量を確めたる上は之に十分の權能を與ふることこれ社主プリュル氏の常策なり、

夫れ此の如く日曜發刊が主筆の監督を脱して獨立の地位を得たるは全くゴッダード氏に始まる而して市部附錄の畫工幷に記者は日曜記者の要求に應じて時間の許す限り材料を供給するの任あり、

然れども氏は尚之れに甘ずるを欲せず一大決心を以て全然獨立の編輯局を設け專任の畫工、記者幷に助筆を置きたり、其餘りに過激なりしため當時巴里に滯在せる社主の下に「此若猴將に君の資産を蕩盡せんとす」との飛電ありしと云ふ、

氏は紙面改良の手始めとして中央公園に於ける奇怪なる猿の畫像を一頁大に印刷したり、蓋し從來は僅かに二三欄を以て限りとせしことなれば、一頁大の圖解は大に讀者の視線を集めたり、後幾許もなくして更に二頁大の圖解を挿入することゝなれり、其他輪廓に記事に有らん限りの奇を盡したるの結果、發賣高一週平均一萬或は一萬五千の割合を以て増加し五ヶ年間にしてニューヨークウールドの發行數は二十萬より一躍して六十萬の多きに達したり此に同社を辭してジャーナル社に入り同樣の地位に就き、其發行高を十萬より增加して六十萬に上らしめたり、

斯る間に於て雜誌的趣味は大に日曜新聞の紙上に輸出せられたり、而して發行高の斯く增加を來したる所以は專ら滑稽附錄の力なりと稱す採色圖解は發賣數の增加には何等の影響なかりしと云ふと云へとも、兎に角一大改新の點ならずんばあらず、

紀行

比摩賴耶紀行　其二

櫻井箕峯

臥虎丘に向ふ

二十六日午前二時半ニポール人ボーイの早く朝食を室内に運び來るあり、且つ云ふ馬の用意已に成れりと、倉皇食を畢りて庭前に出づれば、此ウッドランドホテルよりの同行者案内者を加へて凡て十一人有り、本邦人四名英國人六名其三名は婦人なり。

ダーヂリンより東南六哩、ターガーヒルと稱する地有り、ヒマラヤの最高峰二万九千呎のエベレストに此地に至て初めて壯容を見るを得べし、旭日遙かに印度洋頭に出でゝ此世界至高至大の山脈を照すの時は天下無比の大觀と稱せらる、今や數時間の後此景に接するかとも思へば恰も千古の大偉人に謁せんとするか如き胸裡一種異樣の感に打たる、馬は除々其深さ其廣さ、共に測るべからざる大溪谷に向へる山腹の石逕を辿る、下弦の月密雲に隱れて天地森寂、只蹄聲の曳々大古の深林に反響するを聞くのみ、此邊二十年前迄は虎豹の人を襲ふもの多かりしも、ダーヂリン鐵道の敷設以來大に其害を少ふせりと云ふ。

我々の騎せる馬は西藏駒と稱するもの、體の小なるに似ず無比の健馬にして、恒に崎嶇の山道に馴れ、能く一万九千呎の高度まで雪を蹈んで登るを得、平生騎行に慣れざる我には馬の岩石に蹶く毎に背上より投げ出されんとし、心膽を寒からしめたること屢なり、一行中落馬せるもの二人、幸ひにして脚下の白雲中に葬られずして止みたり。

五時タイガーヒルに達す、憾むべし天益曇り微雪霏々、眼前に横はるキンチンヂヤンガの大連嶺すら雲の紗を隔てゝ僅に其彷彿を認むるのみ、一行寒威の凜烈に堪へず、馬を下り「ヒマラヤ松」の枝を集めて燃料とし暖を採る、待つこと一時天已に明けて雪彌よ甚し、止む無く更に明朝の再來を期して歸途に就く。

喇嘛教のゴムパを訪ふ

ホテルの北方十餘町英人のヲブサーベートリー、ヒルと命名せるところあり。之れを北に下れば喇嘛の寺院あるを聞き、晝餐後天の晴れたるを幸ひ之を訪ふ、ヲブサーベートリーヒルはダーヂリン市中の最も高きところにして、此地より山勢に從て不規則に作られたる

市の全部を見るを得べし、山間の部落又は西藏に通ずる道路は悉くダーヂリンを中心として集まり、或は谷に下り或は嶺に出で一高一低の棧道、杳々白雲の裡に沒し去り、三十四十隊をなし、綿牛を曳き荷を負ふて去來せる土人の隊商は遠くより之を見る恰も蟻の行列を見るが如し。

喇嘛の寺院は土人呼んでゴムパと云ふ、方四間計りの粗末なる土藏造りなり、堂に入るの前先づ珍らしく思はしめたるものは白布に西藏文字の經文を書し、恰も我國の五月幟の如く竹竿に附したること是なり、堂の周圍幾十本と云ふこと無く之を樹て、樹木の枝にまで吊り下げ居れり、聞けば信者の死せる時、其家より之を奉納し、同時に親戚知友よりも之を寄贈すること恰も我國に生花放鳥を葬家に贈るに同じと云ふ、堂内は大日を中央とせる三尊の佛像有り、佛前の莊嚴左迄支那日本に異なるところを見ず、只我邦ならば賽錢箱と云へるものに、金錢よりも花瓣を供養し、寺塔を建立するとの意味なるか、多く粘土を以て作れる小き塔の形を奉献せる、或は花瓶に孔雀の羽を挿める儀式の時に用ゆる我國の太々神樂の如き假面を數個佛前に列べたる等はやゝ異様に感ぜり、特に人間の腿骨を以て作れる喇叭の如き最も珍らしく思はれぬ。

喇嘛僧が讀經禮拜の儀式は之を見る能はざりしも、二人の信者が例の小き轉法輪機を回轉して「チム、マニパドミー、ン」と聲悲しげに唱へ居るを見る、予は假りに此機械を轉法輪機と譯せり別に適當の譯語あるや否やを知らず、其機械は普通、圖（次號紹介）の如きものにして、大なるは其形も異にして丈餘に及ぶ、その大なるは勿論手に携ふるにあらずして一所に備へ付けて座しながら回轉し、又は風水の力を借りて回轉す、然れども普通は手に携へて「チム、マニパドミーン」を唱ふるなり、機中咒文を書ける紙片を以て滿され、一回轉の一唱は則ち百万遍の功德に當るとせるならん、此咒は我國に南無阿彌陀佛の六字が普通なるが如く、喇嘛教徒は悉く之を唱へ、我國に傳はる三藏經中にも、大明陀羅尼、六字大明眞言、觀自在菩薩六字大明心咒等の名目に於て傳來し「唵、麽尼鉢訥銘、吽」と書き顯はさる、其意譯英語には已に"Hail to him of the Lotus and Jewel"と譯されたるも、古來已に漢譯となり居るや否やは未だ之を知らず。

住寺の喇嘛老僧紅教の方に屬することゝて、怪げなる紅衣紅帽にて、下裳は何色とも分らず、多分一度は紫色

なりしならんと思はるゝ襤褸を着し、煤に塗れたるが如き容貌して、言語の通ぜぬながら好く人を接遇せり、喇嘛教國は今猶「宗教は凡ての物」たるの時代にて、僧侶は祈禱禮拜の外、佛具を作り經文を印刷し、易者なり、醫者なり、學者なり、敎師なり、音樂者なり、果ては普通人民の履や帽子迄も僧侶に依て製造され、此地より北に進めば寺院は皆商品の倉庫を兼ぬると云へり。」佛像の背後多く西藏の經文を藏せるを見る、手眞似にて其數葉を乞ひ、一ルーピーの報謝をなして堂を出づ。

●西藏人と語る

ゴムパを出づる數歩、一西藏人の年齒四五十と見ゆるあり珍らしげに余を眺め居しが遂に英語にて何處の人種なるかを問ひ出でぬ、余は日本人なる由を答へ日本の說明をなし、遂に路側の石に踞して西藏の一妻多夫の有樣、西藏人相互の最敬禮則ち舌を出し左耳を示すの模樣などを問ひ、談話は種々の方面に亘れり、彼の名はツアヒウワンタ、此ダーヂリンに生れたるものにて西藏の首府には僅に數回往復せるのみにて、家は現今英領ダーヂリン洲の裡此より北二十哩の地にありと云へり、余は何故に西藏には外國人を入れざるかを問ひしに、彼は容を改めて曰ふ、予は予の父より聞けり、今より八十餘年前、予の祖父母が生存してシッキムとラッサとに往返せる時代、此地はシッキム王國として



西藏の藩塀たりしが、最初二人の白人如何にも零落して乞丐となりて迷ひ來れるあり、土人は彼等を憐み厚く彼等を待遇しぬ、彼等は居ること三四ヶ月にして去り、更に又他の白人の來るあり、旅行者と稱し、商賣人と稱し、道者となり、乞丐となり、一去一來、白人の足蹤を絶たざるもの二年計り、皆土人の厚遇を受けて還れり、ア、何等奸黠の事ぞ、我々の先人が情を掛けし彼等は、悉く軍人なりき、彼等が地理を探り事情を知悉せるの曉は、其恩人に向て銃砲を向くるの兵隊

となりて此土に再來せり、而して終に王國を占領しぬ、聞けば楞迦(錫蘭島)もかくして占有せられ、緬甸も又かくして彼等の有となれりと、西藏人の彼等を恐るゝ又宜ならずや、以來西藏の國境に入るものは支那人を除いて其何種の國人たるを問はず、生還を得せしめざることゝなれり、元來西藏人は尤も溫和なる人民なり、寧ろ溫和に過ぐるの人民なり、此溫柔猫の如き人民をして白人より獰惡虎の如く思はしむる其罪果して何れにあるかと、語り去て大に嘆嗟の意有り、余は西藏の首府に達するまでの難易を問ひしに云はく、ゼレプラ、山道、タンクラ山道、ドンキア山道、コングララマ山道の四大難所、低きは一万四千呎より高きは一万六千五百呎、天を摩するの嶮路を大古の氷雪を蹈分けて進まざる可らず、然れども綿牛と西藏駒は此等の天險をも超へ行くなり、隊商は通常ダーデリンより二十日間にして西藏の首府ラッサに達し得と、余は支那の商人が終始此地を往來し現にダーデリンに支那人の商舖あるを見て、我國人が西藏に入るの難は白人に比して比較的困難の度少かるべきをいよ／＼確かめぬ。

土人の市場

西藏人と別れて四時ホテルに還へり、再び前日其一端を見舞ひし土人町に至る。

千八百九十一年の統計に依れば此ダーデリンを首府とし、英領ダーデリン全部千六百六十四方哩あり、人口二十二万三千三百十四、村落千三百十九、其家屋四万五千百二十六戶と注せらる、此廣き地方、種族としてブーチヤ人リンブー人レプチヤ人ニボール人西藏人カシユミル人印度人あり、加ふるに白人と少數の支那人を以てす、喇嘛教回々教印度教基督教の各教徒雜然として悉く首府ダーデリンを中心とし集散す、故を以て土人町の景况種々の奇觀を呈せり、其數の最も多きはニボール人にして、彼等が歌ひつ笑ひつ男女老弱左も愉快氣に見ゆる樣、厭世的なる印度人に對照して特に快活に覺ゆ、彼等の容貌動作は西藏人よりも支那人よりも日本人に酷似し、洋服或は筒袖を着せる男兒、一種の束髮に筒袖の上衣と前掛樣の袴を穿てる婦人などを見るときは、思はず日本語を以て聲を掛け度き心地するなり。

西藏ニボールの古錢類、宗教器具、種々の骨董品、虎豹の皮、銀細工、等を初め、ヒマラヤ山間の產物一としてあらざるは無く、又一として我々の目には珍らし

からざるはなし、種々の物品を購ふて歸る。



（ニポール婦人の袖乞）

ダーヂリンとキンチンヂアンガ峰（二万八千百六十六呎）の間、直經四十五哩、其間何の遮ぎるものも無き一大渓谷をなす、此夕快晴、万仭測る可からざるの深谷は下方遥に白雲の封ずるところとなり、眼を上ぐれば無數の氷河、長さ二万尺、キンチンヂヤンガの絶巓よりして半腹に横はり、斜陽之に映じて灼々眼を射る、此の如きの景又決して我國に於ては見るべからざるものたり。

夜、ホテルの食堂に於て、ダーヂリンの建築會社にあること八年と云へる一英人の余等に告げて云ふ、予は多年の經驗にて此地の天氣豫報をなすに巧なり、今夜の星光は慥かに明朝の快晴を告ぐ、諸君は必ず明旦タイガーヒルに於て比摩剌耶の絶景を見るを得んと。此夜寢に入るの後、戸外白人のヨンキナ〳〵の俚謡を聲高かに歌ふて過ぐるを聞く、計らざりきヒマラヤの山間外人に依て故國の歌を聞かんとは。（以下次號）

遊北記程　一

（北極探遊紀行）

清藤

七月三日晴午後雷雨晩霽温度六十四度
午前龍動の寓居を出で十一時セントパレプラス停車場より特別仕立滊車に投じ十二時半チリブリーに下車直ちに探遊船キユツコ號に乘込む
キユツコ號はアリエントライン會社の所有、容載約四千噸、平素は濠州航路に充つるものなり今回北大西洋寒帶地方探遊船として内部の莊飾等新に修繕を加へ又

乗客多數の爲、中等船室をも總て上等室に改修し航海中の遊戯運動器具及音樂手をも搭載せり、船客表に依れば百八十名の乗客中大多數は英、蘇人にして他は佛伊米及び濠州香港等の旅人なり
午後四時奏樂と共に解纜し雷雨を冒してテームス河を下る
七月四日快晴六十一度
ノースシーの風波穩ならざれど卅日間の石炭及用度品を滿載せるが爲船体の動搖少し本船は全く探遊の爲に供せしものなれば旅客携帶品の外他に一個の荷物をも搭載せざる旨船員は語れり
七月五日曇午後快晴五十九度
午前十時右舷に數個の小島を阻てゝ一帶の山影を見る既に諾威に近けるなり
午後二時左舷にセントサーター島を見次でリールサートルと諾威陸地との間を過ぎ除々とベルゲンの灣內に向ふ兩岸は全く岩石にして犬牙出沒し所々青草の上漁家散在し風景甚佳六時ベルゲンに着航程五百九十浬
晩餐後上陸市街を散策し博物館魚市公園を見十時歸船す天未だ暗れず甲板上讀書に堪へたり
ベルゲンは首府クリステアナに亞ぐの都會にして人口七万餘漁業を以て著名なり、街路は二三の大通を除くの外狹隘不規則にして人家は概ね三階四階の石造なり又港の一端に三個の船渠ありて其最も大なるもの長さ三百五十二呎幅六十六呎深十六呎半又貯炭庫には常に一万二千噸の石炭を儲せりと云ふ昨年の調査に依れば漁業中最も主要なる鱈は九十七年六百十万尾九十八年四百万尾但し此減少は漁獲期に西米の役ありしに起因し、鰊は九十七年一百廿三万バーケル九十八年六十万バーケルなりしと、
七月六日快晴五十九度午前九時上陸同船の探勝隊と共にクック會社より備置ける四人乗の馬車に分乗し港の南東五哩を阻つるフィチセンゲルに赴きスタープ、タルケの古寺を見る木造異樣の堂宇にして十二世紀の建築なり、曾て當國ホルタンの地にありしを米國領事ガーベ氏買得して自家の庭園に移せしものなり此園中の眺望臺に上れば山巒起伏の間ストア、ルンゲ、ガーズュファンド等の諸湖を望み風光最佳なり歸途其湖邊を過ぎ更に風景を賞してベルゲンに還りグランドカフェーにて晝餐を喫し四時フチスファンゲン行の列車に投入す、路は漸次山腹に入りて兩岸の峯巒屛風を立つる如く其間にはベルゲンより深く內地に突入せる淸灣一道

の紺碧を湛へ白鷗波に點じ小帆灣を出づるの狀畫も又及ばず、又所々岩石の上に茅屋の散存するを見る土人鮭を釣るに設けたるものなりと、二時間走過すれば海灣初めて盡きて溪流となる山勢漸く穩かに溪を夾むの兩方は坦々たる平野にして靑草氈を舖くが如く林樹扶踈の間、茅屋隱見、牛羊所々群を爲せり、更に進めば地勢再び變じて峻峯突起し高きあり低きあり巉岩千仭一木を生ぜざるあり綠蔭の絶壁に飛瀑の掛るあり、溪流は全く激湍と化して雲烟奔騰するを見る、此中車は忽ち飛橋を過ぎ又岩窟に入り、壯觀名狀すべからず、更に山窮り溪盡きんとする處一個の隧道を通過すれば別に一境を開きて連山は眠るが如くファグスファン湖は寂として死するに似たり、湖邊數十戶の小村をフヲスファンゲンと名け此處に下車す行程六十七哩午後八時二十分

湖畔眺望の最も佳なる處に木造淸雅の大なる旅館あり、一行此に投ず、晩餐後湖上の輕舸に棹すものあり、或は靑坡に花を摘むものあり、各適意の運動をなして十一時過ぎ歸宿す房中灯器無く窓帷を捲けば湖上の殘雪晩暉に映じて淡紅彩るが如し

七月七日晴五十七度午前七時起床朝食を畢り庭に出づれば廿五輛の馬車齊列して一行の出發を待ち受け居れり婦人は多く四人乘の箱馬車に男子は二人乘の輕車に分乘す八時五分出發湖邊を走過すれば兩山に相亘りて巉岩對峙し僅かに道路と溪流を通ずるに過ぎず道路は探勝者の爲に常に修繕せるを以て溪山奇抜の境にあるも殆んど車輪の聲を聞かず行々勝を探りて九時廿分一小驛に入る驛後高さ五百尺巾三十尺許の一大瀑ありツヰンドースと名く飛沫朝陽に映じて甚だ壯觀なり十時廿分フィンエー驛にて小憩し十一時廿分ヲッパイムに着す湖山の形勢はフヲスハーゲンに類して一層雄大なるものなり湖畔の旅館に晝餐を喫し午後一時發車、湖岸の平地一帶の草原紅紫黃白の草色咲亂れて我四月春郊の景に似たり、平地を走る一時間兩山忽ち接して前頭九折の峻坂あり下車之を攀ぢ盡すの處此山脉の分水嶺にしてレダール峽の全景を觀望し得べし、兩側の山岳は雄大にして此都淵底より直立天を摩せんとする一岩峯ありスナットと名く高さ三千六百二十呎なり眺望少時百曲の峻坂を降らんとて忽ち万雷の轟を耳にす、スタールハイムの瀑是なり、高さ五百尺、又少しく行けはシフレーの瀑あり高さ三百尺共に斷崖を直下せるを以て甚壯觀なり、近傍淸潔なる酒舖あり榻に倚りて



（吁月島丸）

風景を貪るもの多し降り盡して溪橋あり皆路塵を拂ひ漱嗽を爲し再び馬車を驅る、行くこと少許ヨルダルの峯下に到れば、路傍より直立二千尺長數丁に渡る一枚の大岩石あり、仰望心膽を寒からしむ、此處を過ぐれば削壁鑽峰林立して孰れも千尺二千尺の高を有し、峯頭の殘雪無數の瀑布となりて半天に飛奔す、三時四十分グットファンゲンに着す、探勝船キユッコ號は昨夜ベルゲンを發し此地に回航して一行を待てり、直ちに船に還り午後五時解纜、

(接後)



詞藻

師走

四方太選

いそがしき師走半ばの艤　長骨坊

鐺鉄の利を爭ふてゐる師走哉　小宰相

灯寒き師走の市の人通り　梅の舍

百兩の身の代さへも師走かな　いち子

借錢を山の如くに師走哉　吐霓

馬賣つて淋しき納屋の師走哉　嚴子

煤けたる屛風を立てる師走哉　一堂

町中に師走の寺の淋しさよ　六郎

北清の事定まらず師走かな　柳家

無盡講の圍も當らぬ師走かな　輪月

里遠く夕師走の鐘がなる　萩水

花瓦斯をつけて師走の勸工場　秋子

新藁を納屋にとり込む師走哉　千江

さびれたる師走の市の人少な　啞子

神棚に鼠のさわぐ師走かな　望東

椽先の師走月夜や水仙花　紫

官林を拂下げたる師走かな　洞帆

煤を掃く隣近所の師走哉　喬山

學校の休暇や師走半過ぎ　香谷

村會の事むつかしき師走哉　一泉
掛物を賣り拂ひたる師走哉　洋々
鬼貫が紙衣も古りし師走哉　仝
三年の下宿出て行く師走かな　春光
五六日日和のつゞく師走かな　仝
掛取に都へ上る師走かな　削玉
收賄の不起訴になりし師走哉　仝
引越の調度すくなき師走かな　一村
罵て質屋を出づる師走哉　仝
此頃の喧嘩長屋も師走かな　快雨
相遇て相言はざりし師走哉　仝
佛だんを買ふや師走の新世帯　五空
うきもの丶酒の債も師走哉　仝
乾鮭に師走の店の灯哉　炎天
風立ちて師走の市のほこりかな　仝
未だ住みて師走の町の賣屋敷　生巣
荷車の師走の市に續きけり　仝
寺に住んで机閑なる師走哉　袖笠
道場や師走の月の窓明り　仝
市人の利を見て歸する師走哉　ゆかり
長尻をだましていなす師走かな　仝
科人を晒す師走の衢かな　時雨
分家して小店を開く師走哉　仝
そくばくの歌代得たる師走哉　坂醉
万引のしばられて行く師走かな　仝

室咲の梅活けてある師走かな　一轉
代議士の都に上る師走かな　仝
破れたる柱暦も師走哉　仝
凩や師走の町を吹きあらぶ　天風
貧しさの薪乏しき師走哉　仝
抵當に家も入れたる師走かな　仝
かりそめの風邪に病みつく師走哉　方公
米を賣る師走の市や小百姓　仝
これかへす雪や師走の市せまし　仝
經師屋に催促をやる師走哉　稻青
追剝の出づる噂も師走かな　仝
短さの日の早く立つ師走哉　仝
仲人の返辭を急ぐ師走かな　仝
水車場の米盗まれし師走哉　寒樓
山茶花のさかりも師走半ば哉　仝
水涕や師走の市の薺賣　仝
葬禮の又通りたる師走哉　仝

松の内　一月十二日締切
紙鳶　二月十二日締切

漫遊雜詠（上）

北海道[illegible]　源清陰

北溟烟霧晝冥濛。咫尺難分積水中。滊笛聲々警航路。
火輪疑是坐虛空。
日暮冷風吹客衣。舷頭濺沫作花飛。東西南北不知處。
濃霧如雲白四圍。

ビクトリヤ
北丘的里海上

又上鵬程萬里舟。滿天風雨壓羇愁。今朝放眼頻呼快。
一髮青山認米洲。

カナダ
加那佗車中

懸崖萬仭似屛風。噴雪奔湍下碧空。一瞬快車三百里。
回頭去路隱雲中。
奇峯如劍突靑霄。積雪皚々夏未消。脚下忽驚萬雷響。
飈輪轣轆過溪橋。
坤輿一匝往如還。萬里梯航半月間。夢寐多年初得志。
吟鞋踏破落機山。
四面茫々不見山。曠原千里鳥飛還。朝來過處炊烟絕。
落日空春野草間。
平原漸盡入林丘。鐵路朝來過幾州。巖樹野花烟雨裡。
人家隱見大湖頭。
湖上遠山列畫屛。車中眺望客心醒。水邊巖角燈如畫。
樹色濛々暮雨靑。

セントリール
入蒙的里市

紋都風物入吟眸。大陸連山欲盡頭。從此雲濤三萬里。
征帆何日到歐洲。

紐育途上

南來却覺氣淸涼。到處瑠璃瀲水光。一抹紅霞朝日影。
塔尖拖影落湖長。

紐育雜詠

微醺曳杖獨徜徉。愛此公園夜色涼。綠樹紅燈噴泉下。
如花兒女滿胡床。

ブルクリン
伯爾格林橋

兩岸萬家相對遙。舟如落葉賭江潮。半天虹影八千尺。
呼做人間烏鵲橋。

自由塔

回頭往事夢悠々。億兆于今貴自由。塔上神人手中火。
光輝永照十三州。

發紐育

又挂征帆去向東。魚龍嘯處駕長風。自由塔外日將暮。
百萬層樓沈海中。

記所見

海天雲散曉星殘。裹骨布帆投碧瀾。萬里長征葬魚腹。
家人恐尙禱平安。

船中雜詠

何人海上弄風箏。一曲高歌萬里情。想起去年嵐峽夕。扁舟吹笛月中行。

海上曉風催海寒。舵樓嘯傲倚欄干。舟人指點天之角。一髮青螺是愛蘭。

入龍動

萬里回頭路渺漫。海程無恙入英關。久思龍動繁華景。目睹猶爲夢裡看。

封斯發原（フチスファーゲン）

奔湍激石萬雷鳴。欲墜危巖頭上橫。忽過石門風景變。青山如笑碧波平。

遊羅謨斯達角（ロムスダルホルン）

聞說風光最奇絕。繫舟驛馬問仙蹤。天邊矗立壁千仞。脚底橫浮雲幾重。偃樹爲梯攀碧嶂。飛泉作雨濺青松。晚來出峽時回顧。落日光寒雪一峯。

過俱都海峽（グツトヘーナン）

破壁一發萬山鳴。船入峽間探勝行。飛瀑排絲頭上落。危巖勝劍眼前橫。海潮通澗魚龍蟄。峽嶺過天雲鶴生。偏喜夕陽紅未沒。貪看風景慰羈情。

即事

紫微圏北三百里。解道天地有盈縮。飛檣直欲衝星辰。氷海屈曲入幽谷。兩岸攢峯玉筍森。矗立千仞無一木。峽雲斂日抹紫金。海波涵月轉寒玉。此時不知夜耶晝。只見日月影相逐。風光變幻須臾間。暝暉射雪山一角。

登北岬夜半觀日

銅標之北三萬里。星斗落掌坤軸缺。此地由來不通舟。四時堅氷結如鐵。唯當孟夏三伏天。浮槎載客探仙窟。蒼溟無際嚮太虛。雲中一峯聳突兀。荒磯盤紆攀巉巖。千尋鐵鎖通天闕。風濤寒碧魚龍嘯。凍髭戟張肌欲裂。海上夜半看金烏。一道流輝如染血。振衣巖角還咨嗟。天地之變何奇絕。聞昔清帝北巡時。親談絳象人卷舌。方今文物逐日新。遠征何必人中傑。欲酬壯觀搜枯腸。一詩不成耻才拙。回首乾坤氣忽蘇。曙光次第映氷雪。

想不必奇、語不必工、目之所觸、興之所到、隨手拈出、矢口成章、而務屬上、有竹枝遺韻、描景叙、有造化啓論之概、但見風水奔盪鯨吼鵬騫之狀、不見區々文字、蓊鬱排風雲之雄偉、自然呈巨觀耳、非筆墨所得而制也、

王子金剛寺觀楓　　一雨道人

吟興隨秋爽。往遊蹤遂探。夕陽明絕澗。霜葉艷空潭。風景如新接。地形宛舊諳。留連落人後。幽磬動寒嵐。

夕陽霜葉一聯可誦耳、六句徒費紙筆、

又

覆水霜楓映夕曛。一橋截澗路相分。旗亭架在錦雲上。

人語倒從潭底聞。

奇景奇想、却用平易之語、殊妙、

散策到道灌山

獨往趁朝霽。徘徊古阜頭。靄懸遙嶂翠。日晒近郊秋。
孤店連荒廟。茶梅映橘柚。英雄跡空在。俯仰思悠々。

悭字稍僻、後聯對法、用變格亦佳、柚字本屬宥韻、此爲尤韻、前人有例乎、

歲晩書懷

水本迂堂

客中其奈隙駒奔。淅瀝寒風入破軒。自愧青衫涴塵垢。
遙懷白髮倚閭門。孤燈背壁弔形影。急霰撲窓驚夢魂。
不識誰家絲竹聒。滿堂銀燭照金樽。
志業未成烏兎奔。綿衣何日上高軒。書生本欠封侯相。
名刺難通權貴門。韓子慇懃送窮鬼。閬仙憔悴役吟魂。
祭詩作賦屬徒爾。笑對臘梅開綠樽。
崢嶸世路懶趨奔。紙帳蒲團臥小軒。學劍誰能遊楚國。
吹竽未得向齊門。五更寒漏頻催老。半壁疎燈暗斷魂。
回首故交多落托。重逢何日共杯樽。

郊寒島瘦、寒乞骨相、苦語嘔血、果爲何用、李杜光焰萬丈、猶不免覆瓿、況此寥々者乎、

瓶中臘梅

加藤淸江

瓶裡數枝香暗含。不須杖屨出茅庵。到頭孤介有誰伍。
如此淸癯何得堪。臥雪偶參安道宅。祭詩應供閬仙龕。
殘燈守歲影相映。的皪寒星一二三。

孤介淸癯、與俗相乖、勻水儉活、不爲世用、作者果其人乎、

讀大觀村觀梅詩卷

次韻得五首

藍川隱士

大觀村在肥後、距熊本數里、山遶水縈、梅花頗多、以地之僻、名不甚著、往者富岡耿介職在牧民、巡部之次、停車游賞、爾後花時、雅客成群、亦可見耿介善政之一端矣、

山中高臥謝衣冠。松竹訂盟凌歲寒。白雪吹香隨處遍。
黃昏帶月幾人看。水邊幽石瘦相倚。林下冷雲凝作團。
最喜江南消息早。春風第一入毫端。

次北水翁韻

孤山遺愛此移栽。標格洒然無點埃。和靖句從言外悟。
元章詩向眼前開。斷橋流水扶筇立。斗酒雙柑出郭來。
想見高人多雅興。笛聲三弄酒三杯。

同上

恩澤被民如醴泉。誦絃聲湧鎭西天。公餘行樂留遺愛。
亂後經營解倒懸。立教作師兼作父。在官無黨又無偏。
梅花亦抵甘棠樹。不怪流芳千歲傳。

次耿介翁韻

片石題名在。傳觀比寶珠。牧民移俗化。巡郭得仙區。
詩客兩三輩。梅花千百株。風流兼治績。一代比倫無。

次雲颿翁韻

大觀在何處。九州天一涯。春風消息早。騷人群且嬉。
耿翁守此土。令譽遍遐陬。巡部有餘暇。琴鶴常相隨。

輕裝謝事馬。逍遙杖一枝。時則詩思動。踞石撚吟髭。
濟勝刈荊棘。開幽踄嶺崎。忽見萬梅樹。臨水蟠根欹。
假寢老龍臥。苔色蒼鱗皮。恍訝入瑤闕。萬朶花迷離。
望之唯一色。簇々白雲垂。就之如蘭麝。淸香迸墨池。
孤山林處士。高躅猶可追。造化創仙境。幾世藏靈奇。
梅花自開落。山深人迹稀。待翁啓秘鑰。始使江湖知。
嗟吾在塵𡋯。何以慰所思。幸拜瓊琚贈。餘芬沁敝衣。

同上

風流好事、使兒子才知之、必採入詩話、

登嶽　秋吉箬南

十里登攀投板屋。今人云是猶山麓。恍疑身是化神仙。客夢悠々雲與宿。

曉來攀到最高巓。身似雲中羽化仙。一路登々三万尺。人乘旭日競升天。

奇想々々

白雲如海渺無涯。不盡天風脚底吹。俯瞰人間猶混沌。宛如剖判以前時。

以上三十九首　町田柳塘輯錄

讀前田含潤師常州紀行詩　柳塘居士

文章法器兩超群。儒佛同歸何必分。因姓便知菅氏裔。賦詩歷頌義公勳。當年鸞祖駐孤錫。（常陸板敷山有鸞祖遺跡、師詩紀之、）此日鳳輿臨古墳。（頃者鳳駕幸常陸、躬親閲武、特旌義公遺烈、贈正一位、）不獨湖山楓菊麗。毫端五色繞祥雲。

對食偶想咬將菜根百事可就語悵然成詠

儒餐呼青龍。佳名何所得。不見乘風雲。寒厨伴饘粥。我咬菜根過半生。一事難就空碌々。古人之語不可信。功名畢竟歸肉食。誰敎紋得黎莧腸。化爲膏粱肥口腹。嗚呼一身饑餓未須嗟。天下蒼生多菜色。

趙甌北詩有儒餐淡泊青龍白虎語、謂青菜豆腐、

亞米利加の月　五首　乘山

ニューヨルクの旅窓にて

酌めや綴り月に今ブルークリンの長橋に上らんとす

ナイヤガラ

水烟空に勝ること三千丈月を包んでしまいけり

ラ、ミーの大牧野

百千万の綿羊残月の下に臥けり

エルコに銅色人の部落を過ぎて

破驛月冴えてアメリカインヂアンの歌悲し

滊車落月を追ふてロッキー（落機を下る）を下り行く

新年雑詠

茂春

國内四方おろかますらし新年の空のもなかに色雲なびく

臣の子か朝服（ミカトコロモ）のよそほひに年の初日のきらめきわたる

大宮人年の初日のまかゝやく殿の大宮に爭ひのほる

足國の年の祝言をことおくとおほまへつきみの朝參（ミカトマヰリ）す

大君の惠たゝえてかすゆ酒に口つゝみうち新年迎ふ

新年の日照る大野にたち見れは瑞のみあらかに雲ゐ棚引く

賤われも君ことほくと新年の大野の若菜つみ奉る

年の初日直さす岡に上り見れは天瑞（アマツシルシ）の國内にゝほふ

いかしみよの幸はふ國の國もせに新年祝のみ旗なひかふ

安國のみ年初日を壽（コトホ）かひ寶の見らかゑひなきするも

海賊

杉谷代水

「斷れし帆綱をつくろひて、
とく、島かげに漕ぎ入れよ、
すさび吹きまく疾風（はやかぜ）の
一夜も今は限りあり。

風よ、怨恨（うらみ）か、汝（な）が叫び、
幽界（よみ）より來る聲ならば、
思ひのまゝにふきたちて、
わがこの耳をなぐさめよ。

嫉みすてたる世をこゝに、
我れのみことばつきはてゝ、
聲ばかりなる汝（な）が歌に、
きくべき調べはあらずるか。」

あやしの船の舳頭に、
精かとばかりものすごく
立てるはそれか亂れ髪の
勇士の姿、凛として。

「とく〳〵、劍あらためて、
汐のくもりを打ち拭へ、
弓手にあげんコーランの
意義今つひになき世なり。

聖き海路を海として、
陸のけがれのゆきかひを
はらひ盡くさん時までは、
磨げ、翼あるこの劍。

光は寒し、天地の
狭霧の中にきらめきて、
純と不純をたちまちに
二つに剖かんこの劍。

月よ、はかなき汝が心、
迷ひに堪へぬ人の見に、
かはる姿の影見せて、
虚飾の歌を教へけん。

星よ、かひなき汝が力、
非天がおほふ雨雲の
夜の袖をば貫きて、
地にさす光はあらざるか。

なやみ、まぼろし、夢のなか、
闇、夕まぐれ、「罪の門」、
所謂影よ、清光よ、
そも何をかは照らすらん。

漕げや時なり、時よ時、
ながめもよしや和田の原、
はてよりはてに蓬々と
吹きてたゆまぬ風の音、

告ぐるを聞けばわだつみの
底なき淵をたちいでゝ、
さらに何をか求めなす
ものゝ聲にも似たらずや。

逆ふものなき風の音、
反すものなき濤の聲、

あゝ幾年の友として、
我がさす方につゞかんか。」

あやしや、見れば、漕ぐ船の
舷(へり)のあたり、おぼろ〱
あらはれて立つものゝ影、
幽鬼の姿さながらに。

『凪よ、あらしよ、
　業(ごふ)の火よ、
時よ、みだれよ、
　わざはひよ。

天もろ〱の
　風を呼び、
地はもろ〱の
　火を呼べよ。』

いふかと見ればわだの原、
波は沈みてをち方の
雲にこたふる遠こだま、
天一角のその叫び。

『海を讃(たゝ)へよ
　あら海を、
無限の「時」を期(ご)となして、
壊滅(くわいめつ)の歩武のいと高き。

海を讃へよ
荒海を、
入日の落すくれなゐの
色を炎のいろとせる。

海を讃へよ
荒海を、
波の起伏の萬千の
墳墓にまよふいきすだま。』

呼べば出でくるかげたまの
みだるゝすがた立ちまちに
波に現れ波に伏し
又も聲さへ陰々と、

『凪よ、あらしよ、
　業の火よ、

時よ、みだれよ、
　わざはひよ。
人に利剣を
　まかせても、
げにかひなしや、
　限りあり。
颶を讃へよ、
　颶よ颶、
血の霜薬打つ
　こがらしを。
颶を讃へよ、
　颶よ颶、
凱歌を呼ぶ
　旋颶を。』
『海を讃へよ、荒海を。』
『颶を讃へよ、旋颶を。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

離れ小島の夕づく日、
沈むか雲の影寒く、
かたぶき走る捨舟の
行くへは知らず波の上。

その夜小ぐらき海の原、
あやしの影のみちびきに、
迷ひ來れるをちの船、
あゝ命運の光なし。

波にかくれし一船の、
星かとばかり飛ばし來て、
飢ゑし鰐のはら〳〵と
落つると見れば、ときの聲。

凱歌の聲の空ちかく
重き雲間にこだまして、
波に群れ立つ妖靈の
むくろを運ぶおぞすごし。

評論

政界漫言

●伊侯の活斷

政界の混濁は沸騰點に達したり、日本人民は果して立憲的政治に適當なるや否や、日本の政治家は、果して國政の運用に能力を有するや否や、日本の政黨は、果して國家の威嚴を保維し以て國利民福を增進せしむるや否や、今や世の中は政界の懷疑時代となれり、而て是等の疑問を解決し懷疑時代に一導の光明を與ふものは何人ぞ、世人は伊侯を完全なる政治家とは信ぜず、伊侯を現時代に於ける審判者とは崇拜せざる也、然れども、立憲政友會總裁として內閣總理大臣として伊侯の位置や、世人の注目すべき處なり。

伊侯の活斷は尠くとも現時の政界に於ける懷疑を解決するに足らん乎。伊侯に活斷を望む、事少しく無理なりと雖も吾人は現時の形勢を思へば斷々たる勇決を切望せざるを得ず、伊侯たるもの何んぞ夫れ躊躇す可けん哉。（城陽政客）

●滿洲の開放

列國對清講和條件は決定したり、而も言の滿洲に關するものなく滿洲問題は單に露清間の談判に一任しあるか如きは何ぞや、

滿洲を露國の保護國と爲すの秘密條約は露清間に締結せられたりとの風說あり。風說の事實として顯出するは露清の間に於て殊更ら珍らしき事に非ず、旅大の借租も風說の事實と爲りし一例にあらずや、吾人は滿洲の將來を目して必ず露領たるべきを信ぜんと欲す、吾人は滿洲の露領たる可きを信ずと雖も而も全然露國の爲すが儘に一任し去るとを欲せざる也。

滿洲開放の一問題は列國の等しく注意すべき價値あり、通商上東洋平和の爲め滿洲を開放せしめ滿洲に於ける利害の干繫を列國に保有せしめんか、滿洲の進步は東洋に偉大の幸福を與ふべく露國の野心は危險を東洋に及ぼす程に實行せられざる可きか。北京會議の席上に於て何人か果して滿洲開放問題を提起すべきぞ。好漢小村壽太郎君新に北京の使臣として將に發途せんとす稜々たる君の氣骨は此問題を貫徹せしむるに足

る、幸に健在なれや。（仝）

●臺灣の經營

南門の經營は漸次其緒に就かんとす、此時に當り兒玉總督轉じて陸相たらんとす、總督更迭の經營上に及す影響豈に鮮少ならん哉。基隆築港工事と云ひ縱貫鐵道布設と云ひ土匪鎭定策と云ひ、對福建方針と云ひ今後着手す可き成功せしむ可き、繼續す可き幾多の問題は猫眼的更迭の爲め變々化々するを幾何ぞや、臺灣經營の如何は進取的國家及前途に横はれる試金石とも云ふ可きか。

米の製鐵大王カーネーギーは云へり「臺灣は日本の持物としては荷が過ぎる」と何等の暴言ぞや。されど今日に於ける日本國民は是言を暴言と爲し能はざるを如何せん。若し暴言としてカーネーギ翁に一矢報ひんと欲せば須らく臺灣經營を完美ならしめ日本國民の領土經營的能力を示さゝる可らず。

兒玉男陸相として總督を兼任す而て臺灣の事は後藤民政長官其衝に當る可しとの風評あり。

客あり先日後藤民政長官を訪ひ質すに風評の如何を以てす。新平昂然として曰く「政府にして此の如き勇斷あらんか、新平謹んで政府萬歳を唱へ以て決死の忠勤を勵む可し。僕の志願は臺灣に後藤村社として祭らるるにあり。腐敗したる政界の猿廻しとならんより寧ろ熱帶地方の樹陰に閑臥せんにはしかじ。君の云ふ風評の如きアテになるものか」と意氣快然ひそかに以て自任するものゝ如し。（仝）

●國交上の一汚點

中村彌六は政界の俠骨稜々たる人物として世人之を仰望したりき。然るに何んぞ計らん彼は亡命客を欺き數万の金員を詐取したる盜賊的政治家ならんとは。彌六一人の仕事にあらざるべし。必ずや幾多の關係を有する政治家あるべし。彌六を責め彌六に致命傷を與ふると勿論なるべし。唯だ悲む可きは永く米國政府に此事件を記憶せらるゝに在り。米國は我邦の先覺として我邦の親友として常に好情を以て交際したり。政治上の關係は尤も親密なり。通商上の關係は尤も有益なり。社會上の關係は尤も謝す可き幸福を有せり。然るに彌六事件の結果、我邦一流の政治家は米國に對する國際禮儀を無視するとを明白にせり。我邦の大政黨たる進歩黨の名士等は謀叛人に味方して親交國に危害を加へ

んとに努力したるを顯示せり。口に正義を唱へ手に利慾を握りつゝあるとを示せり。何等の失態ぞや嗚呼何等の無責任ぞや、國交上に於ける一汚點として國民の尤も耻づべき處にあらずや、吾人は政界の名士なる者を捕へ悉く之を千島開拓の人夫に使用せんとを欲す、彼等は內政を腐敗せしむ彼等は國際上の危險を自家の利慾よりも輕しと爲す、星亭の如き寧ろ恕すべし。彼等は斷じて恕す可らざる也。（仝）

●特別市制の必要

東京市の腐敗は天下に暴露せり。三醜は增加して五醜となり十醜となり今や醜類簇々として發生せんとす。蓋し明治年間に於ける尤も醜辱なる體面なりと云はざる可らず、市會解散可なり、市長更迭亦可なり、然れども吾人は疑ふ、自由黨の市會を解散して進歩黨の市會たらしむるも數年ならずして同一の醜行を爲すものを生ぜざるや否や。無能なる松田市長に代ふるに楠本男を以てせよ老骨なる浦田助役に代ふるに敏活なる黑田綱彥を以てせよ。果して市政の刷振を望み得べきか、果して市政の嚴肅を仰ぎ得べきか。

今日の經驗は特別市制の必要を促せり。五万六万の人口を有する市と同一の制度を以て百五十万の大市を律す可らざるを明かにせり、巴里市制を見よ、伯林市制を見よ一國の首府たる大都會には必ずや特別なる市制を以て臨みつゝあるにあらずや、

根本的改革を斷行せよ特別市制の實施は東京市の當然受く可き資格なり。（仝）

●蠻骨とハイカラ

政界に於けるハイカラの勢力はゼロなり。勢力ゼロにして而も政界に歌はるゝとの高きハイカラの如きはあらじ。ハイカラ連又以て名譽なりと云はざる可らず、蠻骨の政界に於ける其勢力微々たらんとす、之れ蠻骨を裝ひて以てハイカラ以上の小刀細工に汲々たればなり。

彌六の如き自ら蠻骨黨の首領を以て任じたりき、而も近時に至り彼の陰險沒義道漢たると明白となれり。望小太の如き君平の如きハイカラの領袖なりと雖も其害毒を流すと花柳社會以外に及ばず蠻骨と自稱する政客は恐る可くハイカラと笑はるゝ小政客や憐む可し、政界に蠻骨とハイカラと顯出したるは恰も人身に梅毒と田蟲との生じたるが如し。君子人を以て自任する生意

氣運中の多きも又嘔吐せざる可けん哉。（仝）

●貴族院の形勢

議會は召集せられたり、衆議院は政友會員多數を占めたれば無論政府の安心する處、唯これ貴族院に至りては現政府の尤も注目する處ならん。

從來の貴族院は政府に味方するを以て國家に忠なる事と思惟せり然るに今や貴族院の實力は少壯有爲の人士に移り其識見に於て其經綸に於て政府當局者に優れる人物多々なり。國家に忠なる所以は政府に味方するにあらずして之を監督するに在りと爲せり。衆議院の專横を防ぎ公明正大なる議論を爲すは貴族院の責任と爲せり。去れば本期議會に於ける貴族院の形勢や之を從來の如く輕視すべからず之れ國家の慶事として吾人の賀せざるを得ざる處なり。

政府は如何して貴族院を操縱せんと欲する乎。本期議會に於ける貴族院議員の言論は大に吾人の貴重する處、希くは國家の爲め堂々として責務を盡す處あれ。

（仝）

●對淸媾和條件の決定

漠として其進行の如何を知る能はざりし對淸媾和條件の協定は日米兩國の折衝に依り今や全く確定するに至れり。

或る國は決定の速かならざらんことを欲せり。或國は容る可らざる難題を提起せり。或國はグラ〳〵として一定の意嚮を有せざりき、然るに我外務大臣の强硬嚴肅なる折衝と米國政府の寛容鋭敏なる外交とは是等の難關を開かしめ以て媾和條件の決定を速かにせり。之れ豈に賀すべき事ならずとせんや。

淸國全權大臣は目下委任の完全ならんことを欲し西長に向つて交渉しつゝあり、淸國にして誠實に平和を希望せんか、完全なる委任を與へ以て列國使臣と樽俎の間に折衝せしめざる可らず、列國の決定したる媾和條件は最終協定たることを知らざる可らず、列國の寛容なるに乘じ更に其條件の變更を求むるが如き斷じて之を容認す可からず、狡猾なる李鴻章は種々の手段を以て列國を離間せんと試みたり、而て今や列國の一致强固となり足並揃へて談判場裡に進まんとす、東亞の天地に平和の曙光を望むも又近きに在らん。

（仝）

教育界

●明治三十三年の教育界

（一）概観

◎新年　新年だから、新しいことを言はなければならぬといふ道理がないと同じやうに、年が改まつたから、過去一年間の出來事を振返つて觀て、あゝのかうの、文句を並べなければならぬといふ理窟は無論ないのである。しかし、人情といふものは妙なもので、新年だといへば新しくなつた氣持ちにもなり、三十三年と言つて居たのが、三十四年と改まつたといふことになれば、ツイ「去年は」を繰返すやうにもなる。

◎回想　そこで、去年の教育界は？、と振回つて見るに、三百六十日と言へば、そンなに短くもない一ヶ年間に、たゞ高等學校大學豫科學科規定の惡く改められたこと、小學令を改正して發布されたこと、外山正一氏か逝去せられたこと、文部大臣が交迭したこと、北淸事件を口實として教育基金を費消せられやうとしたこと、善にも惡にも、數へる程の値のあることは、まづざつと此の位より外にはないやうである。

◎宿題　學制の改革だとか、宗教と教育との關係だとか、倫理教育に對する問題、教科書編纂の件、國語の調査、國字の改良、こンな重要な大問題は、悉皆明治三十二年が、明治三十三年に讓つた宿題であるのだが、たゞあちこちで、ちよい〳〵とつゝき廻はした丈で、一向てきぱきとした解答を與へ得なかつた、何たる意氣地のないことだらう。

◎私利　これといふも、上は文部大臣様より、下は學校小使に至るまで、働きの無いこと夥しいばかりでなく、天下教育のためを思ふなンて、氣の利いた者はけち程も持つて居ず、教育といふ美名の下に私利を營まうなンて、いけ太い根性の奴輩が揃つて居るからのことである。勿論社會全体が、まだ十分に教育の有難味を噛みわける程の力の無いといふことも、重な原因の一つではあらうが。

（二）論壇

◎活潑　昨年の教育論壇は、事業の擧がらなかつた割合には、隨分活潑な方であつた。といふのも、一般新聞記者などが、少しは教育のことが解かるやうになつて來たので、頻りに教育のことを筆にするやうになつたからである。

◎學制　中でも、學制改革非改革の問題は、敵味方、雙方共に當代一流の教育家が、自ら轡を陣頭に並べて、接戰せられたのだから、たゞさへ花々しい戰であるのに、天下の新聞雜誌が一時に總立ちとなつて、各その主義を同じうせる軍陣に馳せ參じたので、實に壯觀を極めたのである。しかし、今となつて見れば、矢張り龍頭蛇尾の感なからざるを得ない。

◎決鬪　次に問題になつて、相應に八釜しかつたのは、學生風紀取締りといふことである。或る時、多數の學生が、和田倉門外で、一大決鬪をやつてから（本誌第十五年第二號社説「學生の決鬪」參看）、今更のやうに騷ぎたてゝ、どうしやうかうしやうの議論も澤山であつたが、まづ寄宿舍で監督するに越したとは無い（本誌第十五年第五號教育界參看）、といふやうなところへ落着いたやうであつたが、どこの私立學校でも、其の後寄宿舍を設けたといふ話を聞かぬところから見ると、實行の難さが、甚だ明に證據だてられて居る。

◎喫烟　未定者の喫烟を禁止したのは、上下六百の議員は勿論、當

局者の處置としても、これを貸する價がある。しかし、害毒の及ぶところは、烟草と酒と何れが大きいかに思ひ及ばないで、未定年者の飲酒を禁止しなかつたのは、大小輕重を轉倒したものであると言はなければならぬ(本誌第十五年第三、四號)。まして禁喫烟のことも、たゞその當時少し厳しくやつた丈で、今では全く法令の無い昔に異らないといふに至つては、甚だつまらない感がする。

◎自尊　倫理宗教といふ方の議論の旺んであつたことも、去年に於ける特殊の現象の一つとして、數へることが出來るだらうが、中でも特に、福澤諭吉氏の『修身要領』といふものは、非常な勢で普及したものである。是に對して小六ケしい理窟を弁べて、反對を試みたものも多かつたが、成程吾人だからつて、たゞあれだけ(本誌第十五年第三號參看)で滿足は出來ないが、しかし、あの個條は一として反對することは出來ぬ。それはまア兎も角も、福澤氏はあれを普及させやうといふので、門下生を全國各地に派遣して、修身要領講話をさせたり、雜誌や新聞にその演説の筆記や註釋などを掲げたりすること、今尚昨の如しである。

◎資格　中等教員の缺乏に苦しんだ結果、さう〳〵無資教員採用の範圍を擴めさせたこと、文部省教員檢定試驗の科目を變更して、國語漢文を一科としたこと、修身倫理科に改正を加へたことなどは、吾人の最も歎ふところである。

◎寂寞　夏の初頃から、教育論壇はめツきり寂しくなツて來たが、高等學校大學豫科學科規定の改正があツてから、一寸元氣を立て直し、引き續いて改正小學校令の發布があツたので、それに就いて天下悉く賛否の論を鬪はし、またそれと相關聯しては、字音假名遣の中のーは何と訓むのだが、制限された漢字の中には、米といふ字も鹽といふ字もないが、それでも人間の命に別條はなからうかなンて、種々の議論が持ち上がつて、なか〳〵面白かつた。

◎豫科　高等學校大學豫科が、無茶苦茶に外國語の時間を增して、それがために國語の時間を減じたといふのは、何たる狂態だらう。またそれがために、一週一時間の修身講話をも廢してしまつたといふのは、何等無法の處置だらう。(本誌第十五年第十號參看)

◎校令　改正小學校令及び施行細則等については、實に樣々の大議論を要することがあるので、苟も文筆に從事して居るものや、身教育の任に當つて居るものは、筆に口に、全力を注いでその研究を怠らなかつたが、澤柳政太郎氏が、帝國教育會の一員として、世間の小學校令に對する批評を一括して反駁せられたなどは、最も目覺しきものゝ一つであつた。

◎文相　内閣と共に文部大臣も代つた。元來無能と無氣魂とは文部省の痼疾であつて、誰が文部大臣になつても、碌な仕事をやつたものは無い。その中で、最も鈍腕な樺山資紀氏時代に、小學校令の改正發布を見たのは、寧ろ珍妙不可思議の感なからざるを得ない。習ふよりは慣れよと言ふこともあるが、誠に明言である。どうか新文相の松田氏も、一廉の功名手柄を示されたい。

◎稿本　年の暮になつて燃えあがつたのは、大學講義稿本の公刊といふことである(本誌第十五年第十一號參看)。これは學究、學問は大學教授と大學々生と丈で私すべきものでもないし、また大學は、帝國最高の學府であるから、人の攻擊や批評が恐しいといふやうな、そンなあやふやな學者の講義に、巾を利かせて置くところでない、といふのが議論の根底である。

◎派遣　大學教授海外派遣といふことが、昨年の暮頃その筋で内定されたさうであるが、これは至極適當の處置である。三年も講義を續け、

れば種がなくなる、種がなくなつたら仕入に出掛ける。即ち是れ學間を進歩せしむる所以の方法で、かういふ道が開けて居れば、大學教授諸氏も、種の品切が恐しくなくなるから、さう〳〵その講義の稿本を公刊するやうになるだらう。

（三）學　校

◎増設　大學、高等學校、高等商業學校、高等師範學校等の増設が、焦眉の急として叫ばれてからこゝに幾年。昨年も一年中、やッさもッさ、揉れたり春いたりして居たが、一向はか〴〵しい結果も見なかつた。長野縣や新潟縣は、莫大な金まで寄附しやうさ力ンで居るのに、何を苦しンでかこンなに恐闘々々して居るのだらう。九州大學、東北大學なンて、いやに名前ばかり大袈裟だが、此のぶんでは、吾々の孫等の入學も疑しい。又故外山博士の遺志を繼いで、建てるさいふことになつた私立高等學校も、どの邊まで話が進ンで居るのだやら、杳さして知ることが出來ない。

◎女學　それに反して、成瀬仁藏氏の女子大學さいふものは、昨年中にすッかり基礎が固ッて、今年は附屬の高等女學校までを併せて開始するそうな。吾人は女子大學さいふ程のものが、日本現時の社會にはまだ必要を感じないので、度々反對の意見を述べたが、折角出來たものを、無理にぶち壞す程の亂暴な考は持ッて居ない。たゞ健全の發達を遂げて貰ひたい。

◎擴張　また專門學校では、ゆく〳〵は、大學を開始しやうさいふ計劃が出來て、その教授ともならうさいふ人を擇ンで、海外留學をさせることにしたさうである。即ち金子馬治、坂本三郎の兩氏が、その撰に當ッたのである。

◎樣々　その外には、留岡幸助氏が家庭學校を設けたこさ、西澤之助氏が日本女學校を設けたことなどが重なることで、外には是れさいふ程の事もないやうであるが、こゝに一ッ注意すべき現象がある。それは、眞宗大谷派が、眞宗大學を巣鴨邊に建てることに定め、本願寺派が、佛教高等中學を高輪に移して來たことである。吾人は、東京中心さいふ考が、彼等の頭に浮ンで來たのを、甚だ深く喜ぶのである。

◎認定　東京にある私立中學校が、大概徵兵令第十三條によりて認定されたのは、まアよいさして、さてその認定された中學校の現狀を觀るさ、特別教室がなかッたり、定員外の生徒を收容したり、教員に馬鹿者が多かッたり、校主や事務員は生徒に頭を下げることを牛商賈さ心得て居たり、苦々しいことの有りッたけを盡して居るが、一体文部省視學官なンてものは、何を視回ッて居るのだらう。

◎教員　哲學館や、專門學校や、國學院などの卒業生には、無試驗で、中學校、師範學校、高等女學校などの、教員免許狀を付與することとなつたのも、忘るべからざる出來事である。

（四）會　合

◎調査　修身教科書調査會（委員長加藤弘之、委員高嶺秀夫、井上哲次郎、澤柳政太郎、伊澤修二、中島力造、井上圓了、木場貞長）、國語調査會（委員長前島密、委員上田萬年、那珂通世、大槻文彦、三宅雄次郎、德富猪一郎、湯本武比古、朝比奈知泉）さいふものも出來たが、まだ何等の報告にも接しない。

◎敏活　帝國教育會は、國庫の補助を仰ぐことゝなつたので、一段と活氣を現し、定時の講演の外に、外國學者の講演、夏期講習會を始めさし、或は中等教員講習會を設けたり、國語改良會を擴張したり、なか

なか勤勉にそうして敏活に働いて居る。

◎一部　言文一致會といふものも、随分盛ンであッたが、年末になッて内輪揉めが起ッたので、一部の會員は、帝國教育會の中へ言文一致調査部を設けることにして、言文一致會を退會したさうである。

◎星亨　皇太子殿下の御慶事に際し、恩賜された八萬圓を土臺にして、東京市教育會といふものが組織されたのは、誠に結構である。しかし星亨氏が會長であるのは、甚だ以て妙でない。

◎菅公　來る明治三十五年に、菅公の壹千年祭を擧けやうといふので、菅公會といふものを組織し、黒田長成公その會長となり、大に寄附金の募集を始められた。

◎煩悶　宗教と教育との關係、宗教と道德との關係、といふやうなことが人々の頭に泌み込ンで來て、中學時代の少年でさへ、宗教や道德の問題に接觸しては、少からず煩悶するやうになッたが、丁酉倫理會及び佛教清徒同志會などの活動は、蓋し大に彼等を益したことであらう。

◎有終　年末になッてから、帝國東洋學會が組織されたが、此の會の事業は、實に大きなものである。どうか有終の美を收めむことが望ましい。

◎校長　此の外に中學校長會だの、高等女學校長會だの、といふやうな會合も多かッたが、商賣繁昌のおまじないでなければ、小田原評定に外ならないやうであッた。

（五）　著書

◎呼聲　昨一年間に出版された教育書（教育の部門に屬すべき著譯書）は、五十種を列擧すること甚だ容易である。中でも、外山正一氏の『藩閥之將來』『教育制度論』、元良勇次郎氏の『中等教育倫理講話』『教育と宗教との關係』『現今將來倫理及宗教』、井上圓了氏の『漢字不可廢論』などが、呼聲の高かッた方で、殊に『教育制度論』は、近年の大論文で、その批評も甚だ八釜しかッた。

◎重要　『新編教育心理學』(杉山富槌氏)、『ラインの教育學原理』(湯本武比古氏)、『東洋西洋教育史』(中野禮四郎氏)、『普通實踐倫理』(渡邊龍聖氏)、『近世教育史論』(笹川潔氏)、『最新心理學教科書』(牧瀬五一郎氏)、『中等教育に對する考說』(笹倉新治氏)、『教育行政法要義』(松本順吉氏)、『英文武士道』(新戸部稲造氏)、などは、重要なる著譯書であらう。

◎際物　又際物としては、『小學校令の原理及評釋』(松山傳十郎氏)、『新令適用小學校の編制及設備』(育成會)、『文部省規定新字典』(辰巳小次郎氏)、『文部省規定小學字典』(一柳直人氏)、等のものがある。

◎巴利　木村鷹太郎氏の『東洋倫理學史』、井上哲次郎氏の『日本陽明學派の哲學』、中島力造氏の『現今の哲學問題』、といふやうなものまでを數へたてるなら、高楠順次郎氏の『巴利語教科書』の如きは、決して逸することは出來ない。

◎解說　育生會といふところから、教育、心理、倫理、の三方面に亘り、泰西學者の名著を解說して、どし〱公にして居るが、これは注目すべきことである。

◎雜誌　雜誌は、若渓派の機關雜誌『教育』と、東京市教育會の機關雜誌『東京市教育會時報』といふ、二種が生れただけで、他には別に變りがなかつたやうである。勿論、田舍の方までは眼が届かない。

（六）　人間

◎博士　海外留學生といふもの、昨年程澤山出たことはあるまい。しかし、それを一々紹介するのは、聊か面倒臭いからお預りとして、一

昨年の暮から昨年の暮までに、博士といふ學位を授けられた人々の姓名を御披露しやう。

醫學博士　猪子止戈之助　田中苗太郎　伊藤準三
　　　　　岡田和一郎　吳秀三　木村孝藏
　　　　　瀬川昌耆
工學博士　渡邊芳太郎　山川義太郎　中山秀三郎
　　　　　朝永正三　小川梅三郎
農學博士　稻垣乙丙
法學博士　高橋作衛　有賀長雄
林學博士　小出房吉
理學博士　伊藤篤太郎　鶴田賢治
文學博士　高楠順次郎　大西祝　白鳥庫吉

◎外人　外國の學者を招聘したり、或はその漫遊を機として、これに講演を請ふことは、至極結構の事で、一昨年は米國ハアヴアト大學教授ラッド氏を招聘したが、昨年は、

米國チベリン大學教授大博士ライト氏、
米國スタンフオルド大學總長ジヨルダン氏、

前後來遊せられたので、帝國教育會で以て、一場の講演を請うた。前者は「アメリカの氷結時代」、後者は「近世の大學」といふ演題で。

◎役人　伊藤博文氏が、山縣有朋氏に代つて內閣を組織せられたので、松田正久氏は、樺山資紀氏に代つて文部大臣となり、梅謙次郎氏は、奥田義人氏に代つて總務長官となられた。文部省を政變の外に立たせ、內閣交迭の影響の及ばないやうにしたいといふのが、吾人の宿望であるが、今度の政變に、局長以下に動搖の少なかつたのは、まだしもの幸である。

◎嗚呼　こゝに悲しむべき二つの事柄がある。一つは外山正一氏の死で、一つは大西祝氏の死である。外山氏は昨年三月八日を以て、大西氏は昨年十一月二日を以て、共に永き眠に就かれたのである。

（七）吉凶

◎慶事　昨年中に、最も慶ぶべきことが一つ、最も畏るべきことが二つあつた。最も慶ぶべきことゝいふのは、皇太子殿下御成婚の事で、國民擧げてその萬歲を祝し奉ッたが、此の際、兩陛下から、教育費として、東京市へ八萬圓、京都市へ二萬圓、それから、福澤諭吉氏が過去の教育上の功績に對して五萬圓、の下賜金があつた。日本教育界空前の盛事と申して差つかへはなからう。

◎恐懼　最も畏るべきことゝいふのは、『靑年の福音』とやらいふ雜誌の上で、不臣の妄言を書きつられたものゝあつたのが一つ、皇后陛下の鹵簿を犯して、不敬の所行に及んだ狂漢のあつたといふことが一つ。共に國民全體が、恐懼に堪へないところである。

（八）結語

◎未了　纏めて言へば、明治三十三年の教育界は、明治三十二年から受取つた宿題を、そのまゝ持越して明治三十四年に渡したといふまでゝ、即ち學制調査、國語調査、教科書編纂、大學高等學校等の增設、日はく何、日はく何、未了の問題は依然として未了の問題である。

◎希望　明治廿七八年戰役の影響を蒙つて、一時大頓挫を來した日本の教育は、昨年再び北淸事件のために、打擊を蒙らうとしたが、幸にして事大に至らずして止んだものだから、非常な差支も生ぜずに濟んだ。日本教育の將來は、當局者の腕前と、國民一般の覺悟とによりて、盛に

もなれば衰へもする。そこで吾人は、此の明治三十四年の劈頭に於て、當局者に向つては大活動を促し、國民一般に向つては教育の有難味を覺らむことを望むのである。

宗教家觀勢

◎未來一年間の宗教界

送り去り迎へ來り、又もや三十四年の新春に入りぬ、一國の步は旭日の隆々として東天に上るが如く政治に商業に軍事に教育に一として前途の窮りなきを祝せしめざるものなし、而して獨り宗教に至ては佛教と云はず、耶蘇教と云はず、年々歲々唯萎靡不振と稱するの外なきを奈何、顧れば昨春の今日頃なりき、滿城の瑞氣靉靆として万家の旭旗春風に飜々たるの底、宗教法案の作戰經略は如何に一部の大僧小僧を忙殺せしめたりしぞ、而して法案は幸か不幸か否決の運命を見たるは善し、僧侶號が爲に佛教万歲を唱へたるは善し、而も佛教其物は却て社會の信用を減損したるはあれども其興隆に於て素より何等の資する所あらず、次て佛骨奉迎の如き巨万の金錢と許多の勞力とを抛ち彼が如く宗教界を囊括したるの結果として大菩提會なるもの、今日は果して如何なる狀ぞ、更に之を耶蘇教に見るに、福音同盟會の大演說を始めとし或は大學傳道と稱し、或は社會運動と稱し、その聲言する所は往々にして佛教僧侶の狠狽を惹きしものありしが如きも彼等が宗教的運動に於て過去一年間何等の見る可きものありしか、警世記者曰く

同ふ勿れ、基督教會も亦駄目なり、都下數十の教會堂、其百以上の聽衆を集め得るもの幾何ぞ、僅に二三を除く外は六七十人、否、十に七八までは四五十人より二三十人の聽衆あらんのみ

と實情是の如くして彼等宣教師は頃日至尊に對して感謝狀を呈し以て其隆盛を謝し奉りしと云ふ、吾人は寧ろその滑稽に驚倒せずんば能はざるなり、要するに佛教も耶蘇教も共に靡萎不振なり、萎靡不振と云はんよりは寧ろ滅亡に向て數步を近接したるを見る、爾れども徒らに過去の泣言を繰廻すは智者の事に非ず、請ふ教界の人士年と共に新なれよ、三十四年の新天地豈に卿等活動の餘地なからんや、社會は實は宗教を要せり、清高健全の宗教を渴望せり、卿等が宗教的大旆を飜へすは正に今日に在らざるなきか、彼等曰ふべし、爾かり宗教法案の事未だ決せず、眞宗分離問題亦大に動かざる可らず、各宗對西本願寺、大菩提會の事等本年

已後の運動亦極めて尠からずと、爾れども是の如きは吾人の所謂活動なるものに非ず、是の如きは畢竟宗教殘骸の繋維策なるのみ、過去の盲動と何の簡ふとある、吾人の信ずる所を以てせんか、今日の宗教家は唯合さに社會救護の天職に向つて直進するあるのみ、茲に信仰あり、氣慨あり、人類の幸福如何を念として一宗一派を犧牲とするも尙ほ已まざらんとするものあるか、その佛教と耶蘇教の孰にかゝはらず、吾人は唯その宗教の光炎の二万方里の內外に赫耀するを見る也、知らず、本年の宗教界、未來三百六旬日、佛耶二教の一舉一動果して宗教の精神其物に向て寄するものあるか、吾人は筆を握て大に論評するを怠らざるべし。(龍北)

◉佛教徒の慈善事業

宗教家は今や稍く慈善事業に忙はしからんとす、基督教徒が孤兒院を起し貧民學校を起し、感化院を起し、貧民病院を起し、以て宗教傳道の好方術となすを見るや、佛教者も亦その轍に倣はんとするか、西本願寺は慈善財團なるものを發表し、大菩提會も亦各宗の大協同力に假て大慈善會を設計すべしといふ、その倣ふと倣はざるとは問ふを要せず、吾邦の精神的大勢力たる各佛教徒がかゝる社會的事業に齏碎せんとするは社會の爲め又其宗教のため尤も賀せざる能はず、唯その慈善事業たる獨り耶蘇教徒が爲すが故に之を爲すといふか、耶蘇教徒にして若し之を止むるが如きあらば佛教も亦之を止む可きか、又耶徒の如く宗教傳道の手段となすが爲なるか、一旦宗教にして大勢力たるを得るに至らばその宗教は慈善事業に熱心ならざるに至らん、されば吾人が西本願寺及各宗に問はんとする所は今に於て何が故に慈善事業と云ふかに在り、何が故に慈善事業を云はざる可らざるに在り、若し彼等の慈善にして耶蘇教に對してに非ず各宗に對してに非ず西本願寺に對してに非ず又社會の非難に對してに非ず宗教家にして實に此可憐の蒼生を看過し能はざるが爲ありてするか、吾人は佛教の万歲を三唱するの外なしと雖も爾れども彼等の聲言の是の如く高大なりしにも拘はらず、發表已降已に一ヶ年を過ぎたるの今日尙何等の施設する所を見ず、徒らに金錢の募集に日も維れ足らざらんとするに至ては彼等の慈善事業なるものに於て大に疑なき能はず、大菩提會の如き山師坊主の團塊亦問ふを要せず、已に各宗に率先して彼か如く美名を天下

に博したる西本願寺たるもの其慈善財團を如何にせんとするか、徒らに組織の尨大なるを以て大慈善となすは彼等の謬見也、如何に薄資微力を以てするもその情熱しえの意温、一個半個の孤兒をだも能く滿足せしめ得べきか慈善的大主意に於て悉くして足れり、若し慈善財團が云ふが如く大に天下に募財して而して後始むる所あらんとするもの丶如き却て是れ地方僧侶門徒を泣かしむるもの、是の如き慈善組織は寧ろ組織せざるを可となす、吾人は西本願寺當局者の説を聞かんと欲す。(全)

◉所謂本山役員

今日各宗本山の役僧として事務を取り居るもの程憫れむ可きものはあらず、彼等の中には隨分人物と稱せらるべきものあらん、世間に出さば或は清浦たり三宮たるものもあるべしと云へとも空しく小天地に蹈蹐して其學問も才力も大に用ゆるに所なくして一生を畢ゆ、彼等にして名譽なるものあるか、如何に執事となり執行となり賛事となり録事となるも彼等の地位は座頭の官職と一般社會に於て何の誇る可きものある、而して利益なるもの果して如何、執事の高職を極めて僅に六十圓、其他十圓二十圓その下なる者に至つては七八圓の薄給に得々として地方僧侶に誇るものありといふ、小田某は本願寺の執行として尤も金を溜めたりと稱せらる、而して其溜たるもの一万二万若しくは四五万金に過ぎず、其人物の嫌ふ可きものあるに依るべしと云へども小田が是か爲に派内の攻撃惡評を得たる果して幾干なりしや、小田の如き人物と多年の功勞とを以て社會に立たば其誇る所果して如何、古河市兵衞たらざるも平沼某の如き力量は確かに之れ有るべし、而して宗教界に在るを以て在職三十年其酬ふ所僅かに二三万而も是の如き惡評を受けて退かざる可らざるに至る亦氣の毒と云ふ可し、爾らば本山役員たるが故に殊に宗教の爲に働き所謂御報酬なる者を爲し得可きか、單に下級の役僧は勿論執行となり賛事となるも今日の各本山を更改して宗教的大動力をなさんことは到底凡僧の能くす可き所に非ず、見よ未だ山に入らざるに大言壯語大に爲すべきを期したるもの、山に入て後果して何等の見るものあるか、化石溪に入ては物皆化石せざる可らず、本山に入らば人皆本山化せずして已まんや、已に名譽の顧む可きなく、利益の求む可きなく、更に宗教其物の爲にも自己の主義の爲にも何等の施すべき

所もなし、本山役員となる途に無意味の犬死にして止まんとす、地方無學無能の老僧輩は知らず、新教育ある青年僧侶にして本山に入らんとするものあらば吾人は此說を擧げて覺らしむる所あるべし。（仝）

各宗人物の減少

各宗本山の組織は依然として舊時の組織にして偶、智識を要する場合あるものは唯舊組織を潤飾するが爲のみ、その思想習慣畢竟德川時代の遺物に過ぎず、是の如き社會に人物の日に減少し來るは自然の結果にして所謂頑學老宿と云はるゝものは年と共に殂落し新人物は入て其迹を占むるを欲せず、各本山は年々多額の費用を抛て數多の留學生を内外に出し、其人物は成業して内に歸るも却て習慣故格を以て束縛せんとして其手腕を揮ふに所なからしめ、派內の實權依然として愚老輩の手に在り、今の如くして進まば十有餘年を出ずして一の人物を殘さざるに至らん、各本山の振はざる又宜ならずや。（仝）

新年と修養

暦方に新年に入るも寒風肌を刺し、雪花時に窓を打つ、爐を囲て聖賢の遺書を輪讀するは今や其時なるが如し、沈思默想獨り寒燈に對して古今の成敗を達觀するは今や亦其時なるが如し、名師を訪て敎を請ふべし、高僧に參して禪を談すべし、徒らに居蘇に沈醉し、歌かるたに狂呼するが如き志あるものの事ならんや、吾人は有爲の青年たるものは此新年休暇を利して宜しく大に一年精神の貯蓄を爲すべきを勸告せざる可からず。（仝）

片々

●本邦在留宣教師の數七百其俸給及び事業費年々二百萬圓

●二百萬圓の效果としてはよしや形式丈けにても今少し基督敎の勢力あるべき筈なり

●全敎第一の學校同志社から生徒僅に百五十名其不振察すべし

●二十世紀傳道と云ひ大學傳道と云ひ昨今やゝ色めけるはこの反動なり

●清澤滿之氏精神界と云ふ雜誌を發行せんとす我々の最も歡迎するところ希くは健全の發達をなせ

●顯本法華と富士派大問論を二月十六日より開かんと云ふ敗者は一宗を擧げて勝ちたるものに改宗せんと聾盲す愚や及ぶべからず

●眞宗の騷動いつやむべしとも見えず暫くもうるさし

●絶東文壇の春

暦日改りて、文壇また一歳の春を迎ふ、顧れば吾人が、はじめて筆を本誌に執りしより、こゝに、あたかも一ヶ年。その間、壇上の一塵一影、敢ていさゝか變替するものなきにあらずといへども、内部の精神に至りては、ほとんど昨と異ることなし。吾人が、當來の文壇に對する希望は、すでに、昨の年初に於て陳べ盡したり、今に於て、また、希望を陳べんとするも、いたづらに全一の言をくりかへすに止るのみ。思ふに、絶代の文學は、その時代の文華、高潮に達するの日に於て、すなはち、初めて渾成せらるべきもの、今に於て、これなきをせむるは、いまだ、今の時勢を識らざるの言也。吾人はかくの如き悲觀論者に與みする能はず。梅花かほるの所、鶯聲滑かなるの邊、吾人は、二十世紀第一年の旭光に對して、おもむろに絶東文壇の春を迎へんかな。（春　湖）

●窮態憐むに堪えたり

吾人が再度の難詰に遭うて、萬朝の猿人は、遂に假面を脫いで緒方流水の名を以て、一篇の文を酬いたり、その記する所を見るに、悉く嘲罵文字の騈列、車夫馬丁の口吻とほとんど選ぶ所なし。渠や、「いさなとり」を以て「いさな鳥」とし、妙齡の女學徒によりて審美哲學（？）を立せんとするもの、吾人が、一再の難詰に遭うて、辭窮し、語ふさがり、御挨拶だけに、惡徳文字を假り來つて、僅にお茶を濁したる、故なきにあらざる也。その吾人の追究を恐れて、「最初はいくらでも辨明して上げるといつたにもしろ、此後とても勿論相手になる恐はなれないから、最後の發言權を得よふと、勝手な熱を吹かふと、それは此方の知つたことでない」と、こそ〳〵遁仕度をなすに至つては、窮態、まことに憐むに堪えたり、今に於ての遁仕度をなさずといへども、渠が論客として、ともに齒するに足らざるは、文界の識者が、彈指して顧みざるを以て、すでに明なる所、その齒するに足らざるを知りて、なほかつ、吾人が渠を懲らしたるもの、渠が驕傲みづから居りて、風葉氏を傷けんとしたるを以て、その蒙をい闢て、鈍根を濟度しくれたるのみ、しかも、渠すでに、かくの如く哀を請ひ來る。吾人、何を苦んで、なほ、さらに、

その文學的生命を絶つが如き殺生をなさんや。流水たるもの、心を安んじて可。もしそれ、吾人に對して、人身攻撃の惡罵を加ふるに至つては、身の程を知らざるの甚だしきもの。しかも、かくの如き言をなすにあらずんば、文學的地位を保つ能はずといふに至つては、渠の前途、測り知るべきにあらずや。（仝）

●文運進歩の阻碍者

誰かいふ、今の文壇、嘲罵流行せずと。知らずや、學殖深からず、嘲罵を以て唯一の武器とせる諸方流水一輩の狡兒、その武器を以てみだりに他を傷つけつゝあり、所在の文客これを厭ふて、這般狡兒を惡むの聲、嘖々として四方に反響せるを。

現時の評論壇に、冷嘲、熱罵、誹謗、惡語の熾に流行するは世人の既に知悉する所ならべし。甚だしきに至つては、人身攻撃の爲に、あらゆる醜文字を排列して得々たるものあれば、中には惡語の奬勵さへも公言して憚らざる輩あり、是れ果して斯壇のため慶すべき風潮なるか。（宙外『嘲罵流行の動機と結果』）まさか理由なき罵倒や、横町へ外れた冷嘲などして人身攻撃に及ぶてよなことを、彼等とても仕たいのではないだらうが、然うせねば、雜誌が賣れぬからと云つたやうな事ではあるまいかと思はれる程、青年文士の調子は低いわえ！（老年文士『文壇上方根生』）公德に關しない限りは人の私德を云爲することを避くべきだ、況んや、人の平生を知りもせずして、聞きかぢり位で人の品位を傷づけるなどは徳も文士の爲すべき行爲ではないと思ふ（平尾不孤『文藝雜感』）

あゝ、今の文壇は、かくの如き惡德によりて、その進歩の一年を沮碍せられつゝある也。（仝）

●文壇わいく草

陣笠連

◎新年になつたからッて、何もさう、通りすがりの床屋の前で、鬢毛の白くなつたのを、氣にするにも及ぶまいぢやないか。人生蹉跎なり易く、志望遂げがたしとは、お互の生れぬ前からいつてあることだ。二十世紀の文學者だからッて、贈花や放鳥を一町も二町もつゞかせやうといふんぢやあるまいし。谷中よりか、やつぱり未來に、君等の香華は手向けられるんぢやないか。オット、これは短文課題の『葬式』のところへ入るのであつた。

◎短文といへば、このごろ短かいものが、頻りとはやるが、ありや、一体如何したことだ。赤門の手合にいはせると、沈重典雅の……と青筋を立てるだらうが、どこかの受付先生にうかゞふと、世間の方が忙がしくなつて……と、つい八の字を捻れくるやつさ。

◎中絶々々又中絶といふと、それは誰の詩だえと尋ねられるか知らぬが、何さ、尾崎さんの『金色夜叉』のこと。『宵にちらりと見たばかり』とは、風呂屋の流しで能く聞くが、牛門の先生が、まさか天上界に移住はなさるめいし、三ヶ月樣が開いて呆れらあ。

◎『新文藻』といふ雜誌が、今日から出るんださうだが、いや、ならんだり〳〵、『秋の唐錦』とまではいかないが、東京座の五人男位には、たしかに見える顔觸れだ。イヨー御三人、しつかり賴みやすぜと大向ふから

賞める所。

◎お久し振なのは、讀賣の如來生、ジョン、ラスキンとは、はて、本局の何番からかゝつたのでござるな。いやなに、通信局長！金牌よりも、御秘藏のダイナマイトは近頃どこへ御しまひなされた？

◎さあ、面白くなつて來た、江戸つ子の贅六攻擊が初まつた。それは何處で？『太平洋』で。何、ありや吉備眞備の王仁攻擊だ。とは、また何故に？だつて一方は備州の江見水蔭ぢやないか。とは、隣座敷の書生の話。

◎博學なる哉。博學なる哉。松井松葉先生は、實に博學なるかな。其の劇評を見よ、政黨あり、内閣あり、團十郎あり、シエクスピーアあり。又其『玄鶴姫』を見よ、西詩あり、和歌あり、俳句あり。といふ側から、惜しい事には、都々一文學がない。

◎風俗壞亂、發賣停止――停止するものは文學博士、停止さるゝものは、文學書。

◎何時であつたか、年は忘れたが、讀賣の紙上で、歌論な戰はしたのは、末松博士と鐵幹、今もまた、裸體畫のことで、相對してるのは博士と鐵幹。九星家が聞いたら、何、あれは火性と水性では、と鐵と畔の諍擇が初まるかも知れぬテ。

◎大坂の『小天地』といふ雜誌は、まことに結構、日本一いや上方一だが、中には、こんなものをと思ふのがないでもない。あんなのは、ちと御淘汰なすつてはいかゞでおます、ホイ、これはとんだおせつかいだ、

◎『小天地』に『女夫星』の批評の評が載つてるが、變つた思ひつきだ。如來生の小說口繪の批評は噂ばかりで、上方いや關西文士に先きを越されてしまつた。美妙なら、チッ殘念と、！の三つもならべる所だらう。

◎借問す、柳浪君、足下近況奈何、と聞くと、はゝあ、君も巫子に好きだなと反問されるだらうが、いかゞ致して！實例に川の口吻をちよつと擬して見たばかり、といふと、また、君は詩思がない、摸擬者だ、と、どこかの大將に罵らるゝだらうが、それは、どうでも、いゝとして、柳浪先生、この間、何かの雜誌で、目白に御熱心だと承つたが、相變らず、新年の初鳴には、御全盛で、いらつしやらうな。道理で、目白がピー／＼と先生の御意な謳歌して居ります、と申上ると、先生、垣の外なのぞひて、はて、目白が何處からか飛んで來たのかしら。

◎スケッチで、ちよつと巧いのは、獨歩と葵山だ。どちらも自然的で、そして、どちらも言文一致でやる所まで、傾向がよく似て居る。といふ、何處かの編輯室で、これ／＼僕のは何故賞めない。

◎賞めたついでに、もひとつ賞めると、蒲原有明君の撰腦錄、あれは一體何と讀むのか、手元に玉篇がないから、御生憎樣だが、いつてあることも、かいてある文章も、たしかに青年の一讀を値するのだ。何、提灯は、夜になつてからお願ひ申すといふのか。

◎「太陽記者足下、足下劇を論ぜず、美術を說かず、哲學を談ぜず、狹隘なる國語漢文の智識によりて廿世紀の文學を論ぜんとす。抑も危い哉」。賢つた斷評は對はさあなあめえ、あゝ、つがもねえ、と、九代目なら、グッと目をむくやつさ。

◎この頃の『太陽』を見るにつけて思ひ出すは高山君だ。才人由來病多し、沼津の海濱に病を養つて居るとまでは聞いて居るが、その後は、どうして居られるやら。時節がら、冬枯れの文壇を見ては、覺えず膝を蹴つて起ちたくもなるだらう。

◎言文一致會では、新年の祝辭を「新年おめでたう」とやることに決めたんだとさ。今日、小學校の弟のところから來たのにも「兄さん、おめでたう」とかいてあつたが、なや！あの子はいつ言文一致會員になつた

か知ら。

◎『當流人名辭書』。靈件にあちすんば！だ

◎十大著書の大著書乙羽先生の大著書を、ぶるくもので、そつさ拔いて見たら、奈良時代の土佐給さあつたので、あまりの事さ驚いて、なやく＼／。

◎朝日座の十月興行は新劇界の俊才高田實を補助さして……」。成程、この筆法では、田村松魚も天才だわい。

◎「今でもお芝居は、あの通り嫌ひな下手な高田の事だから」、遺憾千万！折角の俊才が奈落の底へおッこちた。

◎昔はいはく、斬取り强盜は武士の習ひ、今はいはく、恐喝取財は○○の習ひ、江戸さ明治たけに、朱鞘が毛錐さ變つては居るが窮した餘りの言ひ草だこさは同じた。

社會評論

◎新年の慶語

讀者諸君、歲玆に改まりて復び此紙上に諸君と相見ゆ、何の理寙か此年頭に吐かん、謹んで諸君の健在なるを慶すると共に、時世の暗移嘿遷を慶す、何ぞや人道は頹廢し德義紊亂せり、然かも尙ほ德義の振張、社會の改善、更らに清新なる信仰を渴仰し、純潔なる理想の境に進まんとするの聲は、日一日高きに非ずや、顧みれば去歲の一年は確かに此二様の現象を明かに表はせるものにして、眞に十九、廿兩世紀の遐分として、尤も面白き現象にてありき、これ豈に吾人が常に絕叫せる理想の境に步一步近くものにして、大に慶すべきの事にはあらずや、以て新年の慶語に代ゆ。（斬虹）

◎禮法は國家宜しく之を制定すべし

吾人は去年最終の本欄に於て、禮法の制定に付て一言する所ありき、更らに退て其引て及ぶ所を考ふるに、これ決して一私人が勝手に制定すべきものにあらずして、其制定の如何によりては、又大に國家の威信に關するものあり、細別すれば家屋の構造、衣服の制、坐作進退の禮、數ふれば尙多かるべきも、要するに其作法の如何は万國民相集るの時に於て、確かに國の威信に關するもの甚だ大なるべし、之を一國の風俗習慣は政府の力を以て、如何ともすべきにあらずと云はゞ云はるべしと雖ども、古來一定の禮法を定めて、之を一般國民に施くの事は常に行はれたるの事にて、換言すれば風俗習慣又政府の力に依て變更するに難きものあるとなし、されば今日これをなすは、これ實に國家が國民墮落の源泉を杜絕せんが爲めに國民に對する當然

の責任にして宜しく遠く内外、古今の禮法を參酌し、上下共に遍用して差支へなきものを制定することこれ實に目下の非常なる急務にあらざるなきか、（全）

●裸躰畫と藝娼妓の肖像

去月裸躰畫を紙上に掲載したるに依て、發賣の禁止を受けたるもの二、曰はく青柳君の戀愛文學、曰はく鐵幹氏主幹の明星これなり、勿論前者は廣告にも、已に、本書は魔書なり不健全なり、不道德なりと絕叫したる位いのものなれば、文中にも恐らくは禁賣の原因は多かりしなるべしと雖ども、吾人は今の世に當て、最も眞面目に尤も熱誠に、眞に世を愛ふるが爲めに世を激せしむる青柳君の著書の疫難は、吾人の深く惜む所なりとす、偖て後者に付ては、發賣の禁止せらるゝや、鐵幹氏は直ちに臨時發刊をなして、大に裸躰畫に關する意見を公にせられたり、それらに關する評論は、これを文學欄記者に讓るとして吾人はこれに付て一の他の議を論ぜんとするものあり、

なる程一方の論者、即ち之が發賣禁止を執行する側の論者の言の如くすれば、裸躰畫なるものは一見して實に風敎上に害あるものなるべし、然れどもこれと相似たるものゝ乃至はこれより甚しきものにして、彼等當路者が恬として顧みざるものあるに至ては奈何、これ吾人が大に問はんと欲する所なり、

第一殆んどすべての小說雜誌の卷頭に掲げられて、吾も人も少しも怪まざる藝娼妓の肖像は果してよく遊蕩子をして一種の聯想の下に汚穢なる結果を來たすの原因とならざりしか、吾人は明言す、吾人が此等藝娼妓の肖像を見たるときの觀念は、常にかの靈妙なる名家の筆になりし、神逸なる女人赤裸々の畫に對するよりも、寧ろ汚穢なる觀念を抱くものあり、天下の公衆皆我心の如くなりと云ふにあらずと雖ども、吾人の如き觀念を有するものゝ全く吾人一個人のみなりうべきか、否決して然からざるを斷言せん、何ぞやかの藝娼妓の肖像を多く其紙上に掲載し又藝娼妓自身も好んでこれに應ずるものは何ぞや、これ明らかに多く人に知られんが爲めにあらずや、多く知らるゝは何の爲めぞ、多く賣らんが爲めにあらずや、かくの如くにして彼れ等はよく面を賣り藝を賣るのみを以て停止しうべきや、かゝる聯想はこれを筆して頗る複雜なるに似たれども、衣香扇影にだも驚かされて直ちに歸るを忘るゝ遊

吾子の腦裡に瞬間に這般の聯想なくして止まんや、かくの如きも尙且つ神品寧ろ高尙の感を曳くの裸躰畫をも禁賣すべくして、淫猥の情を惹くに尤も適切なる藝娼妓の肖像畫は禁賣せざるか、吾人は更に問はん街頭を往て婦人の赤裸にして走るものと、錦衣香袂嫋々秋波を送て來るものと、何れか我心を動かし易き、我は尤も眞直に白狀す、我はかの裸躰なるものよりも、寧ろかの嫋々たるものに恍惚たらん、かくの如きも尙且つ巧妙むしろ靈聖の感を曳くの裸躰畫を禁賣して卑猥なる藝娼妓の肖像の畫を禁賣せざるか、然れども吾人がかく云ふ所以のものは、決して絕對的に裸躰畫を發賣せしめて、藝娼妓の肖像畫を禁賣せよと云ふにあらず、問はんと欲する所は本を忘れて枝末に拘泥するにあり、簡易なるものを束縛して、更に甚しきものを咎めざるにあり、されど〳〵吾人は最早や多くを云はざるべし、吾人をして極言せしめんか、大勳位侯爵閣下の肖像も吾人は之を見るを潔しとせざるなり、何となれば、彼を見るの時吾人は或る淫猥なる意味を聯想するを禁ずる能はざればなり。(全)

●魔界の犧牲

世に最も氣の毒なるは身に些の惡なくして、徒らに魔界の犧牲となり了する無策の善人なり、若し愚は罪惡なりと云ふことを眞とすれば、或は無策は無智なり、無智は罪惡なりと貶し去らん、然れども無策なるが故に彼れは決して惡人たることなし、騙欺至らざるなく、奸惡をこれ弄する惡人跋扈して、自ら他をしかく奸策を弄すると悟らざるの善人を陷穽して、平然たるものあるは、吾人の實に憤慨に堪へざる所なり、近日の政界をみるに、策の一寸多きものは一寸人を壓し、策の一分足らざるものは、一分人の愚弄をうく、以て愚と云はゞ云ふべし、しかも策や善策にあらず、眞策にあらず、排擠陷搆偏へに自家一身の利害に汲々として公共の事に同志相助くるの美德あることなく、朋黨互ひに欠を補ひて共に完成の美をなさんとするにも非ず、彼等は兄弟墻に鬩いで外敵の乘ずる時となり了するものなり、廟堂の國務大臣にして此奇劇を演じ、恬として耻づるなきもの、彼れは終に人間としてだも尙且つ立て步しうるの資格あるや否や、これ吾人が痛嘆措く能はざる所なりとす。(全)

●市井小觀

觀　風　生

●風俗壞亂の標準　曰く藝娼妓の面、曰く何々草紙、曰く何々秘訣、各新聞雜誌花柳界の記事、これらは一葉の裸體畫と一冊の戀愛文學とに比して何れか風俗壞亂の動機たるか、况んや一は讀者に誨淫導色を以て目的とし一は多少藝術界に忠實なる心と、世の濁れるに激したる諷刺論なるとに於ておや、風俗壞亂の標準なるもの我れその誠に漠然たるに惑ふ

●制裁問題　星亨氏中村彌六氏を初め平沼氏の貴族院より排斥せられんとする皆社會制裁力復興の兆にあらざるはなし、然れども黨人政客の大多數悉くこれ位ひの惡事あらざるはなし、只それ他の勢力あるが爲にそれを陷れざれば自家の生死に關するよりして強て扞かんとし無理に人の惡をなし同士討ちをなすに至て、沙汰の限りなり、彼等お互ひの非行其卑劣根性の見え透きて淺間し

●星と月に祟る　星亨、明星、月島丸、

●ペストと博覽會　大阪にペスト續發す、誠に恐るべし然れども此撲滅策を講ずるよりも、已に定まれる博覽會を東京に移さんと運動する、人間心裡のペスト更により多く恐るべし

●知慧はソロモン　譬喩はエソップ天神樣は菅公大師は弘法開山は親鸞酒は正宗ビールは惠美須金は星女は藤侯

●遊戲と落書　或外國人曰く「日本の塀には樂書が多い、多分日本の母親が子供に遊戲を教へぬからでせう」と蓋し眞理なり

●訪問風俗　中央風俗改良會の制定するところ載せて報道欄にあり、その時間を一定し、茶菓を出さず、外套手袋を着せる儘とせるが如き最も必要なるとなり、かゝる事の制せると同時にいつも日本家屋の改良は其先要問題となるなり

●教師と俗謠　茨木地方に行はるゝものに曰く

ほれてつまらぬ學校の教師見かけ許りで金がない
嫌だお母さん學校の教師子供相手に日をくらす
金がほしけりや教師はおよし教師ヂヤ妻子も養えぬ

醫者と俗謠僧侶と俗謠蒐集せば面白からん

●廢業娼妓　の救世軍兵士となるもの三名

●古人今人

妖星泊主

○故森文部大臣曾て牛津大學に博士マクスミユラーを訪ふ、大に其同意を得んと期し行く々々日本をして英語國たらしめんと語る、馬翁淳々國語の改變すべからざるを云ひ、且つ英語は世界有數の不完全なる言語なる所以を說明し、サテ改めて曰く、余の意見は此の如し、貴下の日本を英語國とするの理由は如何と、有禮一言も答ふること能はず

○又新島襄の仝氏を訪へるや翁頻りに佛教を說く、氏遂に一片の話柄をも捕ふること能はずして辭す

○北畠道龍今年既に八十八、大阪に在り、肉躰の壯健酒壯者を凌ぐ、一昨年十二月新たに男兒を擧げたり曰く此兒の大學を出るまではマダ〳〵大丈夫なりと

○由來和歌山出身の者謀叛氣あるもの多し、其例を擧ぐれば北畠道龍、陸奧宗光、岡本柳之助、曰く某、曰く某、悉くこれ天一坊の子孫

○陸奧宗光曾て島田三郎を評して曰く、彼の容貌は大臣になれぬと、近ころ内藤湖南又彼を評して云ふ彼は大に笑はんと欲して急にヤメたるの顏なりと

○蘇峰と沼南同一摸型、青萍と細川又同一摸型の容貌

○躰格の大小が其人間の事業に關係あるは眞理なり、誰やらは明治以來大臣に成つた者を一々調べて五尺以下のものなかりしと云へり、若し今後此レコードを破りし者あらば其伎倆が躰格風釆を補ふ丈け餘りあるを證するなり、我れ茲に於て小手川豐二郎の伎倆に推服す

○近ろ蓄音機と題する册子を著はしたる美術批評家關如來、往年勝海舟を訪ひ、半年計り後再び之を訪ふ、海舟じろりと一瞥して曰く「お前の顏と名は能く覺えて居るよ、何處やらで運慶の彫刻に同じ顏があつたから」

○佐々友房歐米を漫遊し歸て頻りに帝國主義を說き訛してアンペラズム〳〵と云ふ、滕侯揄揶して曰く、佐々君それは何處かの蝙蝠傘かと、其時傍に在りし某スカサズ答へて曰く否蝙蝠主義と云ふことなり

○今の池邊義象舊小中村義象國語者にして和文家なり、今巴里に佛蘭西文學を學ぶ、同人皆曰く高天ケ原よりパラダイスへ轉居せりと

●小言大語

笑[illegible]庵主人

○各宗教自ら相遇合する處あると共に又た必ず相異たる特性を有せざる能はざる也、唯共同を見て合糅を欲かんとす無謀も甚しからずや。

○佛教には佛教の特性ある可し、耶教には耶教の特性あるべし、是等の教徒に能く教祖の精神を以て是等の特異を發揮し、信する處に忠なる可し、強て共同の點を探索し合するの必要あらず、其門戸を別し、孜々所信に奉す、即ち是れ宇宙平等の本理に契合するものと云はざる可らず。

○宗教の理想する所、必ずしも人類の行ふ能はざる所而も人類か達し得可きものとし其理想に向ふ、宗教の高尚なる所以也、佛者無我を說く、未だ必ず無我に達したるものあるを聽かず、耶徒博愛を說く、之か信者たるもの却て偏愛者の多きを見る、然れとも己に執するものをして更に我の說を聞かしめんか、火を以て火を救ふもの、彼れか病に膏肓に入らずんは止まざるべし、已に偏愛私情に沈溺するものに對して何ぞ私愛を說くの愚を爲さん、人類の幾かに今日の如き情態を保ち得たるもの、古賢先聖か垂訓施教の賜と云はざる可けんや。

○野歩獨木橋に遇ふ、之を過て顧みれは木端漸く逸して再び之を踏は水中に墜落せんとす、思はず肌栗す、自ら之を引て修補し去る、後人の來て陥ちんことを恐れば也、是れ仁人の行爲に非ずや。

○一個の傖父、人力に駕す、日正に中し、炎熱燬くが如く車夫汗滴涔々たり、傖父乃ち其所持の傘を開て車夫の背を蔭ふ、車夫の果して炎熱を凌し得たりや否やを知らずと雖も傖父の情愛すべし、之を強非にして老車夫に引かれ悠々長坂を上り少しも思ひ遣りなきものに比すれば相去る果して如何。

○聖賢の言行錄に恰も科學の如く裁度讀むも陳腐とならず、論語の如き吾人にかて尤も其感あり。

●異面異心

駿　相　子

●志賀重昂は先月三日府下の新聞記者を自宅に招待して小宴を催うした、是は志賀か伊藤の内命を受けて新聞界の統一とやらを行ふ手始めなさうな△僅か一夕の御馳走位で政友會に御味方する新聞紙があつたら夫れ

こそ滑稽の極だ△五日の日本新聞に重子投として此の御馳走を非常に冷笑した投書が掲けてあつた、其末文には「重君四五日前招待狀三十餘通を發し去る二日及三日の兩夜自宅に支那西洋折衷的の馳走を爲せり出席者は兩會にて僅かに十數名重君の妙案果して効を奏するや否や一と見物なるべし右饗應の費用は重が頃日或る筋より頂戴せし者なり」といふヒトイ潮罵が陳べてあつた、さうして是と丁度同じ樣な通信が或る通信社から各新聞社に配付された△後になつて能く〻聞て見れば彼の投書といひ通信といひ望月小太郎の手から出たと言ふ評判だ、望月は新聞記者操縱に就て志賀のみ重く用ゐらるゝやふな傾あるのを見て嫉妬の餘りコンナ惡戯をしたのなさふだ△望月は志賀と與に進步黨から新に政友會に入つて言はゞ親密な間柄であるのにコンナ陰險な事をするとは、イヤハヤ世の中は危險なもので御座る、

●此間余輩は遞信省に往つて星大臣に面會を求めたら、受付の小僧は星さんですか星さんは只今馬車で御出掛けになりましたなど言ふた△余輩は小僧に向て一星さんなんて、なぜ大臣と言はぬか」と戯れ半分に問ふたら、小僧の言ふことは面白ひ「デモ皆さんは星さん〳〵と言ふから、大臣と曰ふよりも星さんと曰つた方は通りが好ひんです」

●河野廣中の細君は元とは御茶屋の姐さんとかで、學問などは無ひ方だか、隨分怜悧な質だ△併し學問の無ひ女の怜悧過ぎるのは甚た困つたもので、河野の細君は自由黨が此頃志を得て夫の舊友が皆大臣などに爲つたのを見てヒドク羨ましがり、頻りに夫に向て進步黨を脫して自由黨に復歸するとを勸めて居るげナ△河野が今日の逆境に立ち至つたのも曩きに自由黨に叛ひて進步黨に通じたからだ、然るに今度又進步黨を去るやふな事があつたら其れこそ河野の破滅だ

●前遞信大臣芳川越山は先月三日東京を發して下總君不去(木更津)地方に遊獵に出掛け舟中左の二絕を得たとて余輩に示した、

庚子天長節遊君不去舟中作次前度韻

景雲低地萬邦寧、豈有鯨鯢躍杳溟、欲捧君王延壽盞、千秋城聳中天青、

佳節喜逢風浪寧、扁舟也是泛滄溟、呼做津頭君不去、江山依約入眸青、

●前號に兎耳子といふ人はヒドク梅謙二郎をけなしたから今度は余輩が少し辨護してやらふ△世間では梅は輕薄ものだと評判するけれども中々の眞似の出來ない律義な所がある、兄の謹之丞といふが醫師であつて多

くの借金を殘して死だ時などは、梅は悉皆其の借金を引受けて、飜譯か何かの內職をして辨濟した△梅が大學を卒業して始めて外務省に勤めた時、其俸給は悉く父と護之丞とに貢ひで自分は飜譯の內職で微かな下宿屋住居をして居て、如何な人にも面會を謝絕して、一生懸命に內職をして居たさうだ

●先月十一日の政友會東京支部發會式に例の市參事會の醜類、稻田、太田、鷲尾の三人が江間俊一の爲めに式場から攫み出されたのは近來の快事であつた△其の時星亭は流石に江間を止むる譯にも行かぬから、苦笑して傍觀して居た△汚らはしいからと言ふて追ひ出された三醜人が同じ席場で會長より政友會東京支部評議員に指定されたのには驚ひて、實に滑稽とも言ひやふがない、

●今度貴族院議員に撰擧された伯爵日野資秀は先年帝室の命を受けて獨逸に遊學し經濟學を勉强して來たといふとだ△伯は玉突と義太夫とが大熱心で、毎度大磯に來て原田玉突所で玉を突て居る間に、義太夫の門附が來れば必ず之を呼んで一席談らせた△或る夜の事北海道の殿樣菊亭侯爵と玉を突いて居た時、例の義太夫の門附が來たので、日野伯は俄に玉棒を抛げ出して門附を呼入れ、諸君聽き賜へと一聲掛けるや否や、御得意の阿波の鳴門を門附と與に談り出したのには、菊亭侯爵も一驚を喫したゲナ

●平沼專藏が到頭貴族院議員に撰擧された困つた事だ△平專の當撰祝とやらが、先月二十四日に橫濱在大岡川村の平戸淸人別邸で開かれた△スルト平專に金を借りて居る連中は交々立て、御當撰を祝すとか、今迄は實業界の立物であつたが、是からは政治界に於ても大立物だとか、聞くも忌々しい追從輕薄の演說をやつた△夫れで專公はズツト得意に爲り、余輩も是までは商法家であつたが今度諸君の推撰に依て貴族院議員となつたから、今後政治運動に盡力することを斷ヂン致し置きますと言た△ハテナ政治運動を斷念するとはオツなことを言ふぞと思つてたら、ナニ斷言を斷念と間違へたのであつた△同じ席上で平沼に斯く言ふた「憲政黨時代に同黨神奈川支部の爲め余輩の立替へた金が千三百餘圓ある、けれども今回貴族院議員に爲つたから此金額は舊憲政黨支部へ奉納します」、如何な場合でも如何な時でも、金の勘定を離れない所が平沼の平沼たる所以だ、今時憲政黨支部が何處にあると思ふてるのか、當撰の祝筵でソンナ愚痴をこぼすとは何處までも高利

貸の根性だ。

●此頃社會研究會とかいふ者が出來て、去月二十五日帝國教育會で演說會を開ひた、辯士として紙聞紙に廣告された顏觸れは、井上哲次郎、加藤弘之、竹內楠三小室重弘、土肥慶藏、成富正義、木村鷹太郎、曲木如長などの面々だ△ハチナ井上や加藤などが小室、成富、木ム鷹などと一緒になつて演說をするとは妙だぞ、と思ふて能く〳〵聞いて見たら、成る程面白ひ事がある△社會研究會といふ名は如何にも立派だが、其實木村鷹太郎などの發起人が吉原の醜業者から金を取て、公娼制度を辨護する企である、さふとも知らず彼等に擔がれた加藤先生や井上博士などは氣の毒の至りだ

●此間近衞公、二條公、犬養などが倶樂部へ寄合て居る所へ北陸の鬼と呼ばるゝ遠藤秀景が遣つて來て、星亭を斬て棄てる位は、朝飯前の仕事だ、下手人までもチヤンと拵へてあると言つて、近衞公に金を御出しなさいと迫た△けれども公は無論コンナ亂暴な要求に應ずる人で無いから、呆れて返答もせずに居つた、すると遠藤は肩を聳かし眼を喰らして、其れだから御公卿樣は駄目だ、金も出さずに何が出來るかと罵り立てた△近衞公等は之れに手古摺て互に顏見合せて居たが、犬養がやう〳〵遠藤を制したので無事に收まつた△近衞公等が國民同盟會に對して多少冷淡に成りかゝつたのは、兎角斯んな事があるからなさうだ

讀者の文壇

●拳固黨の組織

指天居士

江戶ッ子の廢れたるや久し、氣負ひ肌全く地を拂ふ、神田兄ィの拳固は明治以來豆腐の如くなれり、弱き者には虫一疋にも涙を濺ぎ強き者に向ては飽まで正理を張る意氣は日々に消磨し去れり、拳固黨の組織はこれら、意氣の再興を主とし舊江戶ッ子の野蠻なるところを改め新江戶ッ子氣風を養成するを目的とす、名けて拳固黨と云ふも必しも鐵拳を振り回はすの謂に非るなり、支那流に云へば替天行義警察力の及ばざる法律の及ばざるところに不義無道の行はるゝを矯正せんと欲するなり、吾黨の力を盡す場合例せば左の如きなり

待合及び遊廓に政治家敎育家宗敎家の立入るを認めたるとき

馬車又は汽車に老人婦人小兒に席を讓らざるものを

見たるとき
公會の席上猥褻の言語を弄する者あるとき
牛馬を酷使せるものを見たるとき
書生の遊廓に入るを見たるとき
猥雜なる看版廣告を發見せるとき
モグリ新聞記者モグリ代言を見當りたるとき
刑事巡査の賄賂にて私を行ふを聞けるとき
常職無きゴロツキ壯士へロ〱壯士を一掃するとき

一例は此の如し、苟も公徳を破り人間として品位躰面を失へる者に向て有ゆる手段を盡して矯正せんとわるなり伏して中央公論讀者諸君の賛成を仰ぐ、若し同志の反響あらば大に會して其主意宣言を發表せんとす、

●野人贅語

齊東

〇今度の議會には宗教法案を出さぬといふが山師坊主等は定めて仕事がなくて困るであらう、そこで眞言宗の分離事件などに口を出して内務省へ質問したりなどするのぢやといふものがある。

〇大菩提會はどふしたのぢや、大藥財會ぢやといふた人もあつたが今の所では金も出來そうにはないでないか、ステヽコを踊つたり、義太夫を語つたりするやうな委員ばかりでは何事も出來なからうとおもはるゝ、

〇佛骨を持て來て今ではもてあましておるのではないか、佛サマも山師坊主の喰物となつてお氣の毒の至ぢや、佛サマには何の罪もない、とふぞ飽迄御崇敬をしてもらいたい、そこで覺王殿といふものをこしらへるといふ相談があつたが高楠君などはそれを東京へ持て來て青年會堂と兼てこしらへたらよからうとの意見で島田翁などは表の方は覺王殿で裏の方は佛教圖書館に仕たらよからうと云はれた。兎に角何とか始末を付けると共に外の事にも間に逢ふやうに仕てもらいたい。

〇東本願寺の借財は巳に百五十万以上に昇たといふことぢやが、渥美にせよ石川にせよ借金をこしらへるに上手なのには誰しも驚かずに居られない、それをイッモ默て拂ふてやる末寺信徒も中々ゑらい、コンなに借金をこしらへるのは素より褒めたことではないが、西本願寺のやふに少しの借金でもコハガルのも感服す可きことでない。

〇いらざることには無闇に錢を遣ふが肝心の事になると出し惜みをするものに錄な仕事の出來たためしがない。

〇西本願寺で東西の大關といふは武田と里見で武田は風采堂々を以て里見は意思堅確を以て共に一方の首領となつてをる武田の放言壯論一向取るべきなきが如き所に何となく無邪氣な愛らしき所がある、里見の剛頑強く、怒りッぽき所などは中々捨て難き所ぢや。

〇里見と武田が心を一にして熱心、西本願寺の事に從ふたら屹度面白い仕事が出來るに違ないが、惜しいことにはどふもそふゆきそうにない、こゝらが兩雄相立たずといふ所でもあるのか。

〇先達て死んだ峨山は隨分エラかッた樣だがたつた一度全生菴で金剛經を提唱したのを聽た、なんだか山だし坊主のやふに想はれて一向面白くなかつたのと一は生意氣な女學生などがサも禪學者てゴサルと云ふやうな顔付して五六人も並で居たのでイヤになつてすぐ歸て來た。

〇奥田貫照サンの演說は一昨年始めて錦輝館で聞たが中々熱心らしかつ

た。余程護法の精神に富た人であつたといふことだが臨終に遺言して東亜同文會に百圓を贈らしめたといふのを聞て一入尋常の僧侶でないといふことを知つた。コンナ人のなくなつたのは惜しみても餘りありと云べしぢや。

○福井の縣會は今度同縣の佛教中學へ毎年二千圓の補助をなす事を議決したといふことぢやが、コンなことは福井縣でなければ出來ないことだ、福井縣の僧侶はそれくらい縣下の人民に重く見られながら何の爲す所もなく腐敗墮落し行くは何とも評し樣のない馬鹿物ぢや。

○天下の僧侶を悉く人物にするは出來ない事であるのみならず入らざることだ、地方などには一人か二人すこし目のあいてゐる坊主が居ればそれでよろしい、宗派を形づくり居れば讀經坊主も入る、葬式坊主も入る、そんなものを悉く大學者とし、大德者とするの必要はどこにもない。

○各宗本山で教師になる試驗を八ヶ間敷云ふ樣だが、大概にしないと坊主がなくなるかもしれぬ、教師試驗の出來る樣なものは坊主になつて居るまい。

○ツマラヌ坊主も澤山ある代りに役に立つエライ坊主は尙澤山ある樣にしたい、番僧坊主や所化坊主にまで六ヶ敷試驗は入らぬことぢや。

●女子の衣服に就て

愛佳生

今日と雖とも、禮服は洋服か袴羽織を着用すべしてふ内に、自ら其制限を存して、猥りに混雜したるものを許さずとの意は寓するなるべしと雖とも、洋服と云へは、燕尾服も、フロックコートもはたジヤケツも脊廣も、乃至は職工の服と雖とも、ズボンを穿ち上着さへ着て居れば、それで如何なる式場に臨むも同じく洋服たるに於て何の差支へなしとは、實に可笑の限りにあらずや、而して一方に此奇妙なる風采の客もあれば尙一方に鹿爪らしき、羽織袴の御客人あり、長袖と筒袖との寄合宴會に入り亂れの無禮講、實に時事新報の穴探を待たずして、吾人の常に顰しかむる所なりとす、而してこれに繼て女子の服裝の制定に至ては、更に急を要するものあり、已に一部の論者は其摸範を示して實行せるものあり、下田歌子女史の首唱にして先日女子が某處にての演説にては、古代よりの女子の服裝を數百種集め來て、大に改良の主意を述べられたりと云ふ、實踐女學校學生の服は其摸範として造られたりと云へば、女史が改良服の摸型は以て見られうべしと雖とも、今日に於ては、かの改良服は未だ一般の嗜好には投ぜざるべし、何となれば從來頗る長き袖の衣服を着用したりし、婦人が、突飛的に洋服ならば兎もあれ、永く自已の服としては、かの筒袖に感情の上あまりに好ましからざるの感ありしは一般の意見たるに似たり、されば袖は從來の者の如くはせずとも元祿時代の、短かき丸袖位いに留めて、更に下着の摸範を示さんことを望まずんばあらず、

下に袴を用ふることは、從來の習慣の中にもあり、已に多くの女學生に依て用ゐられつゝあるを以てこれを兩脇を栓ぎて寛かなる筒として用ゆるは殆んど批難するものなきが如きも、上衣に至ては餘程の苦心を要するものあるに似たり、

已に袴はよしとしてさて今日のかの改良服其のまゝにては單に紐の飾りのみにしてあまりに單純なるが如き、嫌なきにあらざるも、これをやゝ袖の長きものとして、さて使用したる上に於ては又樣々の裝飾は自然に生じ來るものとするも、次で起るべき疑問は下着の選擇なり、從來のものゝ如き厚綿のふき太なる小袖三枚重ねなどに至ては、活潑なる運動術

か、樓梯の上り下りさへ急ぎてはむつかしきものにて、其上、下より腰卷のほの見ゆるなど、とても其儘にて用ゐ難きは無論なりと雖とも、俄かにさッぱりとして寬かなる袴一枚にてはあまりそッけなきの感なきにあらず、上着と同じ樣なるもの下に幾枚も重ねて着るがよきか、下ばきもやはり男子の如きものを用ゆべきや、これは當路者に一任するとして吾人は質素にして見すぼらしからざる。女子服裝の一日も早くせられ且つ普及せられんことを希望するものなり。

●無宗教者と殘酷なる所行

天南逸士

昨夏他人より預りたる兒女を、行李詰にして窒息せしめたる老婆あり、年末に及んで我が眞實の姪を虐待冷遇して、ついに撲殺し、更に罪跡を韜まさんが爲めに、火葬したる慘事を耳にす、あゝ何等痛疼の事柄ぞ、聞く後者の如き、學士の稱號を有し、身を高等官吏の地位に措くの身にして、尙かくの如きの行爲を忍ぶ所以のものは、抑も何が故ぞ、彼れは何が故に苦學十年、更に大學に籍を措きて刻苦せしぞ、如何に學校は德育の科目を置かざりしと雖も、如何に風敎を度外視たりと云ふとも、自巳と對等なる者に勝たんが爲めに、力爭して殘忍酷薄なる尙ほ少しく辯ずべき所あり、無心無辜の稚兒を捕へて、虐待冷遇遂に撲殺の供膳をなし、更に火に投じて跡を韜まさんとす、說き來て我筆爲めに澁ぶるを覺ゆ、嗚呼彼れの學問は何の爲めに用ゆべく學びしぞ、人類以外の禽獸でも猥りに殺すは人の道に非ず況んや人類の酷遇に於てをや、さきには人面獸心の行動を敢てして、尙ほ口に博愛を呼ぶ基督敎者の大陸に獸心を逞くするをみ、今又此悲慘の報に接す、年暮寒風に立て我轉た人道の穨廢を慨くを禁ずる能はず。

然れども事のこゝに至る、彼等夫妻が禽獸に類するの精神を有するは本より憎むべく忌むべしと雖とも、抑も社會の罪、敎育者の罪、將た宗敎者の罪又豈に輕しと云ふを得んや、何が故に社會は彼れをしてかゝる事を敢てせしむべくしかく寬恕なりしか、何が故に大學はかゝる鼠輩を容れて、溫厚なる社會の紳士と化し得ざりしか、はた又宗敎者は人間日常の活訓誡を鼓吹して、人生迷路の先覺となりよく彼等獸心の惡魔を退治するに務めざりしか、吾人をして云はしめんか、要するに宗敎者無責任の致す所たらずんばあらず、何事にか躊躇すべき熱烈志士は一炬かの虛飾の殿堂寺觀を燒盡して十万の圓顱共に一片の灰燼に附し去らざるや、

短文

課題　葬式

▲世界廣しと雖、嚴肅なるべき葬儀が我國の如く假粧舞會か滑稽劇に見ゆるところは又と類があるまい

儀式　佛葬あり、神葬あり、耶蘇式あり、折衷式あり、悉く其方法を異にして其面倒さ加減尋常にあらず、勿論耶蘇も神佛も一樣とは行くまいが、何にか或る程度まで一樣にして貰ひたい

服裝　羽織袴にフロックコートに袴に白無垢に、神官の烏帽子直垂坊さんの錦襴七條、日本も支那も天竺も西洋もゴッタマゼ、丸で衣裝の展覽會である、平氣に考ふればコンナ馬鹿々々しき行列は有るまい、お負けに放鳥や生花や、法華の講中が敲く太皷や、山伏姿や、仕丁風や、雅樂や西洋樂や、洗足あり、草鞋有り、駒下駄あり、西洋靴あり、シルクハットの紳士、蓬髮無帽の先生、馬車に、車に、徒歩に、雜然として笑

ひつ興ドつ、ゾロリ〳〵と歸り行く樣天下の絶醜、決して本氣の沙汰とは思はれない、服裝も樂器も帽子も穿き物も何とか規定せざるべからず、これは風俗改良上の大問題では無からうか。

色彩　西洋では玄服東洋では素服と極りて居る、併し世界の大勢上、白色は漸次黒色に改むる必要がある、歐米にて其棺も馬車も馬も會葬者の衣服も帽も靴も悉く一樣純黒にて肅々然として進み行く有樣は如何にも嚴肅で悲哀で、人をして思はず頭を低れしむるのである、

敬禮　葬儀の行列に逢ふて容を改め脫帽敬禮するは歐米の美俗である、英國の田舍などでは路に葬儀の行列に逢へば旅の者も其儘其列に加はりて墓場迄見送るとの事、かくまでには至らずともせメテ其棺に向て敬禮し、車で行列を横切るが如きことは愼むが人間としての道であらー（箕子）

▲「お前死ンでも寺へはやらぬ燒いて粉にして酒で飲む」即ち是れ愛の極致、此の情盡し千僧の供養にも勝れるなるべし。「お前死ンでも寺へはやらぬ燒いて屍にして人に賣る」、即ち是れ利の極致、此の事盡し廢物利用の上乘なるべし。（俗謠子）

▲我曾て某氏の葬に會す。一禪僧これに引導を渡して曰はく、「何が何にして何とやら」、更に一段聲を張り揚げて「カーッ」と。我を始め多くの會葬者は、聊か面喰ッてビックとした途端に、「音羽屋ア」といふ掛聲が、客待せる車夫の方より聞えしかば、一同思はずウフヽヽヽ。折角嚴肅の儀式も爲めに滅茶々々となり了りぬ。咄。（噴出生）

▲厚葬薄葬の論は、既に支那先秦の學者によりて、研究し盡されたことであつて、今更事々しく彼此申し上げるのは、頗る恐に近いが、我等は薄葬贊成者の一人で、人の死を機として、公共事業や慈善事業に、寄附金をするといふ風を、盛んにしたいと思つて居るものである。（厚薄生）

▲葬式に坊主を雇つて來て、くだらない經文を讀ませるのは、實に變的である、自分にもわからなければ人にもわからないことを、聞いたり聞かせたりして、何の益にたつと思つて居るのだらう。少しは、會葬者の迷惑も察して貰ひたい。（迷惑山人）

▲葬式は、坊さんの財源である、葬式さへ多ければ、坊さんはニコ〳〵もので居る。即ち坊さんは、人の死ぬのを喜ぶのである。人が澤山死んで吳れゝば善いと思つて居るものである。だから、人が思ふやうに死なぬ時は、つい殺さうといふ考も起すのである。ヤレ恐しの坊さんやナー。（坊主嫌）

▲遺言だから、花や放鳥は頂戴致しませぬと廣告されたからつて、まんざら何にもやらずには置けないから、現ナマを包んで持つて行く。現ナマを持つて行けば默つて受取る。アヽ今の世は、何事も現ナマに限る哩。（現生居士）

▲香奠の前納といふことを發明して、頻りに募集して居る人がある。是れは、十九世紀最巧の大發明と言ッて善からう。從つて又、此の發名者の姓名を特筆大書して千載の後にまで傳へる必要があらう。曰はく、井上圓了氏。（歷史家）

▲佛教清徒同志會が、曾て公にした、葬弊改善の趣意は、至極結構であるが、もう世間では、大概忘れて仕舞つたらうから、更に改めて、天下に知らせるやうにしてはどうだらう。（濁徒）

▲京都は墳墓の都である、四面の山悉く墳墓、明治時代の二大葬儀（其一は畏くも英照皇太后其一は東本願寺の法主）も皆京都で行はれた（け、む）

▲おゝ十年前大震災にて予の家は七人の葬式を一時に出した、思ひ出すも涙の種なり（大垣養山）

▲老衲は一ヶ寺の住職であるから、葬式は澤山したことがあるが、なに

よりもかよりも苦しいのは、葬儀の式の最中に急に可笑しくて堪らないことの起つたことである、皆の人は悲し相に、眼を拭いて居る女もあれば、しほ〳〵と歩いて燒香に出てくる人もある、その中で讀經が濟んで鐘をうつ時になつても、かれが鳴らないので、脇の番僧をふりむくと、和尚鐘打ち棒を衣の中へもぐらしたので、うろ〳〵して探して居る、一寸と袖を引張たりすると、吃驚りして眼を丸くして上向いた時の其の顏と云つたら、實になかつた、思はず吹き出しかけたのを無理にこらへた苦しさ、今思ひ出しても可笑しくて堪らない(老和尚)

▲五ツ六ツの小兒を遺して死んだ父親の葬式が今出ると云ふ時、母親に手を引かれて出て來た小供が、さも〳〵嬉しさうに、「母さんこれから皆んなの叔母ちやんや姉ちやんと何處へゆくの、私赤い衣着でほんとに嬉しいのよ、ねー母ちやん、えー、お墓にゆくの、お墓になんしにゆくの父さん埋みにゆくの、嬉しいな」と云つた時には母親は思はず抱きしめてわツと許り泣き伏して了まつた、(側隱生)

▲余は常に街頭葬式と出遇ふ毎に、必ず脱帽敬禮して同胞が最後の門出に弔意を表するものなり、願はくは天下の志士よ余輩と同じく此禮を實行せられんことを、(博愛)

▲昔しの孝子は父母在します時孝養を盡し得ざりしとして葬式に人目を忘れて万斛の涙を流ぎ、中世の孝子は生前不孝をなし盡して父母の死後後悔慚ずる能はず、生前に無限の孝養を盡したが、今の孝子は生前虐待し盡くした後、兩親の死するや、葬式衆目の中数滴の涙に袖をぬらして人を嘲笑するのだ、(孤憤子)

▲僕の家では僕が生れてから葬式が二ツ出た、それは十二年前に從姉のと、去年祖父のとで、扨て三度目のは誰であらう、今の樣子ではどうも僕らしい(快頭)

▲今のお寺を葬式屋と云ふ、して見れば坊さん輩を番頭の背鼠とでも呼ぶんだらうか、(仝)

▲葬は送なり、葬式は是人生に於ける最終唯一の送別會なり、今も昔も東も西も其習慣儀式に至りては千種萬樣素より一準ならずと雖も、出來得る限り盛に之を擧行せんとするの情は一なり、然れども近來我國の流風を見るに益々華美に流れ爲に資產の大部分を費消するもの少しとせず、此の如く盛大なる送別會は過ぎたるは猶及はざるが如く、吾人は實に其賓主を顚倒せるを思ふ(發空生)

▲二十年も前に新聞の葬式と云ふことが有て福地や成島が祭文を讀んだことがある(懷古生)

▲谷中や駒込では古くより長屋の神さんが毎日大通りを見張りする、そして大きな葬送が通れば「チバサン お弔ひが來たよ」と長屋中を觸れ歩き、孤兒を背中にソロ〳〵と跟ひて行くそれは菓子の辨當の施しを貰ふ爲で中々見物でアツタ、然し近年は少くなつた(谷中の公子)

▲世に哀れなるは傳染病患者の死骸、溺死行倒人の假埋葬なり、而して詩的なるは情死者の合葬なり、(春風情史)

▲古諺に人間は最と果なきものにして燒けは灰埋めは土と化するものなりと言へり、若極端なる物質的眼光を以て之を評せしめは何そ燒き或は埋むを待たんや、命終の時已に既冷なる骨肉の一塊と化し去りたるなり、尙之を其價值の上より打算せは犬猫の死体にたも及ばざること數等なりと言はん、嗚呼由來世上何そ沒理漢の多きや、所る土灰に均しき死体に對して華しき儀式を行ひ、多損の失費を敢てする、是れ頑愚なり邪惡なり、(排儀式生)

▲馬鹿々々しきは親戚故舊より造花或は放鳥を送りて葬式に景氣を添ゆるを以て禮となすの習慣なり、且其花器鳥籠に麗々しく人足付何某など

書きたる粗夜大の木札を附するに至りては實に常識ある者の所行とも見へざるなり、然れども近頃知れ切た噓ながら廣告文には往々、生前遺言により造花放鳥の寄贈を謝絶すとの語を見るは、確かに我國葬式制度上一大進歩なりと言ふを得べし（寄山）

▲會葬者の多數が不規律なる歩調を以て棺後に隨伴し、往來交通を妨害するのみならず戯談笑語の狂態、更に哀悼の意を表するものとは見受け難し、中にも所謂若且耶連中の如きは三々五々仝志を語らひ、途中より横道に入り、親翁の眼を偸んで放蕩を爲すに葬式を利用するを常とす、實に論外の沙汰といふべし（諷生）

次の課題（一月十二日締切 二月十二日締切）

三萬圓の處分

新に三万圓を得たりとせよ、如何に之を處分せんとするか、眞面目の答案を望む

憐なる出來事

生來最も憐れに感じたる自身の遭逢し又は目撃せる出來事一個

新刊紹介

●杜國大統領クルーゲル

吉田榮吉氏譯　春陽堂發行

クルーゲル氏は、杜共和國の大統領なり。杜國は、南阿の一小國たるに過ぎず。然り、彈丸黑子底の小國を以てして、しかも大英國の大軍さ戰ひ、死守して降らざるもの玆に一年、その間屢々雄猛なる英軍を苦しめ、一時は多くの人をして「最後の勝利は杜に在り」とまで唱へしめたるもの、即ち是れクルーゲル氏が、軍事に外交に内政に、殊絕の大手腕ありしによれるはもとより論なく、また以てその意志の如何に强堅なりしかを想ふべきなり。今此の十九世紀の大人傑を紹介せむと企て、その性行事蹟を集譯したるものを、『杜國大統領クルーゲル』となす。譯文の明快なるが上に、所々に精巧なる寫眞版を挿めるは、錦の上に花を添へたるの感あり。（定價金參拾錢）

●健全なる青年

大河内了智著　京都東六條法藏館

今の青年は、確に輕佻なり、浮薄なり。大志あるもの少くして、小成に安ぜむと欲するもの多し。吾人はこれが原因の一を、彼等の精神修養の足らざるにありと信ずるもの、而して此の缺を補ふの方法、もとより多々ありと雖も、彼等が讀書力に訴へて、以てその志氣を鼓舞し、その志望を遠大ならしむるも、また當に恰好なる一方法たるを失はざるなり。鐵驚氏の著『健全なる青年』は、即ち此の目的を以て公にせられたるものにして、全篇を、青年さ希望、青年さ健康、青年さ世界、國家さ青年、家庭さ青年、闇黑の世界、世界の光明、人世の目的、光明の世界、青年の立脚地の十章に分ち、言文一致体の文章を以て、親切に說明せられたれば、眞個に現代青年の好伴侶たるべし。（定價金拾錢）

●海島冒險奇譚 海底軍艦

押川春浪著　博文館發行

「太平洋の波に浮べる、この船に似たる我日本の國人は、今や徒に富士山の明麗なる風光にのみ、恍惚たるべき時にはあらざるべし。光榮ある桂の冠さ、富さ權力さの優勝旗さは、すでに陸を離れて、世界の海上に移されたり。この冠を戴き、この優勝旗を握らむものは誰ぞ、他なし、海の勇者なり、海の勇者は即ち世界の勇者たるべし。」さは、本書著者押川春浪氏のはしがきの一節なり。若しそれ今の年少氣鋭の兒、能く海の勇者さなりて以て世界の勇者たらむさ欲せば、則ち此の『海島冒險奇譚海底軍艦』に就いて學ぶさころあれ。寸珍本約卅百頁、總クロース表紙金

文字入。口給の美なる、題字序文の多き、例によりて博文館の特長を示せり。(定價金參拾錢)

●貧の朋友　宮崎右夫編　神田内外出版協會

上篇は貧と人傑と、中篇は貧と處世と、大篇は貧と成効と、の三篇より成れる一小册子にして、貧と戰ひて能く成効したる東西人傑の小傳より處世の方法、成効の要訣に至るまでを、美しき文章にて描かれたるものは此書なり。車を挽くも、僅に書を讀むの餘力を得べく、新聞を賣り牛乳を配達するも、また以て學資を得るに難からずと聞く。然るに今の青年、多くは貧に苦しみて志を枉げ、金を欲びて節を賣る、滔々として然らざるはなきもの、豈慨くべきにあらずや。是れ蓋し、彼等が薄志弱行の致すところ、洵に憫笑に堪へざるなり。此の書庶幾くは、彼等が師父たり益友たらむか。　著者は宮崎八百吉氏の舍弟、宮崎右夫氏にして、その學資の一部を補はむがための作なりといふ、その志を悲しみ、此の書の多く賣れむことを祈る。(定價拾五錢)

●アリストテレース氏倫理學　桑木嚴翼氏著　育成會編纂

本書は、育成會編纂の、倫理學書解說第五卷として出でたるものにして桑木嚴翼氏が、アリストテレス氏の倫理書中、エーチカ、ニコマカイアに據りて、その大意を解說せられたるものなり。由來、譯語の生硬、行文の晦澁は、此の類の書の通弊として、世人の等しく苦惱とせるところなりしが、本書は、極めて平易明晰なる言文一致躰の文章を以て綴られ、術語の如きも、比較的解し易きを用ゐられたれば、さしも難解なるア氏の倫理學說も、讀過一遍、略々その大要を領會するを得るは、深く解說者に謝すべきところ。卷頭には、ア氏の肖像及び傳記の外、緒言として、ア氏の倫理說の歷史的說明を試み、最後に、ア氏の倫理說を概評せら　たるは、解說書の備ふべき總てを備へたるものと稱すべきなり。(實價金四拾五錢)

●英文起信論　鈴木大拙譯　シカゴ、オープンコート社發行

ポール、ケーラス氏と共に老子經の英譯を刊行したる氏は更に起信論の英譯を成就せり馬鳴の出世に關する考證本論の歷史的考證等を附し面倒なる術語、意味、等を流暢に譯成したる氏の勞力大に多とすべきものあり(二圓)

●近松之研究　坪内逍遙　網島梁川　共編　春陽堂發行

近松の研究と云へば何だか近松と云ふ男を解剖して研究でもする樣に聞へるがさうではないセクスピヤの研究とか、ゴエテの研究とか云ふと同樣に近松の著書の研究である、それで又一時にやつたのかと云ふのでもない、關根、伊東、饗庭、土居、島村、五十嵐、後藤、水谷等の早稻田派の諸君が明治卅三年頃からぽつり／＼と研究されたのが積つて此册子となつたとのことで大概は一度雜誌などに出たのを取まとめたまでのことであるが巢林子の作物の重もなるものはまづ研究されてある、斯道の有志者には究めて、有益のものであろふ、詳しい批評は別の事にしやう(定價壹圓)

●國學史概論　文學士芳賀矢一講述　國語傳習所發行

國史專門家芳賀學士が三十三年の夏國語傳習所の夏期講習會に於て講述せられたる筆記なり、概して國學とは如何なる意味を有するか、國學の眞髓は如何なる點に存するやこれ本書が示さんとする處なりと云へば本書の性質は明かなるべし即ち荷田春滿を以て國學者祖先とし岡部眞淵、

雖居の門人、本居宣長、鈴屋の門人平田篤胤等の項に分ちて系流的に論ぜられたるものなり、特に國學者及歌人傳系畧表を添へられたるは斯學者には頗る有益のものなるべし(定價五十錢)

●清國地名箋　太田敬孝編　春陽堂發行

邦人著はす所の清國地理書頗る多きも地名に漢音を副ふるもの極めて少きを慨して清國に游びて專心苦學せる有爲の少年太田氏の編する處なり蓋し稗益する處少なからざるべし殊に同文字に其地々々の發音を付して其土地に於ける稱呼を示せるは頗る多とするものあり例すれば江、州、九等の字は北方にてチヤヌ、チヤチ、チユーなれども南方に於てはキヤヌ、チユー、キウなるが如し然れども少しく不審なるはン、さヌとの使用法なり、序文に眞文、元、寒等の音はヌの語尾を有すれども云ふと云へるは　淸、中、登、寧等の音の如き重き音に於てよく似たれども眞、文、寒等の如き輕き音にてはンの方がよく似たるべし畢竟細に別たれども思ひ附きまたるまゝ一言す、兎に角有用の書なるべきは事實なり、(定價無記入)

●木戸松菊　川崎紫山氏著　春陽堂發行

維新三傑の一人木戸孝允氏の人物經歴を叙したるものにして前編後編の二に分ち、前編には先つ第一松菊第二家訓第三松陰と松菊等より十三編王政復興と松菊と二十三編松菊の人物を評論して團圓は至る、未だ充分の材料を蒐集し得たりとは云ふ可らざるが如きも文章の例の紫山一流の遒麗人を悅はしむるものにして一讀快と稱せしむべき所太だ多し、(代價金三十錢)

社會雜事

●訪問食俗の改良　板垣伯等の組織する中央風俗改良會調査部會には、訪問風俗の改良につき會議の際左のヶ條を議決したり、

一凡そ他人を訪問して用談を爲さんとするときは急用の場合を除き午前九時より十一時午後は三時より五時間に於てするを常式とす但面會時を定めたる人に對しては其日時に訪問すへきは勿論とす

二前項の時間に訪問して用談を爲さんとするときは豫め其日時の約束を爲すを常式とす

三用談は必ず三十分間以內に終ることを心懸け假令談話興に入るも長座せざるものとす

四回禮又は挨拶等の爲め訪問を爲すときは名刺を置くに止むるを常式とす若し面會を爲すことあるも成へく速かに辭し去るものとす

五訪問の際には客室に入るも外套手袋を着用し帽を手に持たる儘對話するを常式とす

六訪問の客に對しては特に茶菓を差出さゞるを常式とす

●生命保險の事業　米國に於て最も盛んに行はるゝ米國諸生命保險會社の保險契約金額は總て七十七億五千九百七十八萬九千五百二十一弗之に次ぐは英國にして三十六億七千百四十八萬四千七百六弗獨逸は第三にして十七億〇九百四十一萬八千五百六十六弗其次は佛國濠洲墺國諸威及び瑞典露國和蘭瑞西にして詰り歐米諸國生命保險會社の總契約金は百五十六億九千二百三十二萬〇〇七十九弗

●巡査の年末賞與金　東京市巡査の年末賞與金は毎年七八千圓

にして月俸の半額位よりは給與せらるとを得ざりしが十二月は府會の決議に依り總額一萬六七千圓餘を賞す

●**俳優叙勳**　川上音二郎佛國政府より三等勳章(オフ井シエー、ダカデミー)を受領す

●**海事倶樂部**　東京に於ける海事關係の諸會社及有力なる海事業者等率先主唱し京橋區木挽町二丁目十三番地山科海軍工業所に假事務所を設け海事一般の智識を養成し併せて海員救護に關する趣旨を全ふせんとの目的を以て一大海事倶樂部を創設し廣く會員の募集に盡力せり其事業は

(一)倶樂部組護に關する一般の施設
(二)海事に關する通俗講演
(三)海事に關する雜誌の發刊
(四)海事に關する世界新聞雜誌の備付
(五)海事要項調査
(六)海國民特別任務調査

●**端艇の大西洋横斷**　瑞西國人ピーター、ジョハンセンなるものは十二才なる子息さ共に端艇に乘り込み八月廿日ジブラルタルを出帆し海上何等の支障なく太西洋を横斷し十月二十一日を以て米國フロリダ海岸なるパンタゴルダと稱する處に安着せり同船は長さ僅に二十九呎幅七尺五寸の船にて右短艇は横濱にて造り上げられたるもの

●**米國の輸出總額**　昨年度に於ける米國の輸出總額は十三億九千四百十八萬六千三百七十一弗なるが其輸出國中最高位を占むるは英國にして輸出金額は五億三千三百八十二萬九千三百七十四弗なりと云ふ又其他の諸國を輸出額に依りて記さば獨逸、加奈陀、和蘭、佛蘭西、白耳義、メキシコ、伊太利、日本、濠洲、玖馬、丁抹等

●**古蹟取調會の擴張**　會長九條侯爵其他の設立に係る帝國古蹟取調會は今回會報及び其主意を公にして廣く同士を募らんとす其取調べて保存を圖るべき古蹟は(一)皇祖の神績(二)皇宮の舊績(三)皇族の陵墓(四)名教に裨益すべき舊績(五)學術の研究に資すべき古物遺績にして其古績は或は官に請ひ或は其地方の人士に讓り之を標識修與して後世に保存し猶ほ古績館を建設して古績に關する物品圖畫寫眞古器物を蒐集する目的なり

●**癩病院慰療園**　基督教徒の手に成れる同園は目黑に設けられ、目下四十名を養へり、其の起原は米國の女傳導師ミスヤングマンなる者にて日本に住する廿年、行善社を設け盛に新教を弘め、諸方の盡力により明治十七年開園式を擧行しユザンボルより每年送り來る二百磅により維持し秘密的に病者を慰するにつとめ、一方には精神的の慰安を與へ、一方には血精治療法を施し、癈者をして殆んど蘇生せしむるの感あり、其の關係者にして最も力を盡さる人々は、ミスヤングマン氏大塚正心氏等なり

●**結婚と自殺**　最近の『十九世紀』なる雜誌にアール、エー、スケルトン氏が佛國に於ける千八百八十九年より九十一年に至る結婚者、未婚者及び鰥夫寡婦の自殺の統計を擧げたり。即ち

	結婚者	未婚者	鰥夫寡婦
男	三七・四	一〇〇	七五・一
女	六七・九	一〇〇	一一六・四
平均	五二・七	一〇〇	九五・八

氏は此の統計を基礎として結婚は大に自殺を防禦する傾向の顯著なることを說き、猶ほ同年齡の獨身者は結婚者より二、七倍だけ自殺する割合多きことを說き、終りに(一)結婚は自殺の欲望を禁ずることを爲し、(二)

篩夫寡婦の影響は獨身の影響と著しく相違せず、(三)離婚は非常に自殺に導き易く、(四)家政の困難なる事情は女子より男子をして多く自殺せしむることを列擧せり。

教育時報

●帝國東洋學會　同會は十二月十二日上野精養軒に發起人會を開き事業の着手方法を議し高楠博士諸般の報告をなし會長に常磐井堯猷氏を推選し發起人十七名は更に會長の指命に評議員となり本郷四丁目五番地に編輯所を設け梵漢字書、漢梵字書編輯事業に着手することを同會の報告は英文雜誌オリエント紙上に載することとせり常磐井會長は自から高楠、南條二博士と右編輯事業に從事し氏が研究の結果は續々オリエント紙上に報告することゝなれり又右編輯費として高田派は金四萬圓を同會に寄附す

●高等教育會議　十二月十五日より向一週間、高等商業學校講堂に於て開會其の諮問案の重なるものは、高等學校令、專門學校令、師範教育令、中學校、高等女學校、師範學校の學科課程改正案にて右諸學校令改正案に就ての要點は高等學校を純然たる大學の豫備校となす事、高等學校程度の法、文、理、醫、美術、音樂、宗教等の學校は、專門學校令の下に於て管理する事、師範學校生徒の種類を、自費生、給費生、半自費生、半給費生の三種となす事等なり

●文部の豫算　文部省に於ける三十四年度豫算概算高は三十三年度に比し格別の相違なく即ち六百五十餘萬圓にして新事業費として見るべき者は嚢に大藏省に於て全然刪除せられたるの結果前記の額に止まりしが都合に依りて高等學校增設に就て追加豫算として少くとも百五六十萬圓を請求せんと云ふ

●言文一致會の決議　去月同會は兩院に向て國語調査會の組織を完成し言文一致の實行普及を國家事業たらしむべき議を請願すると共請願は言文一致を用ふべきことを決議せり

●學制調査會の組織　文部省は愈よ本年度に於て學制調査會を設置することに決し當期の議會に追加豫算として其經費を要求する筈なり而して其組織の大要を聞くに總裁會長副會長各一人幹事二人委員十五人を以て組織し會長には年金三千圓委員には同一千圓の手當を給與し內閣に屬して專ら學政制度の調査をなさしむるにあり會長には久保田讓氏其撰に當らん

●國語調査會　文部省內に於ける、國語調査委員會は、曾て委員の決議を以て、國語調査會組織に關する新意見を、文部大臣に提出せしが、同省に於ても大に同意を表し、直に其の意見を採用して、本期の議會に追加豫算として經費を請求する手筈の由なるが、其の組織方法を聞くに

一、國語調査會を內閣に隷屬せしめ、法典調査會同樣の制に依る事。
一、調査委員を廣く朝野に取り、充分の調査を盡くす事。

の二ヶ條にして、假令其の調査年限の長引くことありとも、其の經費に差支へなき樣にし、以て此の國家的大問題を解決すべしといふ。

●小學教科書の數　今全國就學兒童の數に依り之に要する教科書の冊數を聞くに讀本、修身書、習字本、地理、歷史の教科書合せて一千五百萬冊を要すべしと

●小學校教員の健康保護　文部省に於ては過般來各府縣廳に命じ、小學校教員の健康診斷を行はしめつゝあるが、東京、大阪、京都等を始め、何れも多年其の職に在るものは、肺患者或は氣管等に故障あるもの多數を占め、甚しきは身體衰弱し、精神にまで影響を及ぼすものす

らあるを以て之に關して種々取調べ中なりといふ。

宗教彙報

●縣會補助を決議す　福井縣會は全市佛教中學に毎年二千圓の補助を決議す

●ゴルドン氏　曾て同志社に於て傳道事業に熱心を以て本邦人に記憶されし同氏は此程本國にて長逝せり

●暹羅王の佛教圖書館　暹羅國駐在の稻垣公使より今回同國王陛下が佛教圖書館を建設し日本の各宗派の佛書を蒐集せらるゝ由を報じ來れり

●アイヌ人と基督教　明治十五年より今日まで北海道の土人にして洗禮を受けしものは千百五十人、ジョンバチエラー氏が初めてアイヌ人を訪問したるは明治十一年なり

●管長交代　十二月一日より權大僧正服部日諦氏を本門法華宗管長に定めんことを内務省へ願出で認可

●日本メソヂスト教會の教役者の俸給は來年度より半減する旨カナダ本部より通じ來る

●眞宗大學研究科生　京都大谷派同校の研究科生研究題目は左の如し

龍樹菩薩を中心として印度佛教　楠龍造
唯識　曾我量深
宗教と教育　近藤純悟
佛教倫理　岬徳龍
釋尊の傳記及佛教と外道の關係　多田鼎
支那學と佛教との關係　安藤州一
一乘教　佐々木月樵
倶舍及唯識　藤田觀龍
日本之淨土教　土井惠鎧
倶舍論を中心として少乘教　舟橋水哉

●宗教談話會　片岡健吉、植村正久、西原清東、根本正、江原素六の五氏の設立

●「大學傳道」　福音同盟會にては運動の機關として毎月二回「大學傳道」と題する新紙を發す

●「精神界」　清澤滿之氏の主筆にて發行

●財團法人設置認可　西本願寺護持會財團法人設置の事は内務省より認可の指令あり其財産は百三十萬八千圓の資金を以て布教、興學の振張を圖るにありて同財團設立事務取扱委員に利井明朗、赤松連城、水原慈音の三氏任命せらる

●大谷派本山の本年度豫算

甲部（教學費）　一万三百五十圓教學部費〇一万八千圓教學所費〇六千三百五十六圓教場費〇三千三百八十圓布教補助費〇四千七百廿二圓軍隊布教費〇七千七百廿八圓教誨費〇三千三百五十七圓北海道事務費〇八千二百九十七圓臺灣南清布教費〇二千二百八十圓清國布教本部費〇六千五百七十八圓清國布教費〇六千二百八十二圓韓國布教費〇五千六百六十圓高倉大學寮費〇二万二千五百二圓眞宗大學費〇五千五百四十二圓教導講習院費〇二万千四十五圓十三錢京都中學費〇一万千四百十圓四十錢東京中學費〇八百七十圓馨香舘費〇二千百二十圓留學生費〇千六百六十圓編纂費〇千百二十圓教育奬勵費〇合計十五万五百六十五圓五十五錢

乙部（經常費）　一万五千二百圓法務費〇三万二千圓内事費〇九万二千三百五十五圓九十錢九厘寺務本部所費〇四千七百五十七圓議制局費〇合計十四万四千四百十二圓九十六錢九厘

右の外甲部豫備金九千と乙部豫備金九千を合せ總計三十一万千九百七十八圓四十九錢九厘にして前年度より三万八千餘を減せり

月島丸遭難吊慰金募集謹告

商船學校練習船月島丸の踪路を失するや朝野力を戮せ百方搜索の手段を盡たるも今に至るまで杳として消息なし然れとも之を船長の遺骸其他漂流物件に徵するときは該船は業に既に言ふに忍ひさる悲酸の運命に陷りたるにあらさる邪若し靑年有望の子弟七十有餘人及其敎育の任に當り乘組職員其他水火夫等にして空しく海上雄飛の材を懐きて一朝魚腹に葬られたりとせは眞に是れ海國の一大慘事にして吾人豈に之を默視するに忍ひんや是に於て下名等相謀り廣く世人の義捐を募り之を吊祭慰籍の資に供し以て遭難諸士幷に其家族に同情を表せんと欲す江湖同感の諸君左記の條項を諒せられ多少の出捐あらんことを希望す

明治三十三年十二月

月島丸遭難吊慰會

發起人（イロハ順）

子爵 伊東祐亨　男爵 岩崎久彌
加藤正義　伯爵 吉井幸藏
中橋德五郎　山縣伊三郎
田健次郎　男爵 有地品之允
男爵 赤松則良　淺野總一郎
齋藤實　三井元之助
莊田平五郎　男爵 澁澤榮一
平山藤次郎

一 本會事務所は商船學校内商船學校々友會を以て之れに充つる事
二 發起人中に於て特に委員を選定し諸般の事務を處辦せしむる事
三 義捐金は明治三十四年三月三十一日限り本會事務所幷に左記の場所に拂込まる〻へき事

東京市麹町區八重洲町一丁目一番地
日本海員掖濟會本部

橫濱市海岸通五丁目二十番地
日本海員掖濟會橫濱事務所

東京府荏原郡品川町利田新地八番地
日本海員掖濟會品川事務所

大阪市西區本田町通一丁目番外百一番屋敷
日本海員掖濟會大阪事務所

神戸市東川崎町五丁目百六十五番屋敷
日本海員掖濟會神戸事務所

函館區鍛冶町三十一番地
日本海員掖濟會函館事務所

長崎市樺島町三十九番戸
日本海員掖濟會長崎事務所

赤間關市田中町十一番戸
日本海員掖濟會馬關事務所

廣島市宇品町海岸通四丁目
日本海員掖濟會臨時宇品出張所

東京麹町區八重洲町一丁目一番地
三菱合資會社
仝 各支店

東京市日本橋區新右衛門町十五番地
三井銀行
仝 各支店

東京市日本橋區兜町
第一銀行
仝 各支店

東京市日本橋區小舟町三丁目
第三銀行
仝 各支店

東京市日本橋區萬町
第百銀行
仝 各支店

四 義捐者の氏名及金額は便宜新聞紙を以て廣告する事
五 吊祭慰籍の方法は發起人の協議に依る事
六 若し幸にして船躰無事乘組員中生還する者あるときは前項の協議に依り適宜慰勞を爲す事
七 義捐金の出納決算報告は新聞紙を以て廣告する事

帝國東洋學會

本會は、東洋諸國に於ける言語、文學、宗教、哲學、歷史、地理、神話、俗話、工藝、美術等に關する史實を現在の古文書に依りて研究するを目的とす、

現在の文書中、その材料最豐富にして、曾て學術的講究を經ざるものを一切藏經とす、その卷帙の夥しき實に八千五百三十四卷、加ふるに藏外の諸書を以てすれば、殆萬餘に達せんとす、殊に我國には本邦選述大藏經の外、宋、元、明、清、麗の各完本の現存するありて、佛教典籍の完備殆世界無比と稱すべし、抑漢譯藏經の含蓄せる所は、他國現存の諸藏と稍その趣を異にし、獨宗教、哲學のみならず、諸般の學藝に關する材料を包含して餘さず、學術攻究に資する所亦實に大なり東洋の一大古學叢書と稱するも、亦過言にあらざるなり、而して之が對照研鑽の用に供すべき諸國異譯の經典も亦その數多く、南方佛教諸國の經藏は、既に印行流布する所となり、暹羅藏經全部、及龍動巴利書出版會社にて發行せるものも既に我國に入り、北方佛教の典藉たる西藏藏經も之を得る將に近きにあらんとす、印度ニポール現存大乘諸典は、曩に歐洲にて出版せるものゝ外、現に露西亞帝國大學內大乘書出版部、及印度カルカッタ府佛教出版會社に於て修成せるものも多く、蒙古滿州亦夥多の譯書を有す、此等の諸書を對校し、その材料を自由に運用し、攻究討尋の結果を世界の學術界に貢献し得るの地に在るもの、獨我國學者あるのみ、故に我輩自ら揣ず、大方諸君の贊同を得て、玆に本會を組織し、內、藏經の內容を攻究し、諸般の材料を查定類聚し、外、異譯の諸聖典と對照考覈し、その結果を編纂大成し、以て會の目的を達する第一段となさんと欲す、

本會は、藏經調查の事業終るを竣ちて、漸次他の文書の攻究に及ぶものとす、

本會事業預定

第一　印度百科叢書編纂

一、言語、文學	二、大乘諸派	三、小乘諸派	四、波羅門教
五、ジャイナ教其他	六、六派哲學其他	七、歷史、地理	八、天文、算數
九、藥物、醫卜	十、神話、俗話	十一、工藝、美術	十二、經、律、論、各書批評
十三、印度、支那、日本、朝鮮、西藏に於ける佛教の特殊發達			十四、雜纂

第二　字書編纂

一、梵漢字書（大小） 二、漢梵字書（大小） 三、一切經事文索引字書 四、印度事物起源
五、佛教人名字書 六、和譯佛教字典

第三 論文出版

一、會員の論文にして學術上有益なるものは、之を獨、英、佛、等の諸語に譯し、各學會に頒布す、
二、外國學者の論文にして、本會の目的に適切なるものは、之を和譯して會員に頒布す、

第四 原本調査

一、國外現存梵本採集、購求、調査 二、國內現存梵本探尋、借覽、調査 三、本有今無梵本調査

第五 典籍出版 印度、支那、日本の選述にして、殊に學術上價値ある書籍の出版

第六 原譯比較研究 巴利原本、梵語原本、西藏譯、支那譯、蒙古譯、滿州譯、等に現存せる同原の聖書、若しくは同問題に關する對照批判

第七 質疑應答

第八 日本佛教學書組織

上示の事業は之を八部門に分つと雖、各部門同時に開始するものにあらず、本會資金の多寡に應し、漸次之に着手するものとす、寄附金は二種に分ち、本會總基金として寄贈すると、各部の事業を指定し之に對して寄附するとは、喜捨主の隨意たり、如此にして成立を助けたる團體若くは個人は、賛助會員として永く其芳名を保存す、

本會事業の報告は、各種學術雜誌、其他、新聞、雜誌等に掲載し、若くは別に之を印刷配分することあるべし、

明治三十四年二月

東京市本郷四丁目五番地

帝國東洋學會

發起人 （イロハ順）

常盤井堯猷　坪井九馬三　井上圓了　藤島了穩　島地默雷
渡邊國武　南條文雄　大內靑巒　澤柳政太郎　島田蕃根
渡邊龍聖　村上專精　前田慧雲　三宅雄次郎
高楠順次郎　上田萬年　松本源太郎　三上參次